

六
ッ
川
夜
話

本稿は鈴木先生が、横濱高工時報紙上に「六ツ川夜話」と題して、連載されてゐる處世訓、回顧談、時局談、隨筆等の集録である。

而して昭和八年十二月二十日發行の高工時報百八十七號に初回を載せられて以來、號を追ひ回を重ねるに従ひ、興趣愈々深く、余情汲めども盡きず、遂に昭和十六年十一月十九日發行の時報三百五十號紙上を以て、六ツ川夜話百五十回と言ふ輝くべき記録に到達し最近に於ては既に百六十回を超えて居る。

掘られた道

これから霜解けになつて、道路がそこゝで掘り返されるのは、困つたもので、況んや掘り返した道が、そのまゝ打捨り放しにして置かれるのは、更に迷惑千萬である。掘り返さへすれば、それで自分の仕事は濟んだ、と言つた態度では甚だ困つたものである。掘り返したことによつて、もとの道よりよくするか、少くとも、もともと通りに土を固めて置いて貫はないでは、通行人は全く困りものである。

疑獄事件はいろ／＼と掘り返されたやうである。然しこれを掘り返しただけで、一體何の効果があるであらうか。どこに世道人心を益するところがあるだらう。益がない許りではなく、反つてその反動が幾多の悪材料となつて社會の表面に現れてゐるやうにも思はれる。今次の教育界の不祥事にあつても、校長を引張り視學を引張つて見たところで、それは抑も末の問題である。源を清ふせずして、下の流れを清めんことは愈々難い。

今次の問題に當つても源である、府當局文部當局に果してそれ丈の覺悟と自信があるであら

うか。徒らに事の成行きを拱手傍觀し、引張る丈け引張られれば禍根は自ら斐除せられるものも考へてゐたならば、それこそ飛んでもない考へ違ひなのである。

この際當局、當事者の持つべき覺悟は何んであるか、それは問はるゝまでもなく、我々に下し賜つた勅語と詔書を奉戴して、よくその實踐透徹を計ることである。この大本を忘れ、その職責を忘れてゐたのでは、今次の問題も單に掘り返した道路そのものに過ぎないのではなからうか。

(八・一二)

思はぬ快報

頃來文部省から、卒業生の現況調査の依頼があつた。そこで卒業生全員に對して、その調査に要するカードを送る序を利用して、私は久濶の挨拶を述べ、更に我非常時日本の覺悟、特に工業家の重大性に就いて一言した。これに對し思ひ掛けない多くの返書を受取り、彼我の交驩を盡し得たことは、望外の喜びであつた。

さてその返信の多くは、言ひ合はしたように、母校の教育方針を禮讚し、或者は體驗した鈴木

イズムを、更に他に傳導してゐるところだとも報じた。その是非はさて置いてかう言はれることは、言ふ者にしても、言はれる者にしても決して悪い氣持ちのものでないことは確かである。

又或者は破格の昇進をした話や、研究を纏めて出版計畫のことや、エポックメイキングの新事業に着手した話とか、國防第一線に立つ軍需工業に勇躍してゐる實狀報告等、一つとして愉快なニュースならざるものはなかつた。

これ等を讀んで、我校の卒業生は、實に明朗であり、屈托なく世渡りをしてゐる人々の多いことを、沁々感知し得たのであつた。これは些か私の學校の教育方針の、然らしむるところではなからうか、と考へて自負を禁じ得なかつた。

中には私の論じた滿洲問題に對して、更に歩を進めて我農村問題に言及すべしと言ひ、この問題に對する所見を伺ひたいと突込んだものもあつた。

こんなところも私の學校の卒業生らしい元氣さであり思はず微笑させられた私はこれ等の返信によつて、新春早々近來の好讀物を提供せられたことを深く感謝してゐる。

(九・一)

— 4 —
恩師の因縁

一月二十三日は、恩師故新島襄先生の第四十五回記念日に當つて、在京の同窓相會した。その席上私は先生並に母校に對する回顧談を試みた。その談のうち一二を摘記して見る。

私の在學當時、恩師の一人であつた浮田和民博士の試験振りこそ、透徹した信念の下に行はれた。先生の人格はこの一事で躍如たるものがあつた。

試験の時間になると、先生は學生の一人々々に一本の紙捻りを渡された。その紙捻りを開くと番號と試験問題が書いてあつた。學生はその籤の番號順によつて、自分に與へられた問題に就いて、口頭で答へをなせばよいのである。

先生は歴史を教へられたのであるが、先生の授業も試験も實に愉快で少しも他動的に強ひられるところなく、自ら復習豫習する氣持ちが湧いて來た。

同時に先生の學課に對しては、試験とか採點とか言つた觀念は少しも起らなかつた。恐らく先生も採點などはされなかつたことゝ信じてゐる。先生が今日、私の教育方針に最も共鳴され

る一人であることも、蓋し因縁の浅からぬ話である。

當時私は寄宿舎に居たのであつたが、學校は寄宿舎に對して一切無干渉主義を採り、全く學生の自治に委ねられ、只だ定めとして一學期一回全員の部屋を交代せしめて、公平を計ることの外は、何等の束縛を加へなかつた。

眞の人物、眞の人格を獲るには、飽くまで自覺が第一義であり、訓練を第二次としなければならぬ。即ち學校は學生を自覺に導き、學生は自治、自修以つて自ら自身を訓練すべきである。時弊に鑑み特にこの一事を高調したのである。

(九・二)

向學心の是非

工業大學の入學志願者が、今年は記録破りの多數であるそうだ。飽くまで向上の志を續けることは一面洵に結構なことではあるが私は餘り賛成しない一人である。

人間と工業製品との違ひは、工業製品が最初の段取りから最後の仕上げまで、人手にかゝつて出來るのであるに反し、人間は徹頭徹尾人手で拵へ上げることは出來ないことにある。

學校生活を延長し、上級學校に入學さへすれば、それで人間が出来、偉人が出来上るものとの考が、相當根強く行き渡つてゐる。その結果學校當事者は、其任務たる誘導誘發を忘れ、學生はその目的である自治自修を忘れてゐるものが決して尠くないのである。

學校の任務、學生の目的を忘れた、徒らなる學窓生活ほど、本人にとつて無駄なことはなく、國家にとつて不經濟なことはないのである。

私はこの意味で、時弊を排し、自ら身を挺して誘導誘發の任務に服し、學生の自治自修の手引となり、エンジンヤーとしての「いろは」を會得せしめたいと念願してゐる。

従つて學生諸君は、學窓を出れば、自らの體驗體得に努め、自力自生の生活に邁進すべきである。この意味の基礎工作は在學中に既に習得せらるべきである。果して然らば、何を苦んで上級學校に入學するの必要があるか、私は甚だ理解に迷ふのである。尤もこれは自力自生、獨立獨行の能力ある人材たる事を前提としての話である、若し不幸にして其の能力と自信なき者は、その缺陷を補填すべく、更に一つの學歷を追加し、以つて補強工作とすることも、或は一圖に排撃の出来ない處世法であるかも知れない。

荒木貞夫大將

荒木貞夫大將は、私の愛撫するところの煤竹の杖を見て、「軍人も剣を抜かないようにしたいと思ひます。この竹の杖が指揮刀となるのが理想です。」と語られた。大將を目して、單に鼻つ柱の強い一介の武弁だと思ふ者のあるのは大きな間違ひである。

大將こそ眞の平和愛好者であり、笑へば子女も懐かしむ大和武士の華であることは、一度親しく接した者のいづれも等しく印象づけられるところである。

大將の來校を校門に整列して、出迎へた在郷軍人團の前を通り過ぎやうとして、一兵の胸に飾り輝いた、勳章を目ざとく見て何の勳功で貰つたかと尋ねられた。

更に歩を移して一老兵の前に立寄り、お前はいくつになつたかと尋ねられ、日清、日露の兩役にも參加したであらうその風采をじつと見詰めて、言外に感慨の溢れるものがあつた。私はこの繪巻物のやうな情景に接して、思はず眼頭の熱くなるのを覺えた。

大將の來校を迎ふべく六郷河畔に赴き、隨伴して本牧八聖殿に向ふの途、櫻木町驛に立寄り手

洗所に入つて出て來ると、驛構内は大將を迎へんとする人々で埋められてゐた。

何んの豫告もなく、豫知するところもなく、然かも寸時にしてこの人群となつたのであつた。迎へた人々は期せずして一齊に脱帽して敬禮をした。その面上にはありありと、非常時を背負つて、病を獲た大將に對する感謝と、同情の眞剣さが輝いた。

私はこの瞬間、大將の抱かれる救國報公の赤誠が、力強く國民の間に反映してゐることを確認せざるを得なかつた。そうして同時に邦家の爲め實に心強く感じた。

(九・四)

メートル法

メートル法は學術的根據に出發し、尺貫法は實生活の上に打ち建てられたものである。兩者はその根柢に大きい開きの存するものである。この根柢的相違が、メートル法強要の不合理を生むのである。

メートル法を強要することによつて、第一に問題となるのは、土地臺帳の變更である。これは我古來の美風を根柢的に變革することであり、且これに要する費用のみで數千萬圓を費さねばな

らぬ。斯くの如き費用は全く冗費と言はねばならぬ。

又各社會、各家庭に於ても、徒らに計量觀念の錯綜を來し、諸種の混亂を生むことは火を視るより瞭かである。

然らば何故にこのメートル法を強要せねばならぬかと言ふと、その理由は單なる國際聯盟の申合せと言ふことである。

然し實情から言ふと、英、米兩國は封度磅を用ひてゐる。世界の貿易上から見てもこの兩制度が九割弱を占めてゐるのである。して見れば例へメートルを用ひても、再び換算の必要に迫られることは説明するまでもないことである。

過去の歴史に於て、我民族的傳統を度外視した事件は屢々あつたことである。然しその歴史その時代を凝視すると、いづれもそれは亂世であつた。そうしてこの亂世の次に來るものは、必ず民族的傳統の復興を叫んで起つた革新であつたのである。

我大正年間、西洋思想の最も謳歌された一時代であつた。改造と改革の美名の下に民族的傳統が、等しく没却せられたのであつた。度量衡問題の如きも即ちその類例の一つであつたのである。

然し今日は既に復興の時代であり、改新の時代である。我民族的傳統を一朝にして覆し去るが如き畢變は到底認容せられるべきではない。若し眞にメートル法の採用を企圖するならばそれは漸を追ひ我國民の消化吸収を待つて後のことである。

(九・五)

教育改革難し

何時の世にも改革論者と改革論は存在する。就中教育界に於ては、畑が畑丈けに随分議論の多いところである。行詰教育の打開が叫ばれ、劃一教育打破が叫ばれ、又内閣の更迭する毎に教育制度の改革が問題となり、政黨は其主義綱領の内に常に教育制度に對する主張を掲げてゐるのである。

然し未だ會て夫等の機關によつて、我教育制度は何等目新しい改革を創造したことはないのがある。

近年に於て私どもの稍期待をかけたのは、文部省の教育制度調査會であるが、これとても愈々蓋を開けて見ると、その改善を目指す根本が第一不明であつた。只だ手段として、修業年限を延

長するとか、或は學校の程度を引上げるとか、教職員の待遇を引上げるとか言つたもので、よし之等の手段が盡されたとしても、根本問題である教育制度の改革と言ふ點から見ると、本源を逸した派生的の問題のやうに考へられるのである。

問題は根本である。その教育的精神をどこに据えるかと言ふことである。その根源を定めないので、いくら末葉の問題を論じ合つたところで、決して教育制度は改革せられる筈はないのである。然らば何故斯かる軌道外の問題にのみ走つて、肝腎な軌道上の問題が議せられないかと言ふと、それは外でもない。この論議の提案者が教育者であるからである。

彼等教育者は、まづ自身を考へるであらう。そうして次に自分の學校を考へるであらう。自身をよりよくし、自校をよりよくすることが最高の目標であるのは不思議はないであらう。この立場、この見地から編み出された議案のうち、に嚴肅な根本解決を求むるのは、寧ろ求むる者を愚となさなければならぬかも知れない。果して然らば教育の改革又難い哉である。

文教と文政

學校はその種類によつて、夫々文部省の學校令がある。小學校令、中學校令、專門、大學の各學校令がそれである。この學校令を見ると、どの學校も獨立したものであり、夫々の學校で教育は完成する仕組みとなつてゐる。

然し今日の實情よりすると、そのいづれもが、上級校に對する豫備校の觀を呈してゐる。就中中學校並に高等學校は其の最たるものである。

教育改革の根本は、正にこの豫備校根性を排除することである。それには學校を豫備校化せしめぬ用意がなければならぬ。然らばその用意は何かと言ふと至極簡單に片付け得る。即ち各校はその入學資格を定めるに當つて、或特定の學歷を條件とせず、何人と雖も入學試験に合格すればよいと言ふことにするのである。

更に又各校の有する特權一切を剝奪して實力主義とするのである。例へば兵役上の特典とか文官、辯護士資格とか教員資格とか言ふものを廢して、一切國家試験によつて採用することにす

のである。

この結果最も必要性のなくなる學校は、高校、高師及文理大である。それは教育の普及向上した今日に於ては、特に教師を養成する必要がないからである。教師養成の必要な時期は、教育の進歩しない時代か、若くは教師になる者のない人材拂底時代である。

兎に角この二三の點が若し實行し得るとすれば、我教育界は大いに面目を一新し得ることと考へる。然しこの實行は文政の人及び機關では到底望めない。文教の人及び機關の出現を待つより外はない。

(九・六)

一茶と元帥

三溪原富太郎先生は、頃來自ら彩管を揮はれた一幅を特に私に贈られた。先生はこの一幅を私に贈る爲めに畫かれたとのことであり、私は二重の感謝をしてゐる次第である。

繪は先生が俳人一茶を追慕せられて、漫遊の途次信州柏原在なる、一茶が晩年居住した土地を親しく訪れ、畫趣の動くまゝに筆寫せられたものである。

その構圖は、玉蜀黍畑に圍まれた小さい土藏に配するに、子守りの娘と、收穫した玉蜀黍を背

負つた女房と、鍬を杖にして立つ老農夫を畫かれたもので、畫亦俳趣津々たるものである。殊に畫中の老農夫が、至つて肥滿短軀で何んとなく私自身に似つかはしいのも、甚だ親しみの湧くことである。

この幅には繪の外に、先生の達筆な賛が細字で認められてゐる。

その文意は次の様である。一茶は家貧にして、身には襤褸をまとひ、屋漏に堪へずして、戸棚の中に起臥してゐた。時に領主百萬石の加賀侯が、この地を過ぎんとして、村吏をして一茶を招かした。が一茶は其故なしとて應じない。村吏は身に禍の及ぶを恐れて、懇請やまぬので一茶も澁々伺候した。

そうして請はるゝまゝに直ちに筆を執つて詠んだ。

なんのその百萬石も笹の露

侯の左右は忽ち色めいて、一茶を拉し去らんとした。然し侯はこれを押しとどめ「よくぞ予を戒めて呉れた」と厚く犒ひ時服一着を賜ふた。一茶は辭して門を出づるや、拜領の時服を村吏に與へて再び顧みるところがなかつたと。

私はこの一幅を朝夕居室に掲げ、日々感興新たなるものがあつた。時、計らずも東郷元帥の計

に接し、元帥の生涯を追憶して、あの輝く武勳の蔭に深く無言の俳境を藏せられたことが元帥をして更に偉大な存在たらしめたものだと考へ、一茶と元帥の彼我對照によつてこの一幅の意義を價值づけたのであつた。

(九・六)

二 高 回 顧 斷 片

近刊の雑誌文藝春秋に、土井晚翠先生が二高回顧の文中、當時文藝部長であつた先生が、同部主催の演劇開催に、私が反對して問題を惹起した経緯が書かれてゐるそうである。

私も先生と二高に職を奉じたことがあり、思ひ出は仲々深いものである。回想先づ頭に浮ぶのは日露戦役當時のことである。軍籍にある職員が全部召集された爲め兵式體操の課目を行ふことが出来なくなつた。

そこで私は中川校長の許を得て全校學生に向つて、この非常時に、兵式體操を廢することは洵に忍びない。教官は無くとも學生の自治で繼續すべしと激勵したが、其總意を動かすに足らなかつた。私は然らば實行によつて、所信を貫かんとし、先づ私の受持ちであつた、三部の學生を糾

合して決行しようとしたところが、中川校長は三部丈けの單獨實行は、全校統制上面白くないと反對された。

私はそこで教頭の三好愛吉先生に對し、「私は既に三部を糾合した。残りの一二部を説得するのは貴下の任務である。」と迫つたのである。ところが流石三好先生で私に一言の諾否さへ言はれず、そのまま仙臺第四聯隊に赴かれ、自ら教練を積んで歸校された。その結果生れたのが、有名な二高の自治體操であつた。

三好先生はその後、二高の校長となられ、又東宮傳育官長となられた。今は故人であるが、先生がこの時の態度は今尙私の敬服するところである。

この自治體操は、非常に好評を博し當時の文部大臣久保田讓氏が、來校された時は學生自治の下に分列式を行つて大臣から絶讃を受けたのであつた。

この時の學生の指揮官は、横濱高工の現校醫加藤耕藏博士であつたことゝ同校の校歌を私が特に晩翠先生にお願ひして作つて戴いたことは共々往時を偲ぶ恰好の記念である。

或時二高校友會の何週年かの記念日があり、學校は一週間休んでお祭り騒ぎをしたことがあつた。

このやうな催しに對し、一週間の長きに亘つて休校すると言ふことは、二高始まつての記録でもあり、又當時の高校にも他に類例のないことで然かも中川校長の不在中のことであり、校長の與り知らぬところであつた。偶々この時文部省から松井直吉専門學校長が視察に來校して、この事を上京中の校長に報告したことから、三好先生が態々文部省へ出伺されて辯明されたことがあつた。こんな思ひ切つたことは決して凡庸の教育者には思ひも及ばぬことである。

三好先生は、いつも清貧に甘じてゐられ、時には宴會の會費にも窮せられて、先生と門を共にした私の家を訪れて、今晚の會費は私の分も出して置いて呉れと言はれたこともあつた。

然し先生は學生などから、その窮狀を訴へられると、自分の貧乏など忘れて了つて有りつ丈けの持物を處分して援助せられるのが常で、先生の貧乏は爲めに益々甚だしいものがあつた。然し先生は決してそれを苦にせられるやうな様子は見えなかつた。

只だ面白いのは、先生はこの貧乏に似合はず、大きい分不相應な借家に住まつてゐられた。これは先生が氣宇の廣大を計られる爲めの手段であつたやうである。

兎に角先生の人格は器が大きかつた。それ丈けに私は私淑もし、感化を受けるところ極めて大であり、今日猶先生の訓の甦へり來るものが多い。

天 佑 と 神 意

東日主催の下に丸ビルで行はれた東郷元帥の記念展を觀覽した。会場には故元帥の幼年時代から一代に亘る資料が所狭きまでに陳列せられ、いづれも貴重な史料であつた。

元帥の書も澤山あつた、筆蹟はいろ／＼不同で、甚だ良く書けてゐるものと、又それほどないものもあつた。この書かれた筆蹟にむらのあることは、元帥が専門家でないことを語るものであり、そこに又言ふ可らざる氣韻の溢れてゐる所以である。

又元帥の選んで書せられた、字句は殆んど字意が一貫してゐる。或は「有其誠則其神」と言ひ或は又「至誠通神明」とあるが如く、其他の字句も、天伴神意とか忠君愛國と言ふ意味を盛られたものである。以つて元帥の人格のほどを偲ぶことが出来るのである。

私は元帥の國葬當日、全校學生に對し日露戰役に於て、下し賜つた勅語に對する元帥の奉答文に屢々天佑神意の文字が使はれてゐるのは、これ即ち元帥の全人格であることを高調したのであるがこの展覽會を觀て益々私の信念の通りでないことを自信つけたのである。

又元帥の書幅中の文字に思無邪と言ふ句を發見した。私は日常の戒めとして思邪なしと稱ふること既に多年であつた。偶々相通するこの一句を元帥の筆蹟に見出したことは非常な愉悅であつた。

私は元帥を追慕する餘り、山庭にさゝやかながら元帥を祀る、東郷神社を建立して元帥の三十日祭を期して鎮座式を執行した。爾來早朝參拜して、邪念を拂ひ妄想を退け、只管元帥の遺徳に浴せんことを自ら努めてゐる。

(九・八)

益田孝男を訪ふ

初秋の一日、益田孝男を小田原下板橋に訪れた。男は九十歳に近い高齢であるが經世濟民の志益固く、邸内を其實驗室として、あらゆる科學を自ら解かれつゝあるのである。

其意氣は壯者を凌ぎ、其志は常に時代を先達して男の頭腦は明哲、處斷は冷徹である、一世を誘導せらるゝには洵に相應しい經綸家である。

廣袤三萬坪に餘る邸内ではあるが、農畜産加工等夫々色々な目的の下に使はれてゐる。特に工

業館は全國の重要工業品を蒐集され、宛然たる展覽會の觀がある。

導かれて古風な調度の洋間に、和裝の男と對座すると、極めてくだけた調子で語られた。

男が事業に手を染められた抑もが、横濱に於ける茶の貿易であり、その後三井の事業に關係するやうになつて生糸に手をつけられ、その關係で原三溪先生とは特に御交際の深いと言ふことのお話であつた。

それから我貿易が生糸時代から、加工工業時代に移り、實に目醒しい發展をしてゐる。その例として、男が去年紐育の新聞に、或日本人が投書して、

「日本は粗製品を安く賣ることを得意としてゐる。従つて其仕向地は未開の東洋諸國である。然るに米國がこの日本品と競争して、自國の高級品を賣込まうとするのは間違ひである。米國は寧ろ日本の工業助長の爲めに、機械其他の物資を供給して、日本の産業を普及し、市場を開拓せしめて後に、米國品を賣込むことこそ策の上なるものである。」と、

説いた論文を讀んで、少なからず共鳴したのであつたが、「其後一年にして我産業は全く破竹の勢を示し、粗製品どころか、優良品が世界の市場を席卷してゐる。」

と論ぜられ、そうして最近視察をせられた、名古屋方面の工場の實況を詳しく説かれ、同市で

英國品が製出され米國へ輸出せられてゐる、又その製品の優秀は職工の優秀であり、職工の優秀は待遇の改善にあるところまで進んでゐる。日本の商品は職工の冷遇によつて安いなどと思へば大間違ひであると男の舌端は正に火を吐くやうであつた。

(九・九)

財界 三 巨頭

益田孝男爵は、言ふまでもなく、三共王國の礎石を築いた人であり、今日猶陰に陽に多くの示唆を與へられてゐる、三井に益田男のある如く、大をなした財閥には、夫々偉大なる人物があつて、その柱石をなしたのである。

私の小學時代には、愛媛縣の別子銅山に、廣瀬幸平と言ふ人がゐた。この人が別子銅山の大黒柱となつて、隆運を拓いた人である。當時私たちの用ひた教科書の讀本に挿繪となつて同氏の肖像が載つてゐた。同氏の業績と人格に對して、子供ながらも私は非常に敬慕の念を高めてゐた、或時意を決して、同氏を訪れて溫容に接し、強い印象を受けて以來、私の崇拜する人物として、長く同氏を忘れなかつた。

私は大學に在學中に、偶然のことから、莊田平五郎氏に接近する機會を得て、深く同氏に傾倒した。莊田氏は人も知る如く、三菱王國の大御所であつた。莊田氏はその後、私が大學を卒へ教育界に入り、藏前高工に奉職の折同校の評議員に推されたので、再び親しく面接することを得た。私は思ひ設けぬ機會から我財界の三王國たる、住友、三井、三菱の三元老に夫々接近するところがあつた。私の傾向から言へば、或は實業界に入るべきであつたとも觀られる。そうして私が餘り望まなかつた官界に終始するに至つたことは、これも何かの運命であらう。顧ると些か感慨の深いものがある。

(九・九)

櫻井博士と井上子

櫻井銚二、池田菊苗兩博士の謝恩會が、東京會館で行はれ、東大理學部の新舊卒業者が相會した。その時櫻井博士の懷舊談があり、その一節に秘められた逸話もあり特に印象の深いものがあった。

博士は六才の時に、嚴父を喪ひ十三才の時母堂は、郷里金澤の邸を全部整理して、一家の更生

を計るべく上京せられたが、母堂は洋學の前途を見透されて、博士に英語を勉強せしめられたが、博士は忽ち秀才の譽高く、その年大學南校を受験して易々として難關を突破せられた。そして十九才にして英國留學を命ぜられ、當時化學界で有名なウヰリアムソン博士の邸に寄寓せられ、留ること五年にして歸朝された。歸朝後直ちに東大助教となり、二十六歳にして既に教授の榮位に上つたのであつた。

博士が幼にして實に一代の英才であつたことは、この一事によつて知ることが出来るのである。この話に關係して、想ひ起すのはウ博士のことである。それは井上子爵が、晩年歐洲巡遊の途に就くべく東京驛を出發されようとした時、見送り中の當時の首相桂公の令息與一氏を車窓近く招いて、嚴父桂首相に傳言した。

「歸つたらおやぢに言つて呉れ、砂糖を一杯頬張らしてやらうと云つてゐるが、耳かき一杯位しかなかつた。」と、

この警句を残してシベリヤ鐵道で、帝政ロシアに入つた。同國では國賓として大歡迎會を催した。その時の卓上演説は實に振つてゐた。日本語であつたが、散々シベリヤ鐵道の惡口を言つた末に「これは列席の高官達が嚙つたものであらう。」とやつたので通譯氏は目を白黒した。

子爵はその後倫敦に到着し、ウ博未亡人を訪問の約があつた。定刻になつて子爵が見えないので未亡人が門に出て待つてゐられると、風采揚らぬ日本人が邸前の道路をまご／＼してゐる。若しやと思つて聲をかけるとそれが當の子爵であつたので、未亡人は喜びの餘り幾度も接吻せられたと言ふことである。

子爵は不幸にして、滯英中に病を得て入院の後異境に逝つたのであつたが、その時病院の會計が「金持ちか貧乏人か、金持ちなら澤山貰ふが、貧乏なれば少し貰ふ。」と言つた。貧乏は國辱になるし、金持ちでは澤山とられる。そこで「中位だ。」と言ふと「それなら中位貰ふ。」と言ふことでケリが付いた相であるが、斯く子爵はその死後まで挿話を残された。子爵の秘書が私の親友であり、私は當時英國に居つたので特に私にとつては、忘れられない記憶となつてゐる。

(九・一〇)

村塾時代を偲ぶ

私は年少時代、十三歳まで郷里の村塾で漢學を學んだのである。この塾は私の家からは大分離れ

てゐたので、塾へ寄宿してゐた。

或日家へ歸ることの許しを得てゐるが、その日は生憎の大雨であり、途中の川が出水して危険だと言ふことであつた。

そこで私の身を案じた先生は私の歸宅を承知しなかつた。そこで私は更にその許しを受ける爲めに、先生の居室の隣室まで行つて伏座し、歸郷許可ありたき旨を認めた紙片を、無言で先生に差出したのであつた。

何故そんなことをしたかと言ふと、先生に對しては、私たち生徒は直接口を利くなどは許されなかつたのである。私は又何故強ひて願ひ出たかと言ふと、この日は私の宅の家例でお團子のお馳走日であつたからである。

先生は私の差出した紙片を見られたが、許そうとは言はれなかつた。そこで私はまた無言でいつまでも座を立たなかつた。

この無言の持久戦を見兼ねて、先生の奥さんが、傍から「大丈夫でしょうからお歸しになつては。」と口添へされたので、やつと先生の許しが出た。この時は實に嬉しかつた。

當時私は田舎の風習として、夜業をなし、草履や草鞋を作ることを勵んだ、それで今でも草履

作りの自信はある。元來私は手細工物が好きであつた。大工道具などを使つて色々な細工をするのは、却々興味をもつてゐる。この私の趣味が幸ひにして、大學へ行つてからは、實驗特に硝子細工などは一頭地を抜く妙手を現した。

まあこれは私の身體に似合はぬ、隱藝とでも言ふところであらう。

(九・一〇)

井上日召氏管見

頃來井上日召氏著すところの「日本精神に生きよ」を讀んだ。日召氏個人に就ては、同氏が屢々其門を訪れた權藤成郷先生から、間接に其人物を聽き得た以外には直接の折衝は持つてゐない。

然しこの書を通して見ると、日召氏は幼時から甚だ腕白兒であつた。嚴父はよく日召氏を折檻し、半死半生の目に會はせたものだつた。

だがその利目は一向になかつた。或時嚴父が「お前は どうして性懲りもなくいたすらをするのか。」と尋ねると、日召氏の答へは「その時は悪いと思ふが、折檻されるとそれで帳消しになつた

やうな氣がして、又悪い事をするのです。」と言ふのであつた。

この一言を聞いた嚴父は爾來一切折檻をしないで、諄々と理を説いて聽かせるやうになつた。それ以來日召氏も亦一切いたづらをしなくなつた、と告白してゐる。

又中學で數學の先生が、幾何の時間に、點とは長さも長さもないものだが集ると線となり、その假定の下に高等數字が組立てられるのだと言ふ説明があつた。日召氏はそれに對して無が集つても有にはならぬ筈だ。若し有だと言ふならそれは虚偽である。と言つて頑として、教師の説明に承服しなかつた。これは決して日召氏が、教師を困らせる意圖があつたのではない。飽くまで自らの所信を屈しないといふ、日召氏らしい眞摯さがそこに頑張つてゐたのである。

日召氏は郷里で廢娼運動に共鳴して基督教に入つたが、日露役で開戦論に組して基督教を去り、上京して東洋協會に入り、滿鐵に奉職中公主嶺で禪門を叩いて佛教に歸依し、長野に静岡に身延に難行苦行を重ねたが、その最後に到達したのが國家の改造であつた。その結果血盟團となり、五・一五事件となつた。事の善惡は評者に委せ私は只だ彼の強い信念力と精神努力に脱帽せざるを得ないのである。

池田菊苗先生

池田菊苗先生が來校され、全校生徒に對し講演をされた。世上では先生の業績を味の素の發見が代表してゐるやうに考へる向きも少なくないやうであるが、味の素の發明は、實は先生の深淵なる學識の發露した一端で、只だ味の素そのものが偶々食料品としての商品價値が大きい爲めに、大衆的に其の名を知られてゐるに過ぎないのである。先生の蘊蓄よりすれば、味の素の發明は大したものではないのである。

先生の偉大さは、常に世界の化學界を大所高所より達觀せられつゝあることである。學校に於ける講演でも、獨逸の現狀を指され、色々突込んだお話があつた、その一節に獨逸は、今人類の生命に關して種々の研究を進めてゐる。過去の學問は數學にしろ物理にしろ、化學にしろいづれも人類の生活に對する向上發展にあつたが、其根本であるべき生命に對する研究は甚だ等閑視された傾向があつたと述べられた。又その夜の晚餐會に於て、先生は私の間に答へて、我國の理化學研究は近年非常に盛んになつたことは、その提出論文の數に於て、先進國に敢て譲るところが

ない。確かに第一流の間に伍してゐる。然し一度その論文の内容を、彼我對比研究すると、残念ながら第二流に下らざるを得ないと、量と質の不均等を指摘された。

私が大學に入學した時は、先生は未だ三十歳そこ／＼の少壯學者であり、始めてイオン説を我國に取入れられたのも先生であつた。先生は實に該博な學究であり、常に國士的態度を以て、我理化學界の羅針盤たる役目を擔はれてゐる。私の敬慕する所以である。

(九・一〇)

賄 賂 教 育

財團法人文明協會發刊の冊子に、早大の宿老浮田和民博士執筆の教育制度改善に關する研究が發表せられてゐる。この論文のうちに、横濱高工の施設が詳しく紹介せられてゐるのは、私としては、自校の紹介であり、然かもそれが恩師浮田先生の筆によるものであることに、重なる喜びを感じるものである。

先生の論文中に、試験地獄のことが述べられ、これは現今の制度下にあつては、到底絶滅せらるべきものではなからう。然し事實的存在として、横濱高工は入試、學期共に試験を廢してゐる。

然しこれは何れの學校でも實行し得る譯ではない。

又横濱高工に賞罰共に無いことに對して、先生は、一體優等生制度を設け、特待生を作つたりするのは、これは賄賂教育だと痛罵されてゐる。私はこの賄賂教育と言ふ新熟語は先生によつて始めて教へられたが、面白い言葉であると感心した。私の無賞主義は、先生の如き痛烈なる意味をもつてゐない。私の考はこゝに五人の子供がある。その中の次男が何か良いことをした、と言つて次男にだけ褒美のお菓子を與へ、残りの四人が指を唾へて見てゐるとする。

これは親の情として、決して忍び得るところではない。と同時に子供の教育上決して良い方法ではないのである。私はこの親の情を殺さず、子供の心を傷けない爲めに強ひて賞を與へないのである、賞すべき行爲者に對しては、これを賞することに決して吝かなるものではない。只だその賞を表現し形式化することを避くるのである。

(九・一〇)

全能主義の没落

獨逸全能—ドイツチエランドユーバーアツレスは、歐洲大戰前獨逸國民の等しく自負したとこ

ろ、この誇りは敗戦後カイゼル皇帝が自力を過信したと、告白されるまで續いた。

大戦後俄然勃興したものは米國で、一九二四、五年黄金の洪水に恵まれた米國は、何から何まで世界一を目指した。従つて米國民の自負は、戦前の獨逸と酷似するものがあつた。然し傲るのは久しからず、其後米國を襲つた不景氣の嵐は、容赦なく奈落の底へ叩き込まうとした。近來米國視察より歸朝した人々の話を聴いても、米國の變り果てた姿に驚異せざるものはない。

私はこの秋に當つて、米國が自己の立場を眞に理解し、世界一の自惚れから目醒めて、建直しするならば未だ救はれる道は充分あると考へる。然し不幸にして、昔日の夢を現實と間違へて、錯覺を起してゐるやうでは、恐らく永遠に救はれないであらう。我國の米國全能論者には、特にこの點に反省留意を要求したいところである。

翻つて我國の現状を観ると、我工業は前代未聞の飛躍下にあり、日本精神は前代無比の作興を見せてゐる。今こそ或は日本全能を自負すべきであるかも知れない。然しこゝで自惚れたが最後、没落はそこから出發することである。自惚は没落の第一歩である。

私たちは世界の歴史を凝視して、澎湃と漲る我國のこの伸力を、飽まで強く正しく導くことに各自が自律自戒すべきであると考へるのである。

道場教育

農民道場が一つの流行となつた。近代的教育に喰ひ足りない傾向が具體化したものとも見られ、又歐米依存教育の反動が昔の寺小屋教育に逆行したとも見られるのである。

これについても思ひ起すのは、横濱高工建築學科に於ける、道場教育の打ち建てられた當時の思ひ出である。大震災直後、同校では建築學科が新設せられ、中村順平教授が同科經營の設計者となつたのである。その時同教授は、一級を三組みに分けて、甲乙丙とせられ、その一つ一つに佛語の名をつけた。その丙組はサルコツションと言つて、これは豚と言ふ意味の語である。

この丙組は、甲組の命令は何んでも守らねばならぬ。お辨當の注文や、お菓子買ひのお使ひまでやらねばならぬ。その代り甲組は丙組の學習は對しては、手を執つて親切に導かねばならない。それから乙組は、全く中立的の立場にある。尤もこの規約は、只だ製圖室内のことであり、一步製圖室を出れば一切は平等である。

この規約は甲組に選ばれた者は、別に異議はなかつたやうだが、乙丙組には不平等が勃發して

物議を生みこれが動機で級は二た組に分れ對峙するに至つた。

然し中村教授の人格と見識と理想が漸次諒解されるに及んで、自然平穩に歸した。分れた二組も卒業の時には一心同體の聯合をなし芽出度く卒業したのであつた。

道場式教育法には、缺陷もあるが、互に切磋琢磨の實際的強力的訓練には偉大な効果を擧げ得ることは否み得ざる事實である。

(一〇・一)

胸を打つ情景

文政審議會の總會に列席した。この日は特別委員に附議した、青年學校案の修正案が提出され採擇となつた。

散會となると、席にあつた橋本陸軍次官が席を立つて、離れた席に着いてゐた元陸軍大臣大島大將と、前侍從武官長奈良大將の前に、つかく〜と武み寄り、非常に慇懃に挨拶をした。私の席は可成り離れてゐたので、その話の様子は分らなかつたが、その態度物腰から見て、鄭重を極めてゐることが充分うなづかれたのである。私はこの美はしい情景を見て胸を打たれたのであ

る。

翻つて教育現状を見ると、最もその情義に厚くなければならぬ筈であるに拘らず、甚だ人情味の薄いことを常々慨嘆してゐる。

私は樞密院顧問官であつた岡田良平氏が最後の文相時代に大臣室に文相を訪問して、我校の自由啓發主義教育に對する抱負を述べて、其の批判を求めた。文相の教育方針は、私の思ふところとは可成り距りのあることは、萬々承知してゐたので、私は何等かの反撃を期待してゐた。

然るに文相の答へは「君が自分の主義主張で學校を經營して、それでやつてゐるのがそれでいい何よりの證據でこれからもやつて良い事である。只だ君のやり方を誰にもやれと言ふ事は、不能かも知れぬが、兎に角大に努力して貰ひたい。」と激勵を受けた。

私はこの文相の理解ある一言に感激して、爾來文相が故人となられるまで、常に其の邸前を通行する時は必ず刺を通じて敬意を表し安否を尋ねることにしてゐた。

教育萬能の錯覺

福岡縣の一青年は菜種の品種改良に成功し、破天荒の多收穫を上ぐるに至つた。

岡山縣の一青年は溫室葡萄の露地栽培に成功し、更に生果のまゝ熱帯地方へ輸出する方法を案出した。

山形縣の一青年は、東北産業の痛とされた櫻桃害虫の驅除に成功し、世界的に認めらるゝに至つた。

これ等の青年は、いづれも小學卒業以外に學歷を持たない人々である。然かも繁激なる勞働に従事し、其の餘暇をぬすんで獨學した人々なのである。

人物の輕重は、決して教育のみによつて左右さるべきではない。天稟さへあり、努力さへあれば教育の必要は甚だ薄い。同時に天稟努力のない者も、教育の効果は甚だ薄い譯である。

又論者は天稟努力のある者に、更に教育を加ふれば、層一層の業績を擧げ得るであらうと言ふが、然し今日の如き詰込み主義、百貨店式の萬教育では、反つて彼等の創作力を減滅し、其精氣

を奪ふ結果となることがあつても、それが爲めに啓發するものだとは考へられないのである。

學校教育が人智を啓發する唯一の手段でありと信ぜられ、父兄はその子弟を教育するに當り、殆んど偶像崇拜的に、學校教育の功德を過信し、分不相應の學費を捻出して其資に當て、幾多の悲喜劇を演出する一方、受験者洪水となり、試験地獄を現出し、他方卒業生の過剩と就職地獄を生むに至つたのである。

然し時代は既に一轉した。教育萬能の思想は既に過去のものとなつた。それは本文の劈頭に掲げた事例によつて、充分實證せらるゝところであらう。

(一〇・二)

生地 と 染色

實業界の各部門が未だ幼稚な時代は、學校で學んだことは、直ちに移してもつて世の中に重大な役割を演じたのであつた。學校の卒業者は直ちに社會の重要な椅子を占めたものである。

然し今日の實情は正に反對となつてゐる。實社會は學校以上に進歩してゐる。特に實業界の各部門では、到底學校の企及し得ない人材と設備を持つてゐる。従つて今日の學校は、孰れもその

實際に就き、實習、見學をして其の足らざるを補ふに汲々如としてゐる。今日の學校の智識丈いで實社會に出たのでは、全く手も足も出ないものとなつてゐる。

この不完全な卒業生を、完全に實社會で活動せしむるには、勢ひそこに一大工夫をしなければならぬ筈である。その工夫とは何かと言ふと、外でもないそれは要するに生地のみで行くより外はない。その用ひられる色に最もよく染まり得る上等な生地を拵へて行くことである。生じつか學校で時代遅れの専門色などに色揚げして行つたのでは、それこそ使ひ道にはならないのである。

この意味で下手な専門教育などすることは最も禁物である。それよりも必要な基本的素地を充分養つて、素直で丈夫な生地を作り出すことである。これが時代に即する専門教育であると、私は信ずるのである。

換言すると向學心の刺戟と、人物の鍊磨が主眼となる。

この意味に於て、指導に當る教師は、先づ自らの研究を確立完成し、その研究努力の實地指導による教化を學生に普からしめ、發奮の氣風を醸成することが急務である。

八萬の法書

横濱工業懇話會で、多田收成氏の綜合醫學に關する講演を聞いた。それから考へついたのであつたが、一體醫學は日進月歩で驚異的な進歩を示してゐる。然し病人は一向減らない。

これは單に醫學の場合丈けでなく、政治にしる、商工業にしる、いづれも長足の進歩を遂げてゐるが、一向社會病は減らないのである。

減らない許りか、反つて刑務所は途方もない立派なものとなり、裁判所は高層建物に變つて行く、そうしてその新築毎に盛大なお祝ひの式が行はれてゐる。一體これはどうした譯であらう。學術の進歩文化の向上は勿論いゝことである。が同時に餘りに専門的になり過ぎ、解剖的に、又分析的になり過ぎたのである。その結果綜合と統一が等閑視され過ぎたように思はれる。

議會の問題となつてゐる。天皇機關説の如きも、餘り憲法を専門的に法理的に、分析解剖した結果、その綜合の大本を忘れた結果ではなからうか。

蓮如上人の五文章の中に『夫れ八萬の法藏を知ると言ふとも後世を知らざるを愚者とす。例へ

一文不知の尼入道なりと言ふとも後世を知るゝを智者とす』と言ふ一句がある。

流石に上人は偉い方である。美濃部博士も博學多識、當代得難き人材ではあるが、只だ一つ博士は忘失されたものがある。

然かもそれは、日本國民の誰でも知つてゐる先祖を忘れてゐる。この點では例令八萬の法書を知らずとも、敢て愚者と喝破されるのではなからうか。若し蓮如上人をして再生せしめたならば。

(一〇・三)

國體明徴の一線

國體明徴と言ふ言葉がよく言はれ、よく書かれてゐる。この字義の穿鑿は兎も角として、所謂時代思潮となつてゐることに相違ない。

この思潮が今日現れて來るには、それ相當の理由と、原因の存するものがある。一體我日本精神と言ふものは、古昔から外國の思想文化を吸收消化融合して一つの特異なる民族性を形成したものである。只だこの特異な民族性を、一つの纏つた思想體系として、一大集成をするほどの大

人物がなかつた。爲にその體系的集成として見ることは出来ないが、その特異な民族性は、常に全國民の間に澎湃として漲つてゐる。

それは我歴史を讀んで見ると、あらゆる時代、あらゆる階層に見出すことが出来るのである。

一つの近例をとつて見ると、西郷隆盛は西南の役に於て一敗地に塗れて、郷國に歸り「秋風埋骨故郷山」と詠じて、城山の露と消えた。南洲は生を完ふすべく、國外に遁れようなどの考へは毛頭なかつたのであつた。

ところがこれを外國の例に見ると、皇帝始め責任者の國外脱出は、殆んど常識となつて怪むところがない。歐洲大戦後獨帝は和蘭に遁れられ、支那からは有名な朱舜水の亡命以來、我國に亡命し來つた者は算ふるに遑の無い位である。

この歴史的一事を見ても、我國體と諸外國の間には、劃然たる明徴の一線を畫いてゐることは何人も首肯し得るところである。

大楠公

楠公六百年祭を迎ふ。この機會に頼山陽の日本外史を繙き、感興更に新たなるものがあつた。日本外史は私が少年時代に愛誦措く能はなかつた書である。

山陽は雄渾の筆致を盡して書してゐる。

其大節巍然與一山河一並存。足三以維三持世道人心於萬古之下。一。比下之姦雄迭起。僅傳三數百年一者上。其得失果何如哉。

楠公をこの短文に評し去り、評し來る、流石に山陽である。分けても楠公の忠義心、今日の所謂皇道精神の發揚に、無限の示唆を與へてゐる點に其偉大性を再認識せられるのである。

回顧すれば延元元年五月二十五日楠公湊川に戰死し、正に六百年を閲する。楠公が金剛山に籠城して北條氏を破つたことに端を發して、後醍醐天皇の建武中興の偉業成つたが、中道にして足利氏の叛に會ひ、一度は之を斥けたが、再び九州より大軍を従へて京都に攻め上つて來た。この時朝廷では廟議が開かれて、對戰略に就て論議されたのである。

楠公はこの時の策戦として、敵の大軍を京都におびき入れて置き、己は河内に歸り兵を整へてその後方糧道である境方面を遮斷し、敵の疲弊するを待つて、新田義貞と呼應して挾撃する、その爲には一時 天皇に叡山御幸を奏請したいと言ふのであつた。

廟議はこれに決せんとした時、參議藤原清忠が只一人反對して楠公の策戦を覆した。楠公は議一度決すると、最早これ迄であると覺悟を定め、勝算なき戦と知りつゝも、笑つて死地に赴いたのである。

この楠公の覺悟と處置こそ、楠公の大楠公たる所以であり、大日本精神の精華であるのだ。

(一〇・五)

横濱人と文化

横濱復興記念大博覽會は、いざ蓋を開けて見ると、全く意外の好況に恵まれた。横濱人の一人として、双手を舉げて祝福するものである。

今年は博覽會の當り年と見えて吳と熊本にも開催された。就中熊本は縣出身の名士清浦伯、安

達謙藏氏、徳富蘇峯氏等が打揃つて華々しく歸郷せられ、博覽會に錦上更に花を添へられた。

さて横濱の博覽會は賑々しくはあるが、錦上の花となるべき名士を需めると、些か寂寞の感なき能はずである。尤もこれは熊本と横濱の生ひ立ちの相違から來てゐる。舊幕時代、全國各藩が夫々割據し、城下を形成して、各固有の文化を拓き各藩競ひ争ふところに、文化と人材は雲の如くに湧いたのである。

然るに我横濱は別に纏つた一藩もなく、僅に一漁村として残されてゐたに過ぎなかつたものが、六、七十年と言ふ短かい間に、六大都市の一つにまで跳ね上つたのである。

勢ひその内容は寄合ひ世帯たらざるを得なかつた。國に譬へると、米國が移民の寄合ひ世帯から合衆國となり、その爲に固有の文化を持たない成金國となつたのと相似てゐる。然も米國は既に成金國の域を脱し、所謂アメリカ文化を創造し來つてゐる。

我横濱もいつまでも合衆都市ではないのである。横濱固有の文化は生れねばならない。又横濱人が日本の名士として飛躍すべき時代である。私はその日の來ることを切に待望して止まない。

智識資本主義

資本が蒐集されて大資本となり、大資本が更に結束して資本主義經濟が生れる。資本主義そのものに就ては、色々論議されるところであるが、私はこの經濟上の資本主義を爰に採り上げて鬼や角言はんとするものではない。

私の今言つて見たいのは、智識的資本主義とでも言つた、少し變つた資本主義の話である。

一體科學の進歩は専門を生み専門は更に科學の進歩を生むと言つた輪廻の關係にあるのであるが、一方この専門の赴くところ、餘りに細部に入り綜合的大同觀を失ふに至る場合が尠くないのである。

ところが、この専門と大局の二途の外に、まだ一つの途がある。即ち専門的に深い造詣はない従つて特種の長所とてないが、他人の語るところを聽いて、よく其是非善惡を判定して過るところなく、然かも自らの智識と判斷に基いて、處世路上を堂々濶歩する型の人がある。

斯くの如き人は、實に偉大なる人間力の所有者と言ひ得るのである。この型の人は、政界にも

學界にも其他の社會にも存在する。其大なるものは長鯨の百川を吸ふが如く、有りと有らゆる方
向から智識を吸収して、その基本の上に大事業を成就するのである。

この型の人は、専門に偏せず、廣く普く智識を蒐積すること、恰かも資本主義の資金蒐積と同
斷である。

この智的資本主義は、經濟資本主義とは、趣を異にして、何人も異議を挟む餘地はないものと
思ふ。専門型は専門型として、又この種の型の人材も大に歓迎さるべきだと考へる。

(一〇・六)

若尾と安田

大正二年に、私は横濱に招かれた。東道の役は村田一郎氏であつた。場所は當時横濱公園内に
あつた社交俱樂部で、横濱の一流實業家數氏に對し、空中罫素固定に關する話をするのが目的で
あつた。

私が一應話し終ると、座にあつた若尾幾造氏が質問せられた。

「空氣中から窒素を採れば、窒素が減少し、其結果生物に被害を與へるやうなことはないものですか。」

「この地球を圍む無限の空中から言へば、我々の採る窒素は問題にならぬ微量であります。従つて何等の影響はありません。」

と答へたが、氏は容易に承服せられなかつた。そこで私は窒素循環説を詳説して、例へ一度窒素を固定してもそれが動植物の組織に入り、動植物から又空中に復歸して行くと云ふことを説明すると氏は「それで私も安心しました。」と言はれた。

私はこの若尾氏の緻密な考へ方、周到な用意に感服したのである。後年、後藤新平伯に面語した時、伯は安田善次郎氏の話をせられた。

それは安田氏が、伯に東京市長たることを勸説し、伯の持論である東京市都市計畫實施に必要な資金を融通しようと申出られた時、伯はその所要金額を十億圓と切り出した。

安田氏は驚くかと思ひの外平然と

「たつたそれ丈けで出來ますか」

と言はれて今度は伯の方が驚いた。然し安田氏は直ぐ言葉を繼いで

「閣下十億はさておき一圓の金は實に尊いものですぞ。」

と言つたさうだ。伯はこの話をされた後に安田氏を總評して

「安田と言ふ人は實に妙な人です。」

と言はれた。私は若尾氏のあの時の態度と、安田氏のその時の態度には、自ら一脈相通するものがあり、味ふべき教訓であると考へる。

(一〇・六)

忠 と 孝

伯夷叔齊は國を去つて、西伯へ仕へんと周へ赴いた。周に至つて見ると西伯は逝きその子武王が紂王を討たんと、出陣するところであつた。伯夷叔齊は武王の馬を停めて、父王の喪中干戈を動かす事と主君紂王を討つ事の人倫にあらざる所以を説いた。左右怒つて殺さんとするを、武王がとどめて義人なりと賞した。

又弟子桃應は孟子に舜の天下に、「舜の父が人殺しの罪を犯したとする、舜はそれをどう處置すべきか」と問ふた。孟子は、「舜として最善の法は、位を捨て、竊かに父を背負ひ、山奥か海の果

てに逃れて、親子共々に身を終ることだ。」と答へた。

由來支那では、孝を以て最高道徳とした。それで支那の社會的慣習を見ても、又其法律特に刑法を見ると、如何に孝が人間最高の道徳として、取扱はれてゐるか、瞭然としてゐる。

支那が古今治亂興亡常なく、國代り領土變じて幾變遷をしてゐるが、然し未だ崩壞することなく、一國としての存在を續けて來てゐる。この根柢には何か中心となり、結合せしむる或る力がなければならぬ。その力とは即ちこの孝道である。

支那の孝道は、文献の上で我國、我國民性に影響を與へたところが極めて多い。我國は忠孝と言つて、忠を以て最高道徳としてゐる、そうして忠孝兩全を以て人道の理想としてゐる。

この理想は、我日本國の独自の道徳であり、到底他國の企及し得ざるところである。

(一〇・七)

阿蘇山麓偶感

四十年來宦海塵 烟波戴去旣三旬

靈泉一浴蘇山麓 落々襟懷是野人

私はこの夏、九州阿蘇山麓、栃の木温泉に赴き、十餘日滞在した。

私はこの間、森槐南先生の漢詩講義を読んだ。その中に、詩を作るには小説を読むことが必要である。それは小説によつて、想像力を養ひ得るからであるとあつた。

従來私は小説を読むことは嫌ひで殆んど讀まなかつた。然しこの槐南先生の示唆によつて、帰宅早々支那の小説を読んだ。

「楊州綺談」「西廂記」「野叟曝言」の三冊である。初めの小説は近代物であるが、後の二冊は清朝時代の名著である。

讀んで見ると仲々面白い、西廂記の如きは五六百頁のものだが、二日間で讀んで了つた。しかも多くは寢床に入つて讀み深更一時を過ぎた。その爲に翌朝は些か、睡眠不足の爲め不快を感じた。

又小説を讀んだ爲に、文章を學ぶ助けにもならうと思ふが、事實は文章的に味ふのでなく、その筋を読む丈けに終ることが多いやうである。

多くの青年諸君の中にも、小説を讀んで健康を害する人が有りはせぬかと思ひ起したので書きつけたのである。

彼等を殺せ

來春の横濱高工卒業生の就職は、極めて良好であるさうで、結構なことである。顧ると大正九年に開校された頃から、世界大戦後の不況が襲來したのであつたが、卒業生の出る十二年までには何んとかなるだらうとも考へた。ところが不況は益々深刻化する許りで、爾來この十二三年間は卒業生の捌け口に全く苦勞をさせられた。

私は會て權藤成郷先生を訪れてこの苦惱を語り、若し先生が私と地位を代へてゐられたならば、どう解決せられるかと尋ねて見たのである。

先生は默思する漸時「君は仁に過ぎる、宜しく彼等を殺してしまへ。」と答へられた。私はこの殺すと言ふ意味を再び尋ねることを差控へて「左様でございますか。」と言つた。

その後一燈園の西田天香先生に會つて色々話を伺つたのであつたが、先生の行き方は一たん自分の身體を、社會の最下層に落し死んで更生する。その爲には、他人の嫌がる便所掃除を奉仕する。無報酬で勞力奉仕する。そうした後に獨立獨歩、世に處する信念が確立すると言ふのであ

この兩先生の語られるところは、正に一脈相通するものがある。私は何んとなしに眼前が明るくなつたような気がしたのである。然しまだ感ひが残つてゐた。卒業生自身を斯かる境地に導くべきか、又教育者として全智全能を傾注して就職に努力すべきか、この岐路に立つと、再びデレシマに陥らざるを得なかつた。

私がこの疑問を一刀兩斷に解決することなく、學校を去つたことは今もつて心残りである。

(10・10)

保守と變轉

松平駐英大使が賜暇歸朝せられたのを機會に一夕その談話を拜聽した。大使は三十年も英國で生活された。その間歐洲大戰にも遭遇したのであつたが、社會上の變革が餘りに認められない昔ながらの英國であると言ふことが、私には非常に面白く感じた。

大使が大地主である貴族を訪問されると、それは宛然たるお城の邸宅であつた。然しこの邸内

には、電燈が點いてゐない。晚餐の席に着くと、食堂は昔のまゝの蠟燭がついてゐた。

又電話も架設してゐない。客の一人が急用で外へ電話をかける爲には、門前の酒屋へ行かねばならなかつた。然も玄關から門前までは、自動車を馳らねばならぬ距離であつた。

この場面を想像して見ると、全く一幅の繪のような保守英國を想ひ浮べるのである。

その後更に武者小路駐獨大使の談話を聴く的機會を獲た。私が二十餘年前獨逸に滯留中、大使は大使館參事官として伯林に居られた。大使はこの二十年間の隔りを話されたのであるが、獨帝カイゼルの周圍の人々は今は全く退いて了つてゐる。當時の大官と今日の大官の變轉に就て色々比較の話があつた。

これは單に獨逸許りではない。伊國も露國もこの二十年の變轉は、決して些少ではないと思ふ。翻つて我國を考へると、保守か進歩か、その可否論は別として、兎に角現實に六百年前の楠公を祀り、百年前の尊徳翁を祭つてゐる。私は文句なしに、有難い國土に生れた幸を感謝してゐる。

永田中將を偲ぶ

永田陸軍々務局長が、陸軍省で重傷を負つた報を九州で聞いた。私は早速橋本陸軍次官宛に電文で見舞つた。局長と私は、最近に於て重要な折衝を遂げたことによつて、局長は實に一世の傑物であると深く敬意を表したのである。

その経緯は、この一月に首相官邸で開かれた文政審議會に問題となつた青年學校設置案で、私は特別委員となり修正案を提出したが、その原案は主として陸軍側で固執されたので、特別委員會の二日間に亘る論議も容易に決することが出来なかつた。そこで三日間の休會が宣せらるゝに至つた。

その第一日に文部省から、私に軍務局長が會ひたいが、横濱へ出向く都合がどうしてもつかないから、御苦勞だが東京で會ひたい、場所と時間の都合を指定して呉れと言ふ傳言だつた。私は手数を省いて、その翌日陸軍省に局長を訪ねた。局長室で二時間餘に亘つて論議を交した。局長は自分は今軍服を脱いで赤裸々にお話をする、と言つて實に微に入り細に亘つて、極めて腹藏な

い意見を述べられ、陸軍側の原案支持の理由を説明されたのであつた。

私もまた裸になつて、私の修正意見を述べた。そうして結局双方の意見は、一步も譲らず物別れとなつたのであつた。幸にして、その翌日修正案が陸軍側の同意を得た爲に特別委員會を通過した。

此の局長と私との會見は、双方の譲合ひ、妥協案を生むに至らなかつたのであるが、陸軍側の意のあるところは充分理解することが出来たし、又局長の眞摯な態度には少なからず動かされたのであつた。

局長がこの時特に特別委員中の私を指して會見を求められたのは、私が修正案の提出者である以外に、曾て横濱高工の教練査閲に來校せられ、面識のあつたこともその理由であつたと思ふ。

兎に角私としてはこの會議と結び合つて、局長の印象は非常に深いもので、惜しい人を失つたものである。

工業 日本精神

「工業日本精神」は王子製紙社長藤原銀次郎氏の著である。私はこの書を読む前に、直接氏から一夕講話を拜聴した。併せて愈感銘の深いものがあつた。氏はこの夏米國を親しく、視察せられて大いに感ずるところあり、この講演、この著があつたのである。

氏は日本工業の偉大なる飛躍に對し絶讃し、その因つて來るところは、日本精神に歸すべきであると言ひ、昔の藝術家がその名を惜んで、名利を捨てた崇高なる精神は、猶今日の我技術家にも、所謂技術家氣質として嚴然と傳統されてゐる。その活例は自社の技術家にも多數見出し得ることを指名してゐる。この技術家があればこそ、今日の我紡績業は世界の王座を占め、其他人絹、望素、造船業いづれも目醒しい飛躍を遂げたのであると結んでゐる。

従來米國視察談を聴くと、いづれも其規模の大なるに驚き、到底我工業は脚下にも及ばないと、長大息するのが定石のやうになつてゐた。

然し氏は、米國は人力を省いて機械力の應用に努め、その點では大に成功してゐる。然しその

經營方法の拙劣なことは、無駄の多いことの缺陷をもつてゐると、その實例を指摘してゐる。

之等氏の諸説を聽いて、私が最も感慨の深いことは氏が、聲を大にして「軍備費は工業投資である。」と喝破してゐることである。

顧ると世界各國に於て、智識階級特に實業家の間には、軍備費を以て不生産的のものと見做されてゐた。それは永い歴史的傳統とも言ふべきものであつた。今氏によつてその逆説を聽く。

(一〇・一一)

赤字財政不脅威

昭和十年も餘すところ、僅か二週間となつた。年の暮は流石に何か迫つて來るやうな感がする。年の暮の相對性は借金である。これは昔も今も變りのない歳末風景の一つである。

私は今これと言つて、借金と言ふものを持たないが、そう思つて油斷してゐると、忘れたり、忘れられたりしてゐた借金が不意に顔を出すことがある。

借金と言ふものは、いづれにしても、兎に角有難いものではない。私は月給生活から離れて、

今度始めての歳末に會ふ譯である。本來ならば債鬼門に迫る憂目にも會ふ筈であるが、有難いことには國家から不足勝ちとも言へ、恩給を戴く身である。その上今年は退職賜金をも戴いてゐるので、年の瀬はまづ安心して越せさうである。

然し金のことは、そう心配したものでもない。身體が丈夫で、元氣さへあれば金は大した問題ではない。

これは只だ個人の場合のみではない。國家に於ても同様である。古往今來の歴史を見ても、赤字財政の爲に、國が滅亡した例はない。國家の興亡は常にその國民の健全なる思想と旺盛なる元氣の消長によつて決してゐる。

一體赤字財政を重大視する徒輩は、専門の財政學者の學理的結論であつて、實際財政學との間には、可成りの開きのあることを認識しないと、歴史が當てにならないことになる譯だ。

私は今日我國の赤字財政に就ては、一向杞憂を感じない、只だ貧して鈍せず、意氣の消沈せざることを祈つて歇まないものである。

惠まれた學窓

辭職以來始めての新年を迎へた。辭任後の學校の動靜に就ては一日として念頭を離れた事はない。顧みると、三月には富山新校長の下に、最初の卒業式が行はれ、快晴盛大裡に終始した。秋の記念祭も三日間共好天氣で、十二月には教練査閲があり、これは例外的に稀有の好天氣であつた。私は別に縁起を擔ぐ譯ではないが、新校長となつて斯く天候に恵まれてゐることは、何んとなく輝かしい希望に滿つるやうな氣持ちがする。加ふるに今年は、我工業躍進の時代であり、その尖端に立つべき横濱高工の前途は正に燦然たる光彩を放つものであることを疑はない。

學生諸君は、この光輝、光榮を愈意義あらしむる爲には、先づその學窓生活を明朗なものとしなければならぬ。その一つの手段は校友會の發展である。各部夫々の充實と活動を期すると同時に、其各部間の圓滿提携を計り、全體としての飛躍を期すべきである。

又學校の獨得な存在である大陸會は今後我國の諸情勢から見て、特にその活動を希望するのである。大陸政策は最早理論や研究の時代ではなく、事實の問題である。我工業的發展も、大陸を

基調づけずして、考へることは絶対に不可能なのである。大陸會の奮起を大に待望するものである。

更に互助主義十錢會は、これ又學校の特異な存在である。諸種の偶發事情から學費の窮乏者に對し、各自の冗費を節約した金によつて相互扶助することは、學窓生活に咲き出た美しき華である。この華を咲かせるも枯らすも、それは諸君の心懸け次第である。

(一一・一)

大 谷 光 瑞 師

今年の元旦から、私の愛讀する一つは讀賣新聞連載の、大谷光瑞師執筆の「光瑞縦横談」である。

光瑞師と私とは多少の因縁がある。私は幼少にして、京都西本願寺の普通學校に學んだのであるが、師は其當時私より六歳位年下で得度せられたのである。師は長ずるに及んで、佛門にありながら、南洋及び支那にあつて、幾多の事業を經營せられ、皇國精神を海外に發揚せられつゝある。

私は曾て、大連と山東に於て、兩度師と親しく面接するの機會を得た。この時私は師に對し、横濱高工に來校して、講演せられんことを乞ひ、其の快諾を得て置いたのであるが、在職中に其實現を見ることが出来なかつた。

師の主張に對しては、時に私は反對の立場にあつた。就中大正四年の支那問題に就ては、師が政府要路の人々と見解を異にしてゐたが、この時の師の態度は餘りに東洋的に過ぎた偏見である。とさへ考へてゐた。然し今日になつて考へて見ると、師は實に支那を熟知されて居たと感服措く能はざるものがある。

師は、厚葬國を亡すもので支那がそのよい例である。宗教は生者の問題で死者には不用である。死は必定、それを一々大袈裟な葬式、廣大な墓地を營んだのは、洵に勿體ない。と喝破してゐる。又墓地に次いで不用なものは、各種の競技場である。運動の目的は體育であつて、競技ではない。寧ろこの尨大な競技場は、田畑に耕作し選手に農業を課せば、一舉兩得である。一體今の弊害は農を輕じたことに病根があると、實に痛快に論じてゐる。

論の當否は第二として、師のこの經綸と勇氣には只感服の外はない。

噫 松 田 文 相

二月一日の午後、突然松田文相急逝の報に接した。その前日まで活動せられてゐた事を知る私にとつては殆んど信じ得ぬ事實であつた。

文相と私は共に犀東國府先生の門で漢詩を學んだ。

文相の漢詩は先生から常に賞讃されてゐた。文相の學歷は私大の卒業となつてゐるが、實は獨學の方が多かつたやうである。私が文相を特に歓迎したのは、文相が正規の學校教育を受けてゐなかつたことであつた。

従來の文相は、志あるも着手し得ず、改革の要點を把握することが困難であつた、それには色々な原因もあつたが、要は型通りの教育を受け來つたことが、その禍根のやうに考へられた。この意味に於て、文相に期待するところは頗る大であつた。

その片鱗として、専門學校が多年唱導した年限四年説に對し、痛快に反駁せられたことなどは、歴代文相を抜く鋭鋒であつた。又例のババ、ママ、問題の如きも形式は些々たるものであるが、

その根源の民族精神に立ち到れば實に重大な問題であり、文相の態度として洵に妥當な主張であつたと信ずる。

文相は曾て横濱高工を視察され、私の在任最後の大臣來校であり、又私の辭任記念に昨夏特に左の一詩を書して贈られたことがあり、文相を悼むの情一層切なるものがある。

綠陰如水足清風　富貴功名夢忽空

一是一非心所欲　居然詩雨墨雲中

(一一・二)

神　　と　　佛

高橋是清翁は、所謂萬卷の書を読み千里の路を往つた人である。大正昭和を通じて翁ほど圓滿高潔練達の士は、洵に稀れであつたと思ふ。

翁は政黨政治家であつたが、それを超越した天下國家の高橋是清であつた。翁は國民の輿望を双肩に擔つた國實的の存在であつた。私は屢々翁と面接の機會に恵まれたのであつたが、最近「高橋是清自傳」並に「隨想錄」の二編を讀んで翁に對する追慕今更の如く新たとなつた。

私は東郷元帥を神様と信じ、高橋翁を佛様だと信じてゐる。東郷元帥は生きながらの神様であつた。そして死して又神様に祀られた。この神様とこの佛様は、近世日本民族の生んだ二大典型的人物であると言ふことが出来る。

翁の晩年は、何んでも思ふ通りにすることが出来た。それは策謀によるものではない自然になつて行つたのである。今日の時勢と翁の人格がさうさせたのである。

翁は一見小事に拘泥しない無頓着のやうであるが、決してさうでない。その書「隨想録」中には、横濱高工で十年前に講演されたところの要旨がちやんと載せてあつた。この話を深井日銀總裁に話すと、總裁はまた興味ある話題を提供された。

それは犬養内閣の時、翁が藏相となると、總裁を招いて財界の近況を尋ねた。總裁は材料蒐集の爲め二日の猶豫を願つた。すると翁は「いや今君の直感を聴きたいのです。」と言はれた。そして翁は午後七時から三時間、總裁の話をノートへ一々筆記された。恰度學生が教師の講義をノートするように、非常な熱心で續けられた。

豪放の中に綿密細心な、翁の佛はこの總裁の話の中に躍如としてゐるではないか。

總選舉偶語

總選舉が終つた。大體は私の豫想を満足せしめた。私のこの豫想適中は、選舉肅正の結果が、大した番狂はせをさせなかつたことである。肅正の實の擧つた點に於て、歴代中今回が第一であらう。これは一つは時勢の力であり、一つは後藤内相の公平無私な態度に負ふべきであらう。然し私は、今の選舉に對しては充分満足するものではない。

その満足しない一つは、候補者となる者が、保證金を納めて、資格をとらねばならぬことである。有権者はその定まつた有資格者に限つて投票せねばならぬのである、従つてその候補者の中に、自分の求むる者がなかつた場合はどうするか、猶棄權はしてならぬと言ふ。然し自分の嫌な投票を強ひられるのも忍び難いところである。

候補者の制限は、亂立を防ぐことであらうが、この亂立を防ぎ得ることゝ、多數の中から眞に己れの欲する人に投票し得ることゝ、いづれが是、いづれが非かは容易に斷定の出來ないことである。

候補者には、金錢の賄賂は嚴禁せられてゐる。然し言論戰は獎勵されてゐる。これは言論にも金錢以上の賄賂が含まれる場合のあることを、全然計算外にした話である。

又選舉肅正は、候補者に金のかゝらぬやうにと考へられてゐる。然し今の制度で立候補者は金のない者は出られない。金のある者が出る以上、使へる丈け使はせて、金の無い者の方へ廻して貰ふことも、一つの社會政策ではなからうか。

戸別訪問はいけないと言ふ。然し向三軒兩隣の組織は我國の美風である。隣人、知己相扶け合ふことも出来ないでは困つたものである。

選舉もいゝが、何とかもう少し規則張らずに明朗化の出来ないものであらうか。

(一一・三)

二・二六事件

65

二月二十六日事件の突發を横濱驛のホームで初めて知り其のまゝ上京した。俱樂部へ寄ると、話題は事件で持ち切つてゐる。然し情報は區々で、的確な事が分らないが、兎に角非常に重大な

ことが感ぜられた。

私は俱樂部を出掛けようとして、娛樂室を覗くと、碁、將棋をやつてゐる者が四組もあつた。閑日月と言ふのかも知れないが、この事件の最中に悠々としてゐるのを見て、何事ぞと憤慨した。それは上 聖上の御宸襟を惱まし給ふほどを恐察してのことである。

私は市中に出て色々と情勢を觀た。然し事件に對する批判は區々である。軍部を攻撃する者、擁護する者、事件は局小と言ひ、擴大と言ひ、右傾を攻撃するもの擁護する者、或は右傾と左傾を混淆するもの、所謂十人十色で歸趨するところを知らない有様であつた。

然し私の觀るところによると、今次の事件は、畢竟するに日本歴史の一過程にすぎないと考へる。斯くの如き事件は、足利、豊臣、徳川の末路、特に幕末の状態を見ると、同一の事件と情勢があつたのである。安政の大獄、櫻田門の變から、尊王と攘夷、開國と公武一體論が相交錯し、諸説紛々暗殺と襲撃と陰謀の坩堝と化した。

その結果として、明治維新が生れ、新日本の姿を見出したのである。七十年の今日になつて當時を顧ると、いづれが正論であつたか蓋し自ら明かなことである。維新以後は、所謂歐米の靴持ちとなつて、日本の立場を作つたのであるが、今は靴持ちを物色する、主人公の身分となつたの

である。

さて主人公になつて見ると、其の體面を保つ爲には、色々な悩みが出て来る、恰度その悩みは、明治維新のそれに似たものがある。この悩みが解消する爲に我々日本國民は擧つて協力一致し、皇國をして曇りなき眞の姿を仰ぎ得る日の速かに來らんことを熱望する。(一一・三)

劇　　と　　音　　樂

高工創立以來、最初の天長節を迎へるに當つて、私は全校學生に對して「學校では、別に天長節の儀式は行はない。然し、聖上の御誕辰を衷心から祝し奉つるべきである。その方法としては、觀兵式拜觀に上京するもよし、又學生等が集會して祝賀の會を催すもよい。殊に我横濱市は、開港市であり、各國民も多く居留してゐるから、彼等に對しても同時に、我若人の意氣をこの機會に發揚することが、最も有意義のことである。」と言つた意味のことを述べたのである。

何分にも、當時の學校は人員も少ないし、設備も揃はないに拘らず、學生達は一致して學生劇を催し、忠愛の精神を振作したのであつた。

この學生劇は、震災後もバラック講堂で、開催し続けたのであつたが、岡田文相時代に學生劇の禁止令が出て、爾來中絶したのであつた。この禁止令に會つた學生達の失望を察して、方向を轉ぜしむべく企てたのが、今日猶恒例となつてゐる天長節祝賀音樂會である。

この音樂會を飾る爲めに、震災直後の物價昂騰時代を顧みず、ベヒシュタインのピアノを購入したのであつたが、このピアノは當時横濱一のピアノとして、市民の間にも大いに役立つた。

斯くの如く横濱高工の天長節祝賀音樂會は、決して單なる音樂會ではない。この音樂會の起原は、遠く開校の昔に遡り、其包含する意義は實に深遠なものである。

さればこの音樂會の開催に當つては、全校一致して奉祝の意義を體し、音樂會の音樂に終らしめることなく、精進努力されんことを熱望するものである。

(一一・五)

東郷神社祭典

私の仕へる東郷神社は、五月三十日を以て第四回の祭典を執行した。參詣者千三百餘名に上り盛儀であつた。これ偏に元帥の餘徳の賜と信じ、一層敬慕に堪へない次第である。

元帥は若冠英國に渡り、彼地の兵學校に學び、八年の長きに亘つて滯留せしめられたが、何一つ不平を洩されなかつたのみか、その後、英國で建造した軍艦比叡の廻航員を命ぜられたが、まだ練習不足だと言つて留學延期を願出たのであつた。

八年間も同じ地位に据置かれ、一言の不平を言はぬ許りか、また願出て其地位に安んじようと云ふことは、今の世の中では見られないことである。元帥の心境は、私の名利などは微塵もない、只管帝國の爲に最善完璧を期したいと言ふ念慮以外には、何物もなかつたのである。

日露戦役で旅順封鎖を斷行したのであつたが、戦艦八島、初瀬が敵水雷の爲め同日に沈没し、又他の一隻は僚艦と衝突沈没した。即ち當時六隻の戦艦の半ばを失つたのであつたが、聯合艦隊司令長官たる元帥は神色自若、全海軍の士氣を些かも失墜せしむるところがなかつた。

又日本海々戦に於て、戦前の報告書原稿は「敵艦見ゆとの報に接し聯合艦隊は直ちに出勤之を逆撃せんとす」とあつたのを、元帥は自ら筆をとつて逆撃の字を抹消して「撃滅」と改書せられた。この時の元帥の烈々たる闘志と勝算はこの一事で實に眼の前にこれを見るやうな氣がする。

元帥の斯くの如き偉大さは、無論常人の企及し得ざる天分の存したことであらうが、又一面元帥の一死報國の赤誠と、幾多の経験による修養の然らしむるところであつたと考へるのである。

元帥の遺徳盡きざる所以である。

(一一・六)

國際的協調精神

この頃我日本は、どうも國際的協調精神に缺けてゐるとの批難を耳にする。これは外國人が言ふのはまだしも、日本人の中にも外國人の代辯をしてゐるやうな者もある。

然しこれは甚だ迷惑千萬の話である。彼等の要求する所謂國際的協調精神を、發揮してゐれば日本は永遠に、彼等に追従するより外はない。いつまでも御無理御尤もでは頭は上らない。

そうかと言つて、外國は皆その他國に要求するが如く、國際的協調精神に富んでゐるかと言ふと決してさうではない。例を米國にとれば、彼の移民問題で邦人排斥はどうであらう。又ワシントン條約に於て示された友情はどうであつたか。

又英國は支那に於て、どれ丈け我國と協調の誠意を示したか、帝政時代の露國條約を悉く破棄したことは今猶記憶に新たなるところである。これを現状に見るも、各國は今や關稅の障壁を高くして、我國進貿易を拒否せんとしてゐる。これがどうして國際的協調精神と言ひ得ようか。

我國は、今や非常時中の非常時を迎へんとしてゐる。この非常時は、東洋平和を維持せんが爲である。されば世界各國も我國と協力すべきであるにも拘らず、東洋平和の障碍となるソ聯の五ヶ年計畫に對し、米國はこれを援助してゐる。又その東洋艦隊に對して英國が支援してゐる事實もある。

彼等は口實を設けて、日本帝國主義を云爲し領土侵略を擧げてゐる。然し我國は滿洲國を如何に遇してゐるか、どこに領土侵略の疑があるであらうか。然るに敢て我國を強ひんとする。そこに不安と不明が生ずる。この世界的迷雲を一掃することが、何よりの國際的協調精神である。

(一一・六)

墓 場 と 監 獄

人類がどんなにユートピヤを畫いても、墓場と監獄だけは除外することは出来ないと云ふ。墓場は絶對的のものとしても、せめて監獄だけはなんとかならないものであらうか。私は横濱高工在職十五年の間無處罰主義を堅持して、學校の監獄を無用のものとしたのであつた。

ところが頃日、日下の横濱刑務所の新築落成式に招待せられたのである。横濱の刑務所は、元根岸にあつて震災で崩壊した。その刑務所は今日復興したが同じ震災の厄に遇つた横濱高工が未だ完成を見ないのと、その又建築費が約百七十萬圓で兩者略同額であることも、思ひ出の深いことである。

それはさて置き、この落成式は非常に盛大であつた。そうして來賓の祝辭朗讀は期せずして、この立派な刑務所の完成を口を揃へて絶讃した。成程刑務所の立場から言へば、立派に設備の出來たことは、お芽出度いことであり、萬事都合の良いことであるに違ひない。

然し翻つて考へると、これは決して祝すべく慶すべきことではない。世の中に犯罪の起ることは當然とし、これを以て國家、社會の一大不幸と考へてゐるのではないかとも思はれる。

犯罪のあるところには、それ丈の缺陷が社會にあることである。刑務所が立派になることは、即ち社會の缺陷の多いことを反證する材料でもある。吾々はこの刑務所を擴大し、新築し、整備しないで済むやうに、社會の缺陷を是正し犯罪の防止に努めなければならない。

この意味で刑務所も無用、裁判所も無用、司法省も無用の時代を創造すべく、人心を指導することが、吾々の理想であらねばならぬ。

精神食糧

思想問題が學校の、直接問題となつて以來、宗教に對する研究も盛になつて來た。その結果學科目として、宗教を取り入れようと言ふ説もあり、私も直接その相談を受けたのであつた。

一體學校内の宗教研究團體としては、從來基督教と佛教が主である。私の經驗からすると、之等の宗教團體に加盟して、活動してゐる眞摯な學生を見た時に、その將來を少なからず期待したのであつた。

然し實際問題となり、それ等の學生が社會に出た後は、どうかと言ふと、いづれも平々凡々な只の人間となつてゐる。私はそれを見せられる毎に、あの人物が學生時代にどうしてあんなに熱烈な態度を見せたのかと、寧ろ不思議に思はれるのである。

なぜこんなに激しい變り方をするのであらうか、私の見るところでは、宗教は食物と同じに考へられる。即ち精神食料は宗教であり、肉體食料は食物である。食物を人體が攝取する場合、最も避けねばならぬことは偏食である。食物は種々の精分を含有、調査するところにその効果を發

揮するのである。如何に滋養價値のある食物でも、その一種に限つて常食すれば、必ず或中毒症状を呈することとなる。

宗教もこれと同じである。或一宗を絶對的のものとして、他宗を排斥し、頑固なる態度を示すことは、矢張りそこに偏食と同じ結果の齎されることは理の當然である。

又食物の好き嫌ひが、その環境、年齢によつて時々變化するように、宗教の場合もその人の環境、年齢に應ずるものがあるやうに思はれる。

一宗一派に凝つて、その融通、變轉の利かないやうになることが、人物の光を掩ふ結果となるのではなからうかと考へるのである。

(一一・八)

母 乳 教 育

あらゆる教育問題のうちで、何んと言つても試験と言ふことが一番の問題であると考へる。世の父たり兄たり、母たり、姉たるものが、如何にその子弟の爲に苦難を感じるであらうか、又その子弟の心根を如何に傷けるであらうか。

試験のうちでも、入學試験はその最たるもので、この問題に對しては當局も學校側も種々研究を重ねてゐるが、如何せん拔本塞源的名案は未だ案出さるゝに至らない。

然し私は信するところがあり、横濱高工開校以來、無試験の建前を採つて來た。この意味は試験制度の學校は、譬へば母親が幼兒に授乳する場合、その乳を一旦搾つて盃に受け、それを幼兒に與へるやうなものであり、同じ與へる母乳ではあるが、その間何んだか冷たいものが介在してゐる。

然し無試験制度は、母親が直接乳房を幼兒にはぐくまずやうなもので、濫い母の愛が幼兒の口に流れ込むのである。試験と言ふ介在物を間に置いて、親子の愛を堰くことは、實に忍び難いことである。師弟は親子である。師弟一如學校を修養の道場と心得て、精進するところに、學窓生活の妙味がある。試験と言ふ掩護物を中に挟んで、その親子が互に相對峙することはどう考へても理窟に合はない話である。

さればその試験のない學校は、眞一文字に母親たる教師の胸に飛びついて、思ふ存分乳房に吸ひつくがよい。判らぬところは遠慮會釋なく質疑する。曖昧なところは、どこまでも諮して行く、そうして教室は討論、琢磨の道場と心得べしである。

徒らに口授せらるゝところを、黙々として筆記し、ノートを後生大事にしてゐるやうでは、眞の無試験の妙諦は味ひ得ないものである。

(一一・九)

清談録

この夏はどこへも避暑に出掛けなかつた。終日讀書と耕作に従事した。その讀書のうちで、私を刺戟した一つは近衛文麿公の「清談録」であつた。

そのうちで近衛公が西園寺公から三度叱られた話が出てゐる。

それは近衛公が、大戦後の平和會議に参加の西園寺公の随員として、渡歐したときのことである。一行がコロンボに上陸して、公園を散策した際、近衛公等が何氣なく、路添ひに咲く花を摘んで香をかいた時のことであつた。

西園寺公は、それをきつと見据へて「何故そんな不道德なことをする。そんなことをするやうでは、もう一緒に連れて行けない」と叱られた。

それから船がマルセイユに着く前になつて近衛公等が、税關で荷物を調べられる場合の對策を

話し合つた。それを聽かれた西園寺公は「そんな心掛けでは、紳士として今後世界の舞臺に立つことは出来ない。」ときついお叱りであつた。

それから又會議となつて、新聞記者の外隨員の入場を許さない日があつたので、近衛公は一策を案じて、新聞記者の名義をかりて會議を傍聽した。西園寺公は、あとでその事を知られると、近衛公を呼びつけて「そんな眞似をするやうでは、今日から隨員を免職する。」と色を作して怒られた。これは西園寺公が、近衛公をこの機會に立派に仕立てる爲に、特に嚴格にせられたことであらう、若し他人が近衛公の立場に居たとしたならば、西園寺公はそう八かましくは言はれなかつたかも知れない。然し又この三つの事實は等しく私どもにも貴重な教訓であると信ずる。

(11・10)

我子の成人

目黒雅叙園で、横濱工業會の京濱大會が催され、私も招かれて出席した。出席人員が百四十名と言ふ多數で盛會を極めた。本會の會合としては、最も成功した一つであると考へる。

斯く出席者の多かつたことは、その理由をどこに歸すべきかを知らない。或は好景氣の爲とし、或は世話人の斡旋の功に歸し、或は會場の好適を擧げ、或は秋冷の好季を指すべきか、そのいづれにしろ兎に角喜ばしい事であつた。

それにもまして愉快に感じたことは、卒業生の一人から、母校も航空科の獨立となり、益々校運が發展することは實に嬉しい。ついでにはこれからは理論よりも、實際に重點を置いて教へて戴きたい。それには先づ風洞が差當り必要である。その經費は三百萬圓を要するであらうから、これは一つ吾々が骨を折つて民間の寄附を蒐めたいがどうか。と言ふ相談があつた。

又或者は、震災直後の設備不完全なる時代の、苦しかつた經驗談をした上、貧者の一燈だが、母校の設備費を吾々で、献金したいがどうかととの相談もあつた。

いづれも母校を思ふの情切なるものがあり、思はず、眼頭の熱くなるやうな、感激を覺えたのであつたが、それ等の好意に滿腔の謝意を表すると共に、母校もまだ子供と思つてゐるが、もう出身者が、母校の面倒を見ようと言ふまでになつたのは、随分成長したものであると感じた。

親の目から見ると、子供はいつまでも子供に見えるものである。來年は十五回の卒業式がある。成程これではもう一人前になつた譯であるかと、やつと子供の成人が分つたやうな氣になつた。

親からすれば子供の成人位嬉しいことはない。

(一一・一〇)

志士の風格

獄中作

頼三樹三郎

排雲慾手掃妖熒

失脚墜來江戸城

井底痴蛙過憂慮

天邊大月缺高明

身臨鼎鑊家無信

夢斬鯨鯢劍有聲

風雨多年苔石面

誰題日本古狂生

頼三樹三郎は、山陽の三男である。幕末に當り尊王攘夷に連座して、縛に就いた獄中の作である。この詩を讀むと、日本人が如何に力強い國民であるか、意志堅固な志士であるか、を物語るに充分である。

これ等の志士が活躍した結果は、安政の疑獄となつたのである。同じ疑獄ではあるが大正、昭和時代に續出した疑獄は、贈賄、收賄と言ふ實に唾棄すべきものである。その内容の墮落と共に、

被告の心情を見ても、或者は豫審で認めた事實を公判廷で、全々覆してゐる。その理由は、拷問による虚偽の自白だと言ふことである。

どういふ拷問を受けたか、その事實はどうか。兎に角被告の多くは、相當の教養があり、相當の社會的地位のある中上流階級に屬する人々である。斯かる立場にある人々が、單に拷問と言ふ理由から、其態度を忽ち豹變すると言ふことが、果してその言譯となるであらうか。私は甚だ疑なきを得ない。況んやその心理的解剖をして、これを幕末志士のそれと對比すれば、全く別箇の民族であるかのやうな觀がある。

今後も多數の國民のうちには、或は眞の冤罪の爲に、獄中に呻吟するに至るなきを保し難い。然し斯かる場合も假令死に瀕しても、虚偽の自白は決してしないと云ふ力強い人間となるやう修養したいものである。

(一一・一一)

哲 人 哲 國

横濱高工に哲學の講座が開かれたと言ふことである。工業と哲學とは一寸面白い取り合せであ

る。私は哲學に對しては何の智識もないが、常識的に、哲學とは人間社會の常識に組織を與へたものであらうと、勝手に解釋してゐる。

人生を経験して行くには、どうしても哲學に觸れることが必要である。その持つ哲學の分量が多ければ、氣宇は雄大であり、識見は高邁となる。そして其人亡んでも遺徳は永遠に残されるであらう。

これに反して、哲學的素質に缺くる者は、よし其の爲すところが多くとも、其場限りのものとなつて、世に何の反響も與へずして終るものが多いのである。

現代の所謂花形と目される人々でも、哲學的の人格に缺けてゐる人は、どことなく飽足らなさを感ずるのである。これを故人に就いて見るも、原敬氏の如きは、力の人であつたが、措しい哉哲學を持つてゐなかつた。又大隈伯は力の人としては些か缺けてゐたが立派に一つの哲學を體得してゐた。高橋是清翁の如き澁澤男の如き、いづれも哲學的の素質に優れた人々であつた。

これは個人の場合であるが、國家に於ても同じことが言へると思ふ。哲學のない國家は、國としての國格がない。我日本が國として優れてゐることは、實に最も偉大なる哲學を持つことである。

然し遺憾なことは、この偉大なる哲學を、指導し發揚する程の大政治家のないことである。國家の機關は、いづこも同じ秋の風で、徒らなる事務的となりお役所的となり官僚的となつて、そこに何の哲學を見出すことが出来ないやうな氣がするのである。洵に國家及國民の立場から残念なことである。

(一一・一二)

日獨の波紋

日獨防共協定が成立した。爰に光榮ある孤立を護つた日本は、新に一友邦を得たのである。更に進んで伊國との間にも何事かの進捗が取沙汰されてゐる。

一方調印まで漕ぎつけた、日露漁業問題が延期となり、日支三ヶ月に亘る綏遠問題が停頓状態に陥つた。

日獨協定の一投石が、楔機となつて、忽ち世界が三分せられたかの觀を呈するに至つたのである。即ち一方は日獨伊三國のファツシヨ的傾向を有する一團と、露佛と言ふ人民戦線派と、もう一つは國家的のイデオロギーを持つてゐない、英米の一團と言ふ三分野となつたのである。

さてこの三分野が、今後どう動くか、そうして各分野の抱いてゐる色彩をどう具現して行くか、實に興味深い問題である。

これを東洋の立場から言ふと、世界いづれの國も、東洋に發展しようとするものはまづ我國と親善提携を計らねばならぬ。英國は最もそれを知る國ではあるが、對米關係の複雑化から充分その意志を述べることが出来ないやうである。

獨逸は爰兩三年間に、歐洲に於ける位置を固め來り、餘力を以て東漸を策し、先づ對日親善を結ぶに至つたのである。その結果は、東洋を舞臺として、英獨の對抗となり、世界大戰前の鏖競合ひが再び展開される情勢となつたのである。

更に對支問題に就ては、言ふまでもなく我國の最大關心事であるが、不幸にして未だ曾てこの問題を料理し得る、立派な料理人がない。徒らなる紛議を醸しつゝあつて遂には或不祥事を豫期する危険な状態にあることは、甚だ遺憾なことである。

いづれにしても、日獨協定の一投石は、既に波紋を畫いてゐる。事の善惡ではない。これに對する充分の決心と覺悟とを國民に要求する。

辛 棒 競 べ

昭和十二年の春を迎へた。顧ると内外洵に多事多端である。國內に於ては庶政一新を高唱されたが、未だ其實を擧ぐるに至らない。

國際關係を見ると、日露漁業問題の懸案は容易に解決を見るものとは思はれない。又對支問題は首相外相共に北海道大演習の供奉も拜辭して、只管解決に没頭してゐるやうであるが、爾來四ヶ月その成果の齎されたものがない。

その間西安事件が勃發して二週間、暗雲は北支に漂ひつゝも、歸趨するところを知らぬ支那式を發揮してゐる。恐らくこれは、張學良が抗日を口實として、蔣介石との間に利權取引の一形態と見るのが至當であるかも知れない。

更に綏遠問題に至つては、依然たる未済を續けてゐる。又これ等の諸問題が隣接する滿洲國と如何なる關係を生ずべきか、何んとはなしに、この一年の間には或新事態が、極東の一角に突發するのではなからうかと言ふ、杞憂を抱かしむるに充分である。

眼を轉じて歐洲を展望すると、矢張りそこには、同じやうな事態を發見することが出来るのである。西班牙を焦點として、一觸即發の危機を胎んでゐる。只だ辛くも、英國の現状維持策が一縷の保證となつてゐるに過ぎないのである。

斯く考へると、世界の爆發點は、二つとなる。そのいづれかが爆發しなければ、納まらないものだとするならば、勝手のやうだがどうか歐洲からお先に願ひたい。大戦はその勝つ負けるに拘らず、頗る甚大な打撃を國及國民が負擔しなければならぬからである。

どつちがお先きになるか、これは恐らく辛棒競べである。この辛棒に勝つたものが戦争に勝つものであらう。

(一一・一)

兩英雄詩碑

十二月十七日は天氣豫報を見事裏切つて、洵に暖かな日和であつた。この日洗足池畔、勝海舟先生墓地並に西郷南洲先生留魂碑の傍に參集した私ども同志は、其處に建立した兩英雄詠嘆詩碑の除幕式を執行した。

西郷侯、勝伯、目賀田男等の遺族も式に列せられ、甚だ盛儀であつた。詩碑の句は徳富蘇峯先生
の作になり、

堂々錦旆壓關東 百萬死生談笑中

群小不知天下計 千秋相對兩英雄

この詩碑建立の同志は、いづれも日頃から蘇峯先生の敬慕者である。この日も先生から、兩英雄の歴史的觀察によつて、國史上の兩英雄の存在をはつきりすることが出來たのであつた。この兩英雄は、決して偶然に起つたものではない。神代以來三千年、尊い我國史の所産である。

今日の西班牙は、兩軍互に慘忍なる殺戮を繰返し、既に半歳に及んでゐる。人類の悲慘之より甚だしいことはない。然るに我兩英雄は、談笑の中に江戸百萬の生命を保證したのであつた。西班牙に、若しこの兩英雄の片鱗を示し得る人物があつたなら、恐らく斯くの如き戦渦を見ないで解決したことであらう。

これと言ふのも畢竟するに、西班牙は國としての、尊い歴史を持たない爲である。この國は昔から他國人に支配せられ、絶えず國內は分裂してゐた。只だ中世紀に、結婚政策により統一を遂げ、又コルテズ、ピザロの輩が、強賊的行爲によつて、他國の財貨を奪つた結果、一時歐洲に覇

を稱へたが、忽ち元の木阿彌となつて了つたのである。

西班牙は爾來再び、他國の支持なくしては、獨立し得ない状態となつたのである。蓋しその今日ある、當然の成行きとせねばなるまい。

(一一・一)

兩面の摩擦

影の形に添ふごとく、宇垣大將と政變は相對的のものとなつてゐた。その大將が廣田内閣總辭職後、突如大命を拜して、萬年候補の記録を破つたのであつた。

處が未曾有の組閣難に陥り、遂に組閣を斷念せざるを得ぬことゝなつたのである。大將は決して一界の武弁ではない。就中其政治的手腕に至つては、周知のことである。大將が曾て陸相時代に、四箇師團縮小を斷行し、又倫敦軍縮條約を支持し、又滿洲事變等に處した、手腕は確かに凡庸の材でないことを裏書きした。

然るに拘らず、大將が今次の如き憂目を見るに至つた原因は、奈邊にあるかと言ふとこれは明かに我國勢が、割切れない疑問符を残してゐるからだと言ふのである。

その疑問符とは何んであるか、即ち現状に於て、改革派と言ふものがある。その半面に又現状維持派と言ふものがある。五・一五事件、二・二六事件、國體明徴論争等の諸事件を挾んで、この両面が互に摩擦し合つてゐる。

大將の立場は、この場合改革派には都合のよからぬ、現状維持派と目される不利益のあつたことは、否み得ざる事實である。

然し冷靜に考へると、この両面は兩極端である。極端に走ることは、我民族的傳統の忍び得ざるところである。これは早晚互に歩み寄つて、中正なる道を歩むに至るであらうと確信する。現に現状維持派の中にも、革新の幾許があり、革新派の中にも、現状維持の幾許かを失はないことは、夫等の人々の宣明するところによつて明かである。

然らばこの兩派は、何によつて互に融合するか、其媒劑は何かと言ふと、言ふまでもなく、それは我國民の大本をなす皇道精神に外ならないのである。この大綱を互にはつきり認識した時に、學國一致の萬歳は叫ばれるものである。

氣 魄 の 辯

蔣介石氏の西安監禁事件は、世界の報道陣をあつと言はせた。この事件のうちで私の興味をひいたことは、事件が極めてあつさりと言ひ付いて、蔣介石氏の生還と共に、當の人物張學良氏が相携へて歸來したことである。

それからこれは、宋美齡夫人の筆記だと言ふものによると、蔣氏は全く敵の重圍にあり、死活の權を握られてゐる最中に、張氏の要求を拒絶して

「自分は支那四億の代表である。自分の人格は國民の人格である。この絶對貴重な人格を自ら欺いて要求に署名せんか、民國を欺き政府を欺くものである。自分は國の爲に誠意誠實に働いてゐる。一切の私利私慾は、毫も欲するところではない。若しこの言に反する行爲がありと認めれば、自分を殺せ。又この事件による自分も責任をとる考へだが、汝等も不逞反亂の責を負ふべし。」

と張氏に迫つたと言はれてゐる。果して然らば、この蔣氏の氣魄は洵に賞嘆すべきものであると考へる。この氣魄と條理に對しては、流石の張氏も手の下しようがなく、忽にして主客顛倒事

件は解決したものと考へるのである。

我國の現状を見ると、どうも氣魄のある人物が、だんくなくなるやうな氣がしてならない。特に生死一代の危機に臨むと、日頃の修養もどこへやら、忽ち前後の分別を失ふのが、常態である。

この意味に於て、今次の西安事件は、我國民にも一服の清涼劑たるを失はないであらう。

(一一・一一)

粗 製 濫 造 人

私が藏前の高工に、奉職してゐた明治四十四年頃、當時の校長手島精一先生は、工業教育界の第一人者であつた。

先生は始業式や卒業式の講演には、いつも我輸出入貿易表を舉げて、輸入超過と正貨準備の減少を痛嘆せられ我製造工業の奮起を熱望された。

然るに先生が現職を退かれた後、歐洲大戰が勃發して我財界は有卦に入り、黄金の洪水に見舞

れた。が今度は肝腎の物資が缺乏して來た。その結果、古鐵を溝の中から探し出したり、檻襖屑を集めて、インデゴを搾出したりした。

兎に角何んでも、形を拵へさへすれば儲かると言ふ結果は粗製濫造となり、その結果は戦後の恐慌來に貿易を悪化し、不況に拍車をかけることゝなつた。

然し又一面この不況整理の爲に、製造工業の合理化と、技術上の改善を加へた爲再び頽勢を挽回して、爰許數年の間に、我工業の偉力を發揮するに至つたのである。

これを人的に見ても同じ経路にあつた。即ち大戦中は、卒業生は幾人あつても足りなかつた。就職は正に數百パーセントであつた。従つて粗製濫造に陥つた。その結果卒業生の就職は、極度に困難を見るに至つたのである。

然し今日は一陽來復して、好調を示しつゝある。これは大に賀すべきでもあるが、冷靜に考へると、専門校の卒業で、年齢二十一二の青年が、七八十圓と言ふ高額を得ることは、餘りに話かうま過ぎることである。

このうま過ぎる話の爲に、人生行路が餘りに樂過ぎる。樂過ぎる結果は人間が弱くなる。世の艱難と闘つて、玉となるような人物は、だん／＼なくなつて來る。自力更生の強い道を歩むやう

な、人間がなくなることは、それだけ國家の弱點を生ずる譯であるこの點をお互に反省せねばならぬと考へる。

(一一・三)

長岡半太郎先生

二百の卒業生を送り、二百の新入學生を迎へた。出る人も、入る人も、心得べきことの第一課は、健康である。或は實社會に出で前途を囑望されつゝも、不幸病魔の爲に斃れ、或は難關を突破して、入學の光榮を感じつゝも、中途にして學を廢するに至るが如きは、青年時代の一大悲惨事である。

まづ健康である。卒業式に來臨された長岡半太郎先生は、我學界の先驅者である。先生は自身の御研究と、同時に門下生の養成に異常の努力を拂はれ、その結果秀才は先生の周圍に雲集の有様である。先生は高齡正に七十三であるが、打ち見たところは壯者を凌ぎ、老體と申上げることはお氣の毒である。

先生は寸暇なき御活動に拘らず、この健康を保持せらるゝのは、要するに生れながらの健康の

然らしむるところではあるまいか、と考へた私は、先生にそのことをお伺ひすると、先生は言下に答へられた。

「私は毎日缺かさず體操をやつてゐますよ。」

先生のこの體操は、矢張り先生案出の獨自のものであるさうだ。

私はこれまで、長壽者に就てその健康法を尋ねると、符節を合したように、その人々に、必ず、一つの健康法があることを確めた。私は退職するに當り、急に身體が閑散になると、病氣になるから注意するやうにと、人々から忠言を受けたのであつたが、私は日頃から一つの健康法を實行してゐる。退職後二年になるが、お蔭で健康を保持してゐる。

健康法は、その人によつて方法は一定しないであらうが、兎に角一日のうち三十分か一時間を健康の爲に割愛する丈けの心構へが必要である。

(一一・三)

時 の 流 れ

横濱高工の特色の一つと算へられるのは、水力實驗室の設備であるが、この設備には仲々因縁

のあることである。大正十二年北京郊外の雙橋に無線電信局を、建設することとなり、支那から我國がその工事を引受けたのであつたが、その設備に水力實驗室の研究を必要とすることとなり、この設備による工作と、同時に遠藤政直教授が、現地に出張することとなつた。

そこで同教授の努力が酬ひられ、無電局は無事竣工したのであつた。私は當時同教授の功勞に就て、當時の芳澤駐支公使に叙勳の申請方を依頼したのであつたが、不幸にして同無電局が支那政府との間に問題を生じて使用するに至らず従つて叙勳問題も沙汰やみとなつたのであつた。

然しその結果の如何に拘らず、遠藤教授の功績と、水力實驗室の完備は正に誇るべきものであることは變りはないのである。

更に應用化學科に於て、熱帶化學工業の講義は、卒先新機軸を開いたものであり、特にこの講義の擔任者として、堀江不器雄教授を、蘭領印度、海峽殖民地に留學せしめたのであつた。この南洋へ海外留學生を送つたのは、記録破りのことであつたのである。

我國策の一つは南進的殖民であり、熱帶資源の利用であることは言ふまでもないことである。學校はこの意を體して、校章も浪を現し、又大陸會の如き機關を組織してゐる次第である。

この二つの特色を代表しつゝあつた兩教授が、今回同時に學校を去るに至つたことは洵に寂寥

を感ずることである。然し時の流れと言ふものには、何物も抗することは出来ないものである。學校も創立十七年となつた。そうして時は昨日も、今日も、明日も永遠に流れ行くであらう。

(一一・五)

本 格 の 横 濱

また横濱開港記念日がめぐり來た。記念日の來るたびに考へることであるが、一漁村に過ぎなかつた横濱が開國進取の機運に乗じて、一躍世界の横濱となり、茶にしろ、生糸にしろ、陶磁器にしろ、漆器にしろ、横濱で仕事を始めさへすれば、何んでも繁昌した、貿易全能時代であつた。然しその反面には、貿易萬能に禍せられて、文化的の施設は稍もすれば、看過され勝ちとなつた。即ち大正九年に横濱高工が創立されるまでは、高等教育機關が一つもなかつたのである。

— 95 —
又今日市是となつてゐる、工業立市の如きも、造船業としては僅に横濱船渠があり醸造業ではキリン麥酒があり、化學工業では保土ヶ谷曹達があるに過ぎなかつた。

海港の背景に、工業地帯の存在を必須條件とすることは、産業政策上の定石である。横濱はこ

の定石を可成り長期に亘つて忘却してゐたのであつた。

然し幸にして、その後漸次工業招致運動が擡頭し來り、遂に市是として、工業を守本尊とするに至つたのである。最近に於ける鶴見埋立方面に於ける工業の急進は、實に驚くべきものである。この機を逸せず、我横濱市も本然の面目に立ちかへつて、工業と海港の連繫を密接ならしめ互に其の機能を發揮することに努めなければならぬのである。

頃來横濱は、貿易港として昔日の威力を失つたかの如き批評をなす者がある。然し私はそれを信じない。

横濱は貿易一本槍で進んで來たが、横濱は今度こそ本格的の工業、貿易の二刀流で眞の威力を發揮すべく、身支度をしてゐるところである。延びんが爲に屈した一瞬に過ぎないと考へる。

(一一・五)

山 莊 の 喜 び

六ツ川山莊の裏山を譲り受けたのは、昭和九年のことである。當時は雑木の下は一面に小笹が

密生して、地形は急勾配となり、足の踏込むことさへ困難だつた。

その雑木を整理し、笹根を刈つて、小徑をつけ、地面を均して見ると、案外なもので一寸した遊歩道となつた。その中途には椎の木が數本群生してゐるところがあり、周圍の様子が神社の安置所と言つた感じが自然に出てゐた。

そこで私は何かこゝには、祀るのが自然であらうと考へてゐる折柄、思ひ掛けなく東郷元帥の墓去に會つた。そして元帥の三十日祭を期してさゝやかながら東郷神社を建立した次第である。

其後元帥の遺徳により、社殿の上屋を始め燈籠、手水鉢、鳥居と次々に諸方から寄贈があり、社殿の形態も漸次整つたのであつた。

一方参拜者は、青年團、海軍在郷軍人團、横濱高工、朗吟會、體育研究會、野球部、應援團、第一寮生、音楽部ブラスバンド團や商工實習全校生などの諸團體の外に市中の各實業團體並に個人的の参拜者で絶えず賑つてゐる。

私の東郷神社建立の意圖は、斯かる廣汎の背景を持つものだとは豫知しなかつたことであつたが元帥の遺徳により、斯くも盛んな参拜者の群を見るに至つたことは、洵に天佑として謝せねばならぬことである。

就中私自身より言ふも、東郷神社の参拜を中心として、因縁深き横濱高工並に商工實習の兩校及び各實業團體と、變らぬ縁故を繋いで行くことの出来ることは、何んと言つても望外の喜びとして、感謝に堪へぬところである。

(一一・六)

教

權

政治上には政權と言ふものがある。教育上には教權と言ふ熟字はないが、それに似たものがあるようである。

學校は神聖だと言つて或學校では事件の探索に向つた警官の侵入を阻止したやうなこともある。校内の運動場は神聖なものだとして、下駄ばきで侵入したものを、毆打したやうなこともある。學校が神聖のものであり、一種の權威と尊嚴を持すべきだと言ふ見方には決して反對するものではない。

然し今日の學校を見渡して、果してその言ふが如き神聖さと、尊嚴と、權威らしいものが、存在するか、どうかと言ふことが第一の問題である。

例へば校内で何か不祥事件が起つたとする。校長は如何なる處置と態度を執るであらうか。まづその校長は何を措いても監督官廳の指揮を仰ぎ、平身低頭して罪を謝する以外には、何等自發的の處置を講じ得ないのが通例である。

一體一校の校長たるものは、生徒と言ふ子供の親である。自分の子供の不始末を自分で處置が出来ないで、他人様の指圖を仰いで始めて始末がつくやうでは、第一親たるの資格がないではないか。一校の生徒を育て、行く校長である以上は、其の委された責任を一身に負つて事を善處してこそ、校長としての存在價值がある。

生徒の訓育は、斷じて校長の全責任であり、校長が第一線の任務に服すべきである。この覺悟なくして、只だ單なる監督官廳の小使役となり、事務員化された校長の餘りに多いことを痛嘆せざるを得ないのである。

(一一・六)

列車型の學校

私は今の學校教育に、一つの大きい不満を抱いてゐる。それは世の多くの人々が小學、中學、

高等學校、大學を一聯として、これを正系的教育系統だと考へ、其他の中等實業校、専門實業校を傍系だとしてゐることである。

この正系、傍系の別に對しては、常に傍系側の學校當局から不平不滿の聲が洩されてゐる。これは事實である。然し私はこの争には超然として來た。何故なれば、この争は畢竟するに形式上の争に過ぎないからである。

私の考では、今日の學校教育と言ふものは、恰度切符を買つて、汽車に乗るやうなものである。先づ押し合ひへし合ひして、やつと停車場の窓口で切符を買つたかと思ふと、今度は改札で先を争ふ、プラツトホームへ出て待つてゐる。汽車が來る。停るか停らぬかのうちに降りる者、乗る者互に押し合つて、やつと列車に身を入れてやれくと、周圍を見廻すと、既に腰を掛け得る空席は一つもない大満員である。

それでも乗つたのが、めつけものである。一生懸命にどこかへつかまつて、揺られながらよめきながら、運ばれて行く。勿論鐵道唱歌に出て來るやうな、汽車の旅路の愉快さなどは、藥にしたくも見出し得ない。景色のいゝ筈の窓外を覗く餘裕さへない。そうして兎にも角にも下車驛まで連れて行かれる。

と言つた汽車旅行が、即ち今日の學校教育である。これでは下車驛に着いた時は半病人である。卒業して見たところで使ひ道にはならないのである。

然し中にはこれではいけないとさつて、途中下車をしたり、或は思ひ切つて車窓から飛出した者がある。圖抜けた人物に多くその型の人があるのは如何にも皮肉なことである。

(一一・六)

合 掌

露西亞の革命史と、我明治維新史と甚だ酷似してゐる。と言ふと直ぐ反對論が出さうな氣がする。然し私はそれが全面的に似てゐると言ふのではない。勿論兩國體、兩國民性の間に非常な相違がある、只だ其歴史の過程に於て、相酷似するものがあると云ふ意味である。

明治維新の直前には、色々の事變が勃發し、又種々の議論が湧起して、志士の活舞臺となり、その大詰に於て大久保、西郷の兩雄が、維新の大業を成就した。然し兩雄並び立たずして、征韓論で物別れとなり、西南の役の導火線を切つたのである。

露國の革命一派は、久しく帝政を覆さんとして、革命志士は非常な犠牲を拂ひつゝ、遂に世界

大戦の機会を掴み、レーニン支配下に多年の宿望を果したのである。然るにレーニン逝くや、トロツキー一派の世界革命黨はスターリン一派の一國社會主義黨と對立することゝなつた。この場合、前者は南洲の役に當り後者は甲東の役に當つてゐる。

又一方維新の大成に、遠大なる智謀を示した木戸孝允は不幸中途に逝き、露國五年計劃の設計者オルジヨニキーゼも同じく中途に病死した。

更にスターリン一派は、亡命するまでは、いづれも國外に出たことのない人々によつて固められ、トロツキー一派は、いづれも國外生活をした人々である。この意味での兩者の對立は、些か南洲、甲東の場合と相違してゐるが、兎に角不思議に類似の點が多いのである。

南洲城山の露と消えて、後一年甲東又世を去つた、然し我國體には微動さへ與へなかつた。それはこの兩雄の争も要するに臣下の間の争であり、天皇の御親政は炳として日月の如く、光輝は些かも揺ぐところがなかつたのである。

翻つてこれを露國の場合に考へて見よう。一度レーニン死せば、忽ち兩雄血を以つて闘ひ、今や兩者の勝敗或は決したるが如くにして、又然らず。其前途も、逆賭を許さないものがある。従つて其勝敗存亡により、國體、國策は忽ち反轉する譯である。

斯かる國家、國民は洵に氣の毒千萬である。さるにても、我々日本國民はよき日の本に生まれ
たことゝ今更ながら合掌せざるを得ないのである。

(一一・七)

學 歴 時 代

大正六七年に、藏前高工に昇格運動が起り、物議騒然たるものがあつた。この問題は遂に中橋
文相の二枚舌問題を惹起して、愈々白熱化したのであつた。

この時高工側のスローガンは「高工は帯には短かし、褌には長し」と言ふのであつた即ち高工
は、帯の大學には及ばない、と言つて褌の工業校でもない。全く中途半端なものだから、この半
端的存在から帯にならうと言ふのが、運動の趣旨であつた。

私は當時同校に在職してゐたのであつたが、感ずるところあり、この運動の局外にあり、間も
なく、この中途半端な高工を一つ貫つて、東京を去り横濱へ來た時は、孤立無援の状態で、藏前
からは一人の教授も連れて行つてはならぬと言ふ條件を、附せられてゐた。

それから今日のことを考へ合はすと、進歩か逆行か分らないが、兎に角高工の存在は嚴として

動かすべからざるものとなつてゐる。現に今年の實業専門學校長會議に於ては東京、大阪に高工増設の必要が説かれてゐるのである。

二十年前には無用の長物として論難された高工が、二十年後に増設の必要があるなどは、一種の奇蹟と言はねばならぬのである。

然し私はその二十年前から、學校生活は高工丈で澤山であると確く信じてゐた。そして若くして、早く實社會に出で、元氣のある間に思ひ切つて働いて、多くの經驗を積むがよい。若し此の勇氣のない者は大學へ行つて學歴のレッテルを世間に買つて貰ふもよからう只だそのレッテルが物を云ふか言はないか、それは保證の限りでない。今の世の中は實力時代であり、人物時代である。學歴時代はもう過去のものとなつたのではないか。

(一一・七)

學位の獲得

横濱高工出身者から、二人の學位獲得者が出た。電氣化學科大正十四年卒業の仲田旭君が工博應用化學科大正十二年卒業の横山稔君が理博となつたのである。

この春のことである。お隣りの商工實習校の校友會のあつた時に、近くこの學校の卒業生のうちに、學位を獲る者があるとの噂を聞いた。實習校は中等程度であり、然かも卒業生を出して以來十三年である、然るに高工は十五年で、専門校である。さては弟に兄貴が追越されたかと、思つたのであつたが、幸にして、兄は兄らしく二人轡を並べて榮位を獲得し、續いて實習校も豫定の通り、大正十五年の應用化學科卒業中尾健君が、醫博となつたのであつた。

私は兩校ともに、深い關係にあり、その兄弟校から、期せずして同時に三人の學位獲得者の出たことは、二重三重の喜びを重ねたものである。恐らくこの快事は、只に兩校の喜びのみならず全國専門校、全國の商工業校にも誇るべき記録であると信するのである。

私の横濱高工並に商工實習に在職中、高工では創立以來教師にして學位を獲得した者が九名の多きに達した。これは洵に誇るべき事實であつた。所謂勇將の下に弱卒なしで、この教師の教へ子から、學位獲得者の出ることは、一面當然のことでもある。

有體に言ふと、私はこの日の來ることを竊かに期待し、待望久しいものがあつたのである。

どうかこれを皮切りとして、今後は續々と、學界の勇將の躍出されんことを熱望し弘陵學園に初めて光榮の大幟を翻した三君に對して深甚の敬意を表するものである。(一一・一〇)

建築競技設計圖集に就て

先頃建築科の鈴木助教が我輩を訪ねて中村順平教授からとして「建築競技設計圖集」と名付ける一冊を贈られた。此の圖集は中村教授が過去十二年間學生の修學の方法として課した競技問題に學生が應へて提出した作品中からその秀逸なものを選抜して一冊に收めたもので、精巧に印刷された合計百三十二枚の何れをとつて見ても皆優れた藝術品に接するの思ひあらしめる。

職員なり又出身者なりが専門の學科に就て独自の研究をとげてその報告書を我輩に贈られることは度々あることで、我輩は頁々を開けて見て如何にその人が苦勞をしたか、又かくの如き報告書が出来たと云ふことが、其人に如何に愉快であつたかに思ひ及んで分らずながらもその人と氣分を同じくし得ることを喜ぶ次第である。

今この圖集に對して同じ喜びを感ずると共に、此れは十二年間在學した百幾人かの人達が如何に中村先生に依つて指導薰陶せられたかと言ふことを、形に於て見ることが出来るので我輩の受ける感想も自ら異なるものがあるのである。此れを手にすると非常にのどかな柔い氣分に打たれるのである。此は藝術品であるからであらう。又我が建築學科が多く他の建築科と異り、中村

先生の理想が如何にも圓熟した形で同科内に満ち／＼てゐることを如實に感ぜしめる。

又此の圖集を繙いて見る者はこれに點數を付してあるのを見て學校全體の方針と矛盾するのではないかと奇異の念に打たれるかも知れない。しかしこれは中村先生も其の序文中に於て述べられてある様に、一定の問題を一定時間内に完成せしむる一つの競技であるとしてゐるから恰も運動の記録の様なものであり、我輩在職中から何等其點に於て意に介しなかつたのである。

我輩辱知の畫家に松岡壽先生と云ふ方がゐる。我が國洋畫界の元老で今回我輩の記念肖像を畫いて呉れた方である。少壯にして伊太利に長い間學んだ人でその當時の畫で宮内省に納められてあつたものが先般ふとしたことから其の畫を見るの機會を得て誠になつかしい思をしたと言ふことをしみじみ我輩に話された。

今此の十二年間の圖集はなにも傑作と言ふのではないかも知れぬ。しかしながらこれらの作者の中から後年出藍の譽ある大家が出て來ても、此の圖集に對してやはり昔のなつかしみを感ぜられるであらう。同時に又恩師中村先生や我輩横濱の建築科を思ひ起される絶好の記念物であらう。

演習はハイキングには非ず

宣戰の布告こそ無いが支那事變が非常な大戰爭となり、國家は總動員の姿勢をとつたのである。去る十三日より一週間に亘つて國民精神總動員週間として學國一致其の徹底に邁進した。

其の十七日の神嘗祭と日曜日との重なつた日を以て、横濱市全體の青年が例年の聯合大演習を舉行することになつた。此の未曾有の非常時、支那全面に於て特に上海方面に於ては惡戰苦闘の報が日々に到る時であるから、例年に比べて一層の元氣と緊張を以て、此の演習が始終するものであらうと非常な期待を持つて我輩は眺めておつたのである。然るに其の日は多少の雨があつた爲に演習が中止せられたと云ふ事を聞いて、我輩は啞然として云ふ處を知らなかつたのである。

何故に雨天であつた爲に其の計畫を延期したかといふことは我輩は知らない。止むを得ざる理由が有つたなら我輩はお許しを願はねばならない。

雨の中の演習は無論苦痛である。然しながら若も青年の健康の事を考へ、又演習行動の不自由のことを考慮しての中止なれば我輩は斷じて同意出來ない。風邪其の他の不健康なるものを強ひ

て皆演習に召集するの必要は認めない。其の旨を傳へて豫め靜養を促して好い譯である。健康なるものは、斯くの如き惡天氣に思ふ存分の演習をして、始めて演習の意義あると云はねばならぬ。

北支の野に於ては幾十年來の豪雨で黄河が氾濫して、我軍が或は水中に或は泥濘の中に苦戦しつゝある。上海クリークの線に於ても又同様其れ以上の惡天候と戦つてゐる。

昔毛利元就が特に飛雨を利用して嚴島を攻め中國を徇へ、織田信長が大雷雨に乗じて桶狹間に今川義元を斬り覇業をなしたことは我國の歴史に於て顯著な事實で誰でも知つてゐる。毛利織田勢の新興潑刺たる意氣が今猶躍如としてゐるではないか。

此等のことを考へて、あの十七日の微雨を恐れて演習を中止したといふことは、何處に其の精神があるか了解に苦しむ處である。秋晴の寒くも無く、暑くもない日に演習するが如きは一種のハイキングである。ハイキングの積りで演習をやるものとは、我輩は斷じて信じないのである。

青年諸君果して如何となす。

(一一一・一一)

名教自然碑

此一日に名教自然碑の除幕式が舉行された。此の碑は一昨年夏頃より、學校關係並に學校出身者の方々に依り委員會が設けられ、長い間の御苦勞で出來上つたものである。そうして之が私の退職記念として發起せられた事であるので、私としては之等諸君の好意に對して言葉でも又文字でも言ひ盡し、又表す事の出來ない深い感謝をしてゐるのである。

除幕式當日の前後は天候が甚だ險惡で其の日も危ぶまれて居つたのであつたが、幸にして朝迄微雨であつたものが晴れ上つて、除幕式の終る正午頃には、かすかながらも陽日を仰ぐ事が出來た。多數の人々が各方面殊に遠方からも來て下さつたといふ事に對して、眞に感激に堪へない次第である。

蘇峯徳富先生の臨場を辱うしたのみならず、私にとつて光榮至極の祝辭を賜つた。先生が壇上に立たれた時には、端なくも私が最も尊敬する新島先生が來場せられた様な感を催した。又京都帝大の名譽教授である大幸勇吉先生がわざわざ京都からおいでになられた事は、私の青年時代の師として仰いだ方であるので一層の感謝に堪へなかつた。猶祝辭を辱うした貴族院議員有吉忠

一氏は、横濱高工の創立と不可分の關係ある一人として、有難き來臨であつたといはねばならぬ。有吉氏の祝辭の中に私と始めて會つたのは、氏が横濱市長として來られた其後であると云はれたが、之は茲に訂正をして置き度い。大正九年に横濱高工が開校した秋、私は今も會計主任をしてゐる大山春翠氏と同道して、伊勢の大廟と桃山御陵に參詣して學校創立の御報告をした。同時に足を神戸に向けて當時の兵庫縣知事であつた有吉氏に、縣廳に於て面會して親しく學校開校の狀況を報告し、且創立當時の神奈川縣知事であつた同氏に謝意を表したので、之が初對面であつたのである。

又出身者の中に於ても日野義一君の如きは九州大牟田の遠方からわざわざおいで下さつて、長文の祝辭を寄せられた事は同様に感謝に堪へないのである。其他大阪方面各處からわざわざおいでになつた校友諸君に對しては、一々其の名を列舉致しませんが、私の銘記して忘れられぬ所である。

もとく此の記念碑は發起人諸君に於ては、私の胸像若しくは銅像を建設してやらうといふ企てであつたのであるが、之を辭退したのであつた。そして私の希望を入れて此の名教自然碑となつたのである。何故に私は之を辭退したかといふ事は、はつきりと説明が出来ない。只何となく胸

像若しくは銅像よりも「名教自然碑」が欲しかつたといふに過ぎないのである。發起人諸君がまげて此の記念碑にせられたといふ事に對しては、只々感謝するのみである。

而して中村順平先生の意匠に依つて、新建築を背景として吾が高工の支關前に鐵筋コンクリートの構造物に相應しく出來上つて、校庭に美觀を添へる事の出來る様になつた事に就て、中村順平先生に深甚の謝意を表するのである。唯表面の文字が悪筆である事は氣掛りである。蘇峯先生は私に告げて「お前の學校の庭に立つ石にお前が書くのであるから如何に惡筆でも何人も文句を言ふ筋合ではない。」と鼓舞せられたので、意を強くして生れて始めて大文字を揮毫したのである。學校の附近に住居し、絶えず校門の前を通り又門に入り、此の碑を眺める事を得るのは私も眞に幸せ者であると此碑の建設に努力せられ又共讃をして下さつた方々に永遠に感謝する次第である。

(一一・一一)

今の學校は使用人型人物の養成所か

伊藤公とか桂公又後藤伯といふ様な我國に於ける先輩政治家は、野にある時でも國を憂へて粉

骨碎身して居つた。又實業家にしても毀譽褒貶は別問題として、澁澤子爵を始め安田善次郎又淺野總一郎翁の如き人は独自の立場を以て財界、實業界に濶歩して居つた。又大なる背景を持つてゐるとは言ひながら莊田平五郎、豊川良平益田男といふ様な人も各獨歩の地位を占めて、隱然と事業界の重鎮をなしてゐるのである。

斯ういふ人々が現在の世の中に矍鑠として存在して居つたなら、外交に於て、戰時經濟に於てどういふ働きを見せるであらうか。今の世の中に於て、何人が自分の独自の地位聲望といふものを堅く占めて、この事變に處しつゝあるものがあるか指摘する事は頗る困難であるが、國家全體としての威力といふものは、これを日露戰爭に比して隔世の感ある程強化されてゐる。

然して、これを概括的に觀察して見ると、國家の機能は殆ど軍部に集中してゐるかの如くに見える。事變以來、吾輩は横濱東京に於て二十數回の事局に關する講演を、軍部並びに軍部外の人から聞いた。軍部外の人々からは何が故に今回の事變を戦ひ、又如何に結末するかといふ事に對しては、實に不徹底極まる事のあるのを感じしめる。甚だ遺憾の事と思ふ。

斯くの如きは、一つは我國教育の缺陷から來てゐるのではないかと思はれる。吾輩は、過去十五年の在職中、講壇に立つて屢々「人に雇傭せられる使用人を養成しつゝあるのではない、自主

獨立の人間を養成しつゝあるのである。」と主唱して來たのである。然しながら時世の趨勢は全く使用人養成に墮落して居たのを感じずには居られない。

學校長會議を開いて色々討議をした末に、屢々知名の實業家を招待してお互に意見の交換を行つた事がある。さういふ際に、どういふ人間を供給すればよいかといふ如き質問が主題となる。實業家の方面からは或は語學の力をもう少しつけて貰ひたいとか、工場に來て直ぐ間に合ふ人が欲しいとか、或は反對に直ちに間に合はなくとも將來伸びる様に基礎の智識を授けて貰ひ度いとか色々な注文が出て來る。そうして學校長は、畏りましたと引き下るのが普通である。

故に人間を供給しつゝあるのか、能力のよい機械を供給しつゝあるのか判らない。教育の根底に於て其處に大なる誤謬があると言はねばならぬ。この非常時に於て、一つの大きな組織が動いてゐるといふ事はよくわかるが其處に卓越した人材が動いて居ないといふ事は聊か物足りない感じがしてならない。

我が弘陵の出身者は使用人として教育せられつゝあるとは思はない。よろしく活眼を開いて新しき年を迎へると共に猛虎の勢を以てこの非常時に義勇率公の誠を盡されん事を希望して止まな

バアルバツク女史の大地

去年の夏頃ふとした事から「大地」といふ小説を読んで多少の感興を催した。處がその後新聞雑誌で「大地」のことが非常に評判になつたので、更に他の二冊を求めて一層の感興を以て讀んでみた。

著者であるバアル・バツクといふ米婦人は僅か四ヶ月の嬰兒で兩親の懷に抱かれ支那僻村に渡り、兩親はキリスト教の傳道をして居つたらしい。そうした境遇で著者は十七迄支那で生活をしたので、支那語に於ても支那人同様に熟達したのであらうと思はれる。それから生地米國に歸り母國の教育を受け多分二十五六才にして再び支那に渡り、最近迄支那に居住したものである。

「大地」三冊の中には支那に於ける最も貧しい農夫が、饑饉のために奴隸として賣られた女と結婚して、刻苦精勵し妻の忍耐力等の力もあづかつて遂に大地主となり、子供はそれ／＼軍閥の頭目その他の大人となり、孫は又舊支那より新支那にうつる社會情勢につれて種々活動していく様子を述べたもので、恐らくは著者の四十年に餘る支那生活中に支那の變遷した一方面を描いたもの

であらうと考へられる。

此「大地」を非常に稱讚する知名なる批評家は、此の「大地」に現れて来る種々なる人物をとらへて非常に同情と興味を以てこれを觀察し、又現れてくる場面は獨り支那に特殊であるのみならず、日本に於ても亦世界的にも共通に考へられるものがあると云つてこれを推舉して居る。吾輩も全く同感であるが併し此れは「大地」を小説として批判價值付けたもので、小説家でも批評家でもない吾輩には又別の感興が浮び出るのである。

以上親子孫三代を通じてその變化した一族の狀況を描いて居る中には大洪水、大干魃、大蝗害、兵匪、土匪等があり、或時には此等の天災の爲に一家が慣れた故郷を後にして異郷へ流轉するといふ悲劇もある。此の外には婚禮とか葬式とか出産とか全ての出來事が描かれて居る。如何にも著者パール・バックは支那の大地の中に深く足を踏み込み、支那の極貧の農家の家庭より富豪の家庭に至るまで、深く頭腦を打ち込んで居つたことが深刻に示されて居る。

吾國にも支那に永く居住して或は幾十度となく支那に往復して、支那語にも支那人同様に堪能な人も相當ある筈で此等の人々にも支那の色々な事物に就ての著書も澤山ある。

然しながら此等の著書はパール・バックの書いた「大地」なり「母」といふ小説に較べて見れ

ば、かなり皮相的であるのを發見せざるを得ない。即ち吾輩の讀んだ吾同胞の書物は支那旅行者の觀察又は視察談と見るより外はないやうな氣がする。

由來吾國に於ては海外の事情を研究するのは専ら歐米に限られて居つた。此は吾々の國力發展の爲には先進國を知る必要があつたからである。支那の研究にまでには手がとどかなかつたらしい。

我國の知識階級の人々の支那に關する知識といふものは、外國人の研究による方が寧ろ多い様に感じられる。例へば有名なる萬里長城に就て日本人の手によつて研究した著書ありや、矢張外國の宣教師の書いたものより之を得て居る。この長城を無用の長物であると云つた邦人さへある。認證不足もこゝに至つては啞然として言ふ所を知らない。あの揚子江の大河についても同様である。又アルサ・スミスが書いた支那に關する二冊の書物は、廣く支那に興味をもつ我國人に讀まれた。勿論我國に於ても支那に關する研究は全然等閑にされたのではない。今日上海にある昨年來の兵亂で破壊された東亞同文書院の創設者荒尾精といふ志士の如きは、我青年を上海に集め支那研究の端緒を開き、學業の餘暇に賣藥其他の行商をして支那全國を跋渉し、遂に支那省別全誌といふ大部の支那の産業、風俗、習慣等を書いた大著書をなさしめたものがある。

然しながらこれと雖も各方面から材料を集めた矢張り旅行見學記の如きものである。深刻なる支那を根底より描き出したものではない。

昨年末北支から六人の文化使節が來朝したが、その人々の中で吾輩に「北支に於ては中等學校其他に於て日本語を必修課目としたので、それらの教師其他三萬人位の日本人の來支を要する。」と言つて居つた。事變後に於ては獨り支那の資源を開發する爲に多大の技術者其他の努力が必要のみならず教育方面に於ても亦多大の人數を要することゝ思ふ。吾々青年學徒は吾國家膨脹發展の一大根據地を支那大陸に据えることに大いに覺醒せねばならぬ。それが爲には徒に利權とか利害關係といふやうなものを考慮することゝまらず、大いに精神方面に深入してパール・バック以上支那の大地、支那の社會に心身を投げ込む知識階級者の輩出することを希望する。所謂千載一遇の時大陸に銃を執つて戰ふ機會を得なかつた青年諸君特に大陸會々員の奮起を切望する。

(一三・一)

宣 傳

先般或る知人の話にロンドンに居る日本關係の或る英人が、ホテルニユーグランドに、今日本

に行つてもバターやチーズが不足してゐると云ふ様なことは無からうか、と問ひ合はせたのとこ
とであつた。世界戦争の時の歐洲各國が食料品の大欠乏に悩んだことは周知の事實であつて、支
那事變に於ても又同じ困窮が到來してゐるものと想像されたのであらう。

又過日當地のサムライ商會を訪ねたら其の店の方の話に、ハワイに居るお客から通信があつて、
日本に行き度いと思つて居るが今日本に行くと思つて飛行機や潜行艇の危険がある、といふので中止す
るの止むを得ないといふことであつた。此の二つの事實から考へてみても、如何に我國の事情は
海外に知られて居ないかと云ふことが殆ど意想外の感がある。

我國の現状に於ては、所謂銃後の社會としては殆ど表面上は平素と異なる處を見ない。唯所謂支那
の宣言する長期抗戰に備へて、種々なる方面に統制とか總動員とか言ふ様な種々な準備が實行せ
られつゝあるに過ぎない。其等を除いては所謂、「秋津洲裡月明多し」の感がある。以上のことか
ら考へて、海外に多數派遣せられて居る宣傳の使節は何をしつゝあるかと云ふことを、思ひ起さ
ざるを得ない。日露戦争の時にも、國家を代表して海外に日本を宣傳に行つた使節がある。或ひは
明治大帝の下し賜つた教育勅語を翻譯し奉つたり、其の他我國傳統的の文學藝術の如き物迄も
携へて、我國體を理解又は宣揚することに努めたのであつた。相當の功績は其れに依つて認めら

れたことであると思ふが日露戦争後さういふ紹介が繼續せられてゐるとは思はれない。此に反して外國殊に歐米の國情といふ物はその國家民族傳統と言ふものに到る迄も日に月に研究せられ我國に到來して居るのである。其れが爲にかへつて我帝國の臣民は我國體迄も忘れてしまつたと言ふことになつた爲、國體明徴論が今更の如くに叫ばれ、殊に戰時に當つては國民精神總動員といふ様な企てまで起つて其の精神總動員に於ては、皇道精神即ち國體明徴と言ふことを説明し、徹底的に此れを自覺せしむる企てを必要とするに到つたといふことは海外に向つての宣傳のみならず、自國に於て此を怠つて居つたといふことを如實に經驗せられる次第である。

今回の事變に於ても諸外國の識者が巨億の資源を投じ、數萬の死傷者を犠牲として支那と戦ひ、而して一方には何等其處に我帝國に領土慾といふものは無い、殊に國土狹少にして人口過剩なる日本が斯くの如き矛盾の宣言をするを不可解のこととせられて居るのである。此れ皆我皇道精神則ち我國體の海外に何等知られて居ない結果から來るものと考へなければならぬ。此れ等の國際的事實を我々は見せつけられることに依つて、我國民は一層の勇氣と又研究心を鼓舞して我建國の歴史に依る國體と又二千六百年間の萬世一系の天皇統治のもとに培はれた此の尊い國體といふものを、海外諸國に宣揚して百川の海に朝するが如く、世界の有識者をして我國國體の精華

に向つて瞻仰の眼を向けしめなければならぬ。

此れ我輩が將來の帝國を擔なふ青年諸君に希望して止まない處である。

(一三・二)

中野友禮氏の講演に因みて

卒業式を目の前にして去る十九日に、我國化學工業界の大立者である中野友禮氏を迎へて講演を聞いたことは、卒業生諸君の出身後に於て處世の參考となることが多かつたやうと確信するのである。

中野氏が近頃著述した「これからの事業これからの經營」の中に書いてあるやうに、同氏は第一高等學校の中に設けられてあつた臨時教員養成所の出身で、從て中等學校の教師を志願したのであるが、故あつて果さず、京都大學に無給助手となつて化學教室に數年間の研究を積まれた。此が青年時代の經歷である。諸君に留意を願ひ度いことは、中野氏は化學工業の技術者として、又經營者として、奮闘努力せられるに當つては、必ずしも坦々として砥の如き路を歩んだのではなく、數々困難なる事に遭ひ、數々窮迫なる事柄に接して來たといふ事である。

然しながら如何なる事柄に遭つても始終樂觀をして、又如何に窮しても必ず通するといふ信念を抱いて猛進したので、自分は眞に運のよい實業界の寵兒の如くに考へて居つたといふことである。それは中野氏の風貌を見ても亦講演の言葉も聞いても直にさういふ感じを人に與へる。

死んで丁度三周忌に當る高橋是清翁の自傳を讀んで解るやうに、氏は少年時代より自分は實に幸運に恵まれて居る人間であるといふことを深く信じて居つた。尙又現在の實業界の大立物である鮎川義介氏の「物の見方考へ方」といふ書物の中にも凡そ何事でも行き詰つた時には必ず一つの活路がある。自然には決して行き詰るといふことはない。唯吾々が因襲や傳統にとらはれてゐるために活路を見出すことが出来ないといふことだけである。と氏の經驗を述べて居るのである。此は中野、高橋、鮎川三氏一脈相通じて居る大事な點であると思ふ。諸君は世に出て働く時にも此の心得を十分に會得して奮闘しなければならぬ。

中野氏と吾輩は偶然な事に於て因念がある。それは中野氏は京都大學の大幸勇吉先生の世話で近重眞澄先生の助手となつて研究したので、此は京都に於てのことであるが、吾輩も同じく大幸勇吉先生の世話で近重眞澄先生の助手となつて働いた。此は熊本に於てのことであり、「中野氏は教師を志して實業界に轉じ、吾輩は實業界に志して教育界に轉じた奇しき因念である。」と先般も

語り會つた事である。

又「物の見方考へ方」の中には次のやうなことがある。「物の工夫といふことは一種の禪である、禪道の窮する所に無礙の天地極樂世界がある。人は此境地に遊んで始めて創造の琴線に觸れるのである。死後に極樂淨土を求むるよりも現世に極樂淨土を見つけるのは人生の極致でなければならぬ。」それから又の他の所に「何でも教師について習つたといふだけでは底味が解らない、教師の言ひ附けた通りに出來たならそれでよいといふのは無味乾燥である。」と物を學び又研究する道程に於て鮎川氏自身の哲學を述べてをるのである。

自由啓發の吾々の學校に於て吾輩が説き來つた所の精神と相通するが如き感をなして欣快に堪へなかつた。

學校生活は吾校に於ては僅に三年である。諸君の生涯は長い、親しく聲容に接した中野氏の言論を味ひ鮎川氏の「物の見方考へ方」を參考として今後の長い一生を有益に又有効に國家に貢獻すべきであると考へる。

新入學生を歓迎す

今年是我々の學校に於て入學者二六〇人を募集した。之は航究工學科の獨立や機械工學科の増員等により募集人員が増したので、全國直轄専門學校中での最大の人數で従つて學校としては規模が大きくなつたものである。然して工業全盛の本年を表象して、いづれの工業専門學校へも志願者が殺到した事は勿論である。

就中我校は最も地の利を得て居り其の上教授の優秀なこと、設備の完備せる點等から全國より特に優秀なる青年が集り來る事は必然の勢である。その中から選拔されて入學を得たのであるから更に卓越した青年と考へられるので、我々は滿腔の熱意を以て衷心より諸君を歓迎するのである。

我々の學校は全國から學生の集つてくる所で、従つて神奈川縣とか、或は横濱市とか云ふ地方的色彩に乏しいといふ事は勿論である。

我國には各地に都會があり、それらが徳川三百年の間に一城下として特色ある文化を作り上げた遺風は今も相當に残つてゐる。

我校に於ては此等特色のある學生が三年間、同じ教室に於て、同じ宿舍に於て、又校友會の各部に於て相接觸して、そこに長を採り短を棄て渾然として一つの坵場で融和する、所謂人物養成の一大機會が興へられるのである。然して我々の學校は學問、見識、又人格に於て拔群の校長が一つの教育理想をもつて起つてゐる。その傘下で天下の俊秀が切磋琢磨、以て修養を積むに於ては三年の後には如何に立派な人物となられるかと今から期して待つべき觀がある。

在校の先輩諸君は此等多數の俊秀を迎へて、彼等の長所をよく觀破し、學校の内外に手をたづさへて、螢雪の功を積み、時勢に眼覺めて國家の前途に邁進するの準備を全うせん事を希望して止まないのである。

我國は今や空前の非常時に直面してゐる。然して學窓に居る青年達は、實に靜かなること林の如しである。果して今の青年に對して此の兵語を善意に解釋して宜しきや否や、我輩老人にも聊か疑念がある。迎へたる二百六十の俊材諸君中能く弘陵七百の健兒に指導的精神を發揮するものありや否や。

内原滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所

此の十三日に水戸驛より二つ三つ手前にある内原驛に下車して、滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所を見學した。此處は全國から十五歳より十九歳迄の青少年を募集したもので現在三千三百人程の多數が訓練をうけてゐる。そして二ヶ月後には一千名を一團として北滿地方に集團移民を行ひつゝあるのである。

此の内原の訓練所には三百餘りの所謂日輪兵舎がある、それは直徑六間の圓形の宿舍で屋根は圓錐形をなしてゐる。出入口は二つあつてその戸一ぱいに大きな日の丸が描かれてある。

此の日輪兵舎は長さ三間の繩を半徑として地面に圓形を描いて、その周圍の一定距離に柱を埋めて構築するのである。外側は松の木をわつた材木を横に無造作に打ち付けて壁が造られてゐる。屋根は藁もあるが多くは杉皮葺きである。

此の一戸の中に六十人もの者が起居する様になつてゐる。我輩は晝時になつて此の連中の晝飯の御馳走になつたが、半搗米と河海老じやがいもの惣菜と澤庵漬とであつた。

此の一棟は一つの小隊で、隊長以下夫々役員があり、その隊の多くは同縣から來たものによつ

て成立つ様になつてゐる。滿洲へ移民する時には小隊全體として移民して、矢張その隊長は滿洲へ行つても同様の關係で働く様になつてゐる。いづれも潑刺たる元氣、大陸に對する大なる希望と憧れに満ちてゐる様が見えて、國家前途の爲に頼もしい氣がされる。滿洲に於ける集團移民の一つであるハルピンに程近い香坊といふ所にある集團移民地を四月に我輩は見學して來た。其處に居る青年も同じく潑刺たる元氣と奉公の志にもえてゐるのを見て少なからず感激した。

然し滿蒙に於ける我移民は米を食ふ。香坊の移民の所でも米作を試みようとしてゐる。

寒い北滿の地で毎年満足に米の收穫を得ると云ふ事は頗る困難な事と思ふ。屢々兎作又は收穫皆無といふ様な事に出合はないとは限らぬ。然らば米を買つて食はなければならぬ。金錢を投じて常食である米を買ふて、農業の經營といふものは果して出来るや否やといふ事を、吾輩は疑はしく思ふのである。米でなくとも滿蒙の土地の常作物たる高粱、豆、粟、ひえ等を作るにしても相當の技能を要する事は勿論である。我輩自身も幾年かの間六七百坪の耕地をやつて種々の農産物を試作して見るのであるが、熟練な百姓になるといふ事は仲々の經驗を要する事である。それ故に之等の集團農民が、滿蒙の地に於て農民としての基礎を確立する事は容易の事ではなからうと思ふ、米食をするといふ事が、一大障害になりはしないかと感ぜられるのである。

そして我國の文化の程度から言つて見ると内地、朝鮮、滿洲、蒙古といふ順序になつてゐる。内地から農民としての滿洲移住は朝鮮を飛越えて行くものである。理想的の事を言へば滿洲人は蒙古へ送り、朝鮮人を滿洲に入れ、内地人が朝鮮に移るといふ事がその順序であらうと考へられる。

果して然らば内原の滿蒙開拓訓練所といふ様なものは朝鮮に於ても亦試みて可なるもので、之は重大なる我國策の一つであらうと思ふのであるが、未だ斯くの如き點について考慮して居る者のある事を聞かないのは頗る遺憾とする所である。

然しながら吾輩は毛頭内原の訓練所を輕視するのではない。偏へにその青少年の潑刺たる意氣に感激して歸つたのである。

(一三・八)

帝國大學總長と選舉制度

帝國大學の總長が所謂大學自治の内規によつて、從來は部内の選舉によつて定められつゝあつたに對して、現荒木文相から之を文部省の任命としてはどうかと云ふ問題を提示され、世間のや

かましい話題となり、當面の大學に於ては夏休で遠方に旅行出張してゐる者さへも呼び歸へしてその可否に就て討議を重ね、他の大學のことはよくは知らぬが、東京帝大に於ては新聞紙の報ずる所に依れば、各學部そろつて文相の提案に反對決議をした様に見える。

噂に依ると總長を選舉に依つて擁立するといふことは、山川男爵が總長であつた時に始まつたことであると云ふ。

選舉制度の出來たのは何時であるか我輩には覺えがないが、多分政黨政治の華やかなデモクラシイの聲の高かつた時であらうと思ふ。

今日の我々の直面して居る時勢とは餘程違ふと云はなければならぬ。若し山川男爵をして今日あらしめたならば、自分の總長時代に成立させた物であるから是非之を維持してゆかなければならないとは主張しないであらうと思ふ。男爵の令息である今の山川専門學務局長がこの案の提出側にあると云ふことは、或は乃父の志を繼いで居るとも、我輩には見られないことはない。

一體選舉と云ふものには賞讃すべき方面もあるが、又之に伴つて弊害と云ふものも非常にあると云ふことは何人も知つてゐる所である。大學の總長の選舉にどういふ弊害があるかは、門外漢の吾輩は何等知る所ではない。併し乍ら選舉と云ふものを採用する以上は一帝國大學の總長はそ

の大學の教授である人以外にはなり得ないのである。大學以外に政治家、海陸軍人、外交家、實業家、又その他の人々に大學の總長たり得る如何に立派な人があると雖も何人も總長にはなり得ないのである。大學の教授は専門の學科に於て深遠なる造詣ある學者を要する。深遠なる専門の學者は必ずしも偉大なる教育家であると云ふことは出来ない。大學の總長たるべき人は例へ専門の深遠なる造詣なくとも、一世の師表として仰がるゝ人がその地位に坐ることが絶対必要である。と、考へられる。今日の如く總長の人選は全然大學部内からでなければならぬといふ様な制度は、一つの獨善主義である。狭い量見である。

斯くの如き組織の中から専門の學者を輩出しても偉大なる國家の人材を養成せんとするには不適當であると我輩は考へざるを得ぬ。過去十數年に涉つて大學の學生教授助教授からして、如何なる人物が出て世の中に害毒を流したかと云ふことを考へ、何人が此の責任を負はなければならぬかと云ふことに考へ至るとき、選舉によつて僅か三年とか四年とかの任務にある、殊に事務的任務にある總長にその責任を歸すると云ふ様な考は至つて薄弱である。

この際大學の諸賢は大學は専門の學問を教授し考究する所であると同時に、國家統領の人物を養成する處であると云ふ廣い見地から、大悟一番文相の提案を考究せられんことを切望するもの

である。

(一三・九)

名譽の戦死者

毎年九月一日に震災追憶會を催した。初回の追憶會には百數人の者が震災の苦樂を共にしたのであつたが十五回の今年に至つては残る者が三十數人になつた。この一事を見ても歲月と共に學校の變遷が想像されるのである。あの大震災の爲に横濱の諸官廳、諸學校に於ける職員之死傷者は何れも免れなかつたのであつて、殊に裁判所の如きは裁判所長始め檢事正等幹部の全滅的慘狀を呈したのである。而るに不思議にも當時百六十幾名教職員と其家族を持つた本校には一人の死傷者もなかつた。實に幸運至極と云はざるを得ない。

今回支那事變に於て上海で苦戦した或る部隊の第一戦に立つて、最も猛烈な戦鬪を長い間無傷で残つた者が三人あつた。その三人の一人は吾校の出身者であつた事を聞いた時に、吾輩は震災の時を想ひ出し實に吾校は最も幸運な者であると感慨無量であつた。所が此の事變が段々進展するにつけて吾學校にも三人の名譽の戦死者を出した。それでも他校の出征者に較べて戦死は最も

少いのである。その一人は長岡出身の飯島君である、今二人は宇都宮在の吉田君（三回卒）横溝君である。

吾國民の國家に對する最大の責務は、所謂一旦緩急ある時は義勇公に奉ずる事である。特に今回の如き聖戰に参加し、天業を補翼するが如きに於ては、其義勇公に奉ずる最高點にあると云はなければならぬ。如何に聖戰にしても戰爭をする以上は、其所に死傷者の生ずることは當然であつて、又その死傷者の大なることは、一方にはその戰果を偉大にすることである。

兩君の戰死は吾々關係者として痛恨惜く能はざる所であるが、其の戰果を偉大にする犠牲となつたと云ふ事に於て國家に對する日本男子の最高の責務を果した者として兩君以て地下に冥すべく、吾々學校の關係者は校の名譽を發揚した事に於て感激と誠意を捧ぐるものである。兩君の葬儀は先般わづかの日敷を隔て、長岡と宇都宮在に於て行はれたのである。學校長は遠路を意とせず會葬せられたことに吾々一同は深く感謝して居る。

日露戰爭の後に吾伊藤公が日露の關係を是正せんがために、老齡を厭はず北滿ハルピン迄出て行て刺客の兇彈に斃れた當時の元老は、伊藤公の死處を得たと云ふことについて、深く之を羨んだと云ふことを聞いて居る。吾輩は幾度かハルピンの驛頭に伊藤公の斃れたと同じ場所に立つて、

感慨無量懦夫をして立たしむるものあるのを覺えた。名譽の戦死を遂げた兩君は痛恨の至りであるが、男子として實にその死處を得たと云ふことを感ぜずに居られない。

兩君は吾高工の經過して行く歴史に大なる記念標を建立したものであると思ふ。兩君の先輩同輩更に之より續かんとする青年は、永へにこの記念標を仰ぎ見て、吾々の國家に對する最高の責務に感激するだらうと思ふ。吾々の中、日常職務について煩悶する人、思想的に悩む人、境遇に不平なる人、出處進退に苦しむ人、總て邪道に沈溺せんとする人は宜しくこの三大義人を回想し仰ぎ見るべしと思ふ。

(一三・一〇)

シユネーダー博士

先般文部省應接室で大臣の會議の終るのを暫く待つて居つた所が、丁度その部屋に二人の若い人が入つて來た。

一人は宮城縣の地方課長で他の一人は屬官である。

文部省の秘書課と何か交渉があるらしいので、それを伺つて見ると、仙臺市の東北學院の設立

者であつた米國人シュネーダー博士が病氣重態に陥り、その爲に縣から叙勳の申請をして來たのであつた。

そこへ入つて來た前東京市長牛塚虎太郎氏は、「自分もシュネーダー博士の叙勳をして貰ひたい爲に大臣に面會に來たのである。自分が嘗て宮城縣知事をして居つた時分に、シュネーダー博士の人格に接し痛く關心を引き居つたものである云々。」と述べられた。

シュネーダー博士は二三年前に勳三等を授けられて居るので、未だ歲月も過たぬのに更に叙勳をすると云ふ事は殆んど困難な事であらう。

そこで牛塚氏は「博士の教育上の功績から云へば叙勳は困難であらうが、教育以外の二つの事績からして博士は叙勳に値するものである。その一つは事變に當り博士は丁度米國に歸國中で、彼のパネー號事件のあつた際に米國の輿論が痛く反日本的であつた、その時博士はルーズベルト大統領に面會して博士の抱擁してゐる眞の日本について懇々と辯じて、日本の立場を明らかにせられたと云ふ事は少からざる外交上の功績である。」

「もう一つは、博士が朝鮮の統治に於て功績のあつた事である。この朝鮮統治に關する功績と云ふものは殆んど世間に知られなかつた事である。それ故自分は之について辯明したのである。」

と述べた。間もなく大臣が部屋に歸られた、所で我輩自身も仙臺に五年間滞在して居た時、シュネーダー博士の東北學院に僅かではあつたが講師として教鞭をとつた縁故があるので二人で大臣に面會をした。牛塚氏が大臣に辯明した博士の朝鮮統治の功績と云ふものは次の様なものである。

齋藤大將は岩手の水澤の人で、水澤へ往復の度毎に舊藩主である仙臺侯と、又兼ての知人であるシュネーダー博士を訪問するために、態々仙臺市に立ち寄つたものであつた。大將が朝鮮總督になつた際も、例に依つて仙臺に立ち寄り博士に面會した。

齋藤大將が朝鮮總督になる前には朝鮮の統治と云ふものは米國の宣教師の言動に依り可成り妨害されて居つた。齋藤總督は此の事に考へ及んでシュネーダー博士に面會して朝鮮の統治上に於ける宣教師の關係に言及して、宣教師と朝鮮統治の關係を懇々と話され博士の援助を求めた。

兼てから齋藤總督の人格に敬服して居つた博士は、總督の話に同情して懇切なる紹介狀を最も有力な、當時京城に滞在して居つた宣教師に送つた。

總督は朝鮮に行くや直ちにその宣教師に會つて懇々と朝鮮統治の事を話されて宣教師の了解を求めた。之が朝鮮統治の上に非常に大きな功績を現したのである。

シュネーダー博士は最も謙讓な人であつたから、この功績と云ふものは何等世間には知られて

居らなかつたので、齋藤總督自身は牛塚氏に細々とその由來を話されたとの事である。それ故に博士の叙勳はさう云ふ方面からも考へるべきであると大臣に委細進言したのである。

我輩の特に之を語るのは、齋藤總督は實に圓滿な常識の所有者で又穩健な政治家であり、朝鮮統治の上に於てもさう云ふ點に注意せられたと云ふ事に關して、痛く敬服したからである。政治家でなくとも苟も事を爲すには放膽な裡に細心の用意が必要であることがしみじみと感ぜしめられる。

牛塚氏は大臣に此の事を進言する時に教育家としての博士の偉大なる事を賞讃して、斯くの如き大教育家は日本には他に見られない、日本の教育家と云ふものは食ふために教育し、錢を儲けるために教育し、甚だしきに至つては儲けた金で政治運動をする等散々にこき下したのであつた。

翌日、日本俱樂部で牛塚氏に面會した際に、「我輩を目の前に置いてひどく日本の教育家をこき下したが、日本と雖もそんな教育家ばかりぢやなからう、餘りひどいぢやないか。」と難詰して見たら、「いや、餘りシュネーダー博士を賞讃する爲につい極端に言つたのである。」と辯明して居つた。

支那の建設

事の成行きといふものは意外の所まで發展して行くものである。蘆溝橋事件が起つた當時に於ては、これを現地解決を以て收拾しようとして居つたが、だん／＼に擴大されて北支事變となり、更に一ヶ月の後には上海に飛火して、又擴大せられて遂に支那事變となり、全く始め豫想せられたものとは違ふものになつてしまつた。

然しよく其の事件を考へて見れば、北支事件、支那事變と變化する事も動かすべからざる理由が其所にあつたのである。而して其の當時から識者の間にはこれを不擴大に處理する事は不可能であると云ふ考を持つて居つた事も、一般としては其所迄の見透しがつかかなかつたと云ふ事も事實である。尙諺に「隴を得て蜀を望む」といふ事がある。之は悪くも、良くも解釋せられる不思議な言葉である。上海陥落の時と、首都南京陥落の時と、徐州の大會戦後、又今日の如く廣東及び武漢三鎮が陥落した時と其の結末について矢張り同じ考を我が日本全體の人が持つて居るや否や頗る疑問とする所である。

政府聲明に依ると、我帝國は支那四億の民衆を敵としこれを亡ぼすといふのではない。その反對に支那四億の民衆と手を握り、親善の實を擧げ、東洋平和の基礎を確立する事を聖戰の目的であるとして居るのである。然し之は抽象的の事であつて、其の所説には何人も異論は無からうと思ふが、如何にして戦後を收拾し其の聲明の實を擧げるかと云ふ事は非常に至難の事で當局者は既に名案を持つて邁進して居るかも知れないが、我々には其の見當が判らないのである。けれども戦局の進展に従つて、隴を得て蜀を望む氣構へが自然に國民の間に湧き出づるといふ事はあり得べき事であらうと我輩は想像する。

パールバック夫人は支那事變と日支國民性といふ論文をもつてその中に「支那人は日本が帝國主義であり、又侵略者であるといふ理由を以て抗日の原因として居るけれども、これは筋道の立たない漠然たるもので老慮する價值のないものである。唯支那人は日本人を嫌つてゐる。傍に居るのも嫌ひであると云ふ考を根強く持つて居る。それが又長い間支那の子供等は日本人を猿と呼び黒ん坊の小人と蔑んで來た。さうして子供等は日本人は支那人の敵なりと教育されて來たのである。支那に居留する日本人は此の排日侮日に惱まされた。」と論じて居る。こゝにいふ兩國國民の間を如何にして親善にし、手を握る事が出来るや、即ち政府の聲明通りに行き得るや否やと云ふ

事が頗る疑問である。パツク夫人は又他の所に於て「日本人全體が支那へ移動して行つても、支那人は僅かの時間にこれを忘れてしまふだらう。」といふ事を述べて居る。さすがに長く支那に居住して支那を研究しただけに、米國人としては感心な觀察をして居る。兼て我輩の支那に對する考と一脈相通する所がある。

今年の五月に北京に師範大學の宋學長と會談した時に、宋學長は日本人が支那人に對して優越感を持つて居る間は、日支親善を望む事は出來ないと私に斷言して居る。當時我輩は宋學長に對してそれに答辯した事は、既に諸君に詳細講演した所である。とに角、日本の武力は支那全土を壓迫してこれを亡ぼして居るのである。政府の聲明の如くにこれを建設して行くと云ふ事に就ては、我々國民全體が非常なる決心と努力とを以て、支那に當つて行かなければならない。此の根柢は日本の歴史に輝く所の日本精神といふものを以てし、支那の歴史を一貫する支那の民族性といふものに立脚して平和の終局建設に當らなければならぬ。若し西洋思想を驅つて之に當らんとするに於ては、東洋平和の確保の根柢基礎と云ふものを築きあげる事は望み得ない。歐洲は西洋文化を以てし、新大陸の南米は合衆國の民主主義を以てし、亞細亞は東洋文化を以てし、世界を三分して宜しく平和を保つべきである。述べて詳なる能はざるを憾とする。(一三三・一一)

我國工業飛躍の片鱗

大正三年七月に歐洲大戰が勃發して、その八月には歐洲全面が濛々たる戰塵に襲はれる様になつた。東亞に在る吾國も直ちに其の影響を受けて、輸出入即ち物資資源について色々な混亂が始つた。時の農商務省の主管で世界大戰中の各種の調査機關ができたが、化學工業調査會がそのトップを切つて確かその九月に成立した。當時の化學分び化學工業の大家を網羅してでき上つたものである。當時吾輩も大家ではないがある關係を以て此の調査會の一委員となつた。

化學の部類ではドイツから染料の輸入が杜絶した事に迷惑を感じた。染料の中でもインディゴに最も困難を感じた。爲に當時はインディゴで染めた古い布片からしてインディゴを再生する工業迄できたのである。そのインディゴが如何にして日本で合成するかといふことについて化學工業調査會は、一方ならぬ苦心をしたものであるが名案が得られなかつた。今日の大阪に於ける日本染料會社又理化學研究所といふ様なものは、この化學工業調査會から生れ出たものである。

過般吾輩は九州に旅行して大牟田で一日を費した。此處では藏前高工應用化學の出身者四名、横濱高工出身者二十九名の歡迎を受け大牟田に於ける三井の施設を視察したものであるが、驚いたのは三井染料である。二十幾年前に化學工業調査會が手の着け様のなかつたイスデイゴが年額一千噸を産出してゐる。然してその主任技師は藏前の應化出身の西芳藏君である。斯の三井染料は嘗て視察したことがあるが、今日その規模を見ると殆んど隔世の感がする。それだけ我日本帝國の工業も盛大になつてゐることを考へて驚嘆する。

西芳藏君は吾輩が藏前の教授であつた時分に吾輩について有機化學を習つた。その時分の應化の生徒としては、インデイゴの合成法と云ふ様なものは實習しなかつた。何々からスタートしてインデイゴに至るといふ簡単な道筋とインデイゴの構造式位を擧げて授けたに過ぎない。之だけしか學校で習はなかつた西君は、その當時日本の技術界に於て手のつけ様のなかつたインデイゴを一千噸も製造する主任になつた。

之を以て見ても西君が如何に學校出身後、自ら努めて研究に精進したかといふ事が分ると同時に學校教育と云ふものは總ての事を學生に注入して置かなければ、教授の本義が達せられんといふ考が誤つてゐると云ふ事が知られるのである。又他の藏前の三人の方々も皆夫々の部分に於て

獨立した場所を建設し、又之を堪能に經營して行く知識と經驗を獲得してゐると云ふ事を、吾輩は識り工業日本に多數の俊髦の存在を知つて愉快に堪へなかつた。吾々の出身者は何れも皆五六十年來の新進の人だが、尙こゝ數年経てば藏前の先輩の域に達することであらうと思つて之亦愉快に堪へない。

今や我帝國がアジヤ大陸に大なる工業の場面を見出したので非常な多數の獨立經營の人材が要せられ、その任に當る人が眼前に多數ある様に見えて、非常な希望を抱いて吾輩は大牟田を去つた。

(一三・一二)

歳末に際し一大覺醒を期待す

昭和十三年も將に暮れんとして支那事變も既に一年有半を経過した。日清日露の兩戰役に比べても今回は一段と長期の戰爭となつたのである。此の間戰へば必ず勝ち攻むれば必ず奪り支那の主要都市は悉く皇軍の占領する所となつた。この破竹の勢で戰爭が次第に大詰に迫らんとする勢ひを見て、外國殊に英國があわて出して米國を誘ひ、露骨に國民政府を援助する態度に出たかの

様に見える。

イギリスの駐支カー大使が、支那の奥地に幾十日もの間困難なる旅行をしたのは國民政府の診察に行つたと云ふ様な噂があつたが、國民政府の診察はあのみつともない困難な旅行をしなくても香港からでも出来る。名醫ならばロンドンからでも聽診器がとどく筈である。

大使の使命は全く蔣介石に食鹽注射をして、成可く長期抵抗に依り我帝國を弱化せしむると云ふ點にあつた事は疑もない事である。即ちカー大使が奥地からの報告により英米が一致協力して國民政府に金を貸して、戦争を持続せしむるのに一心に努力する様な形勢になつた。吾國は又時局の進展に従つて支那の要地を抑へ、揚子江の如きも容易に開放せず彼等の利權を恣にさせない嚴然たる態度が明白となるに従つて英米が益々いらだつて來た様子が明らかに見えるのである。

英吉利が一度支那に於て失脚をするならば其の結果と云ふものは、容易ならざるものがある。云ふ事は想像するに難からぬ事である。英吉利が大なる犠牲を拂つても壤太利の問題にも、チエツコの問題にも、歐洲に於ては極力争ふ事が出來ずしてその國威の失落を極東に於て専ら維持せんと努める、その眞意は我々に容易く了解される所である。吾國今日の實狀としては一年前の當時に較べて大なる相違がある。宇垣外相の退却によつて全面的に我國は革新的の態度を採り、現

狀維持の退嬰主義を完全に脱却したのである。英米にして眞に東亞の狀勢を正當に理解しない限り、我帝國の乗り出した船は如何なる難航を續けても彼岸に到着しなければ止まない現狀に押し移つたのである。

一方又英米の態度につけ込んで、ソヴィエツトロシアが例年の漁業問題に關して、飽く迄不條理な見解を以て我が既得の條約を蹂躪せんとしてゐる。かくの如き國際の狀勢に立到ると云ふ事は我々が當初からの覺悟である。今日は何等批判の時代ではない。總ての事が政府の指し示す所に従つて國民全體が、一丸となつて進むべき非常時に際會したのである。前途の光明は明らかである。斯の非常時局に際しても、之を世界大戰の當時歐洲諸國が直面した食糧その他の問題に於て實に我々は恵まれた境遇にある。銃後の吾々はその當時の歐洲諸國の大苦難を回想するならば、今日に於ける狀況が幾ら困難なるとも、いさゝかの不平不満があつてはならない。

東亞の天地は日支の戰爭ではなく、日英の角逐と深く心頭に銘して百餘年來暗雲低迷せる東亞を明朗なる東亞となさんことを我々大和民族の一大聖業と考へて勇往邁進しなければならぬ。年將に暮れんとするに際し弘陵健兒の一大覺醒を更に期待して止まない所である。

士と兵隊

何れの時代にでも澤山な著書が印刷されて、汗牛充棟の思を爲さしめるものである。又其の中には所謂洛陽の紙價を高かゝらしめるものも相當にあるが、然し世道人心を萬古の下に維持するに足ると言ふものは決して澤山にある可きものではない。頼山陽が書いた「日本外史」とか「日本政記」と言ふ様な書物は幕末の志士に大きな感激を興へて、一世を風靡すると言ふ様な力を發揮したのである。

外國に於ける事情は淺學の我輩には明かでないが只一つ獨逸に於けるゴスタブ、フライタハの著「ゾル、オント、ハーベン」と言ふ小説がある。時勢に感激して奮起した著者は此名著を以て當時の萎縮した十九世紀中頃の獨逸國民の志氣を鼓舞せしめた。我輩の知つて居る獨逸の小學校の教師で此の小説を六十回も読み返したと云ふ様なものがあつた。

さういふ事が平素我輩の頭の中を往來しつゝあつた際に、火野葦平氏の「麥と兵隊」を読んだ。戦争文學として目下此の火野君の著書が洛陽の紙價を高からしめてゐる時なので、多少の注意を

以て「麥と兵隊」を讀んで見たのであるが、特別に大いなる感興はなかつた。「土と兵隊」が其の後に出了たが、大概前の「麥と兵隊」と大同小異であらうと考へて、別に暇も無かつたから讀まなかつた。處が數日來風邪で引き籠り中、手近にあつた「土と兵隊」を取つて讀んで見た所が更に異つた感興を以て此れを讀了し、尙其の末文の處に至つて一段の感興を覺えた。

……私は久しぶりでしみじみと兵隊の日に焦けた顔を眺め、私は何かすばらしい發見をしたやうに愕然とするものがあつた。それは先づ何よりも私が今日まで、このやうによくやつて來たといふことである。我々は出征した當初とは全く違つてしまつた。兵隊は見違へるばかり遅しく立派になつた。我々の間には限らない勇氣と信賴とが生れた。嘗て私とその思惟の大きさに驚き、新しい生活の方法を自覺したことは、何ものよりも簡單なことであることが明確になつた。……………そのやうにして我々兵隊は次第に強く、遅しく、祖國を守る道を進むことが出來ると知つた。最も簡單にして單純なるものが最も高いものへ直ちに通じてゐる。そのやうにして我々が前進を始め、戰場に現れ、彈丸に墮れる時、自ら、口をついて出るものは、大日本帝國萬歳の言葉であると知つた。……………

著者が父母の國を出帆して杭州灣に敵前上陸をして幾多の艱苦を嘗め死線を越えて奮闘し小閑

を得て過去を追想した感慨である。著者は一兵卒として戦局の大勢も知らなければ、又推移も知らず、唯上官の命に夜となく晝となく、山に又野に奮闘、力戦したのみであつた。而して其自ら驚異とする發見は何ものよりも簡單と單純のものであつた。難しい哲學でもなければ又高尚なイデオロギーでもなかつた。

由來我大和民族は決して哲學やイデオロギーに依つて進展發達した國家でないことは、我國史の教へる處である。恐らくは著者火野葦平氏の心境は戰場を驅逐した我日本人の均しく到達する極致のものであらう。著者の此心境の説明はまだ充分ではない。我輩は猶更解説が出来ない。しかし充分に其心境と意義は理解し得るのである。銃を肩にするとせざると大和民族の骨髓は實に茲に存すと感銘する。外國人の達し得る極致とは異なつて居る。斯の様に著者を理解して著者の兵隊の他の部を讀むと更に一層の感銘を催す。我輩は著者に深く感謝の意を表すると共に我青年諸君が此の貴重なる戦争文學を一層愛讀せられんことを熱望する。

(一四・一)

櫻井 錠 二 先生

先月二十八日、櫻井錠二先生が突然亡くなられた報知に尠からず驚いた。先生は八十二歳の高

齡にも拘らず最近迄墨鏢として公私の事柄に奔走せられて居たからである。私は明治三十年から三十三年に至る三年間先生の薫陶を受けた。又先生の御三男春雄君は我校電化第一回出身者であるので、先生とは尠からぬ因縁があるのである。

先生は金澤藩の出身で明治九年に十九歳で化學研究の爲五年間英國に留學を命ぜられ、倫敦の有名な化學者のウイリアムソンの世話になつたのである。そして二十四歳の時歸朝して東大に教鞭を採られ、大正八年に停年で退職せられるまで三十七年間直接に大學の化學教室で育英の任に當られた。それから貴族院議員、樞密顧問官、帝國學士院會長等の榮職に歴任して今日に到つたのである。先生は我國に於ける自然科學の長老であつて、従つて本邦を代表して學術の國際會議に十回近く列席され、世界各國に先生の名聲は知れ亘り英獨は無論、ソ聯、ポーランド等の學術の會に名譽會員其の他の名義を列せられ居るのである。

確か明治二十八年であつたと思ふ。私は中等學校の教師の資格を得る爲に化學の檢定試験を受けた。そして筆答試験が終り次の試験に移る時大學の廊下で偶然先生に出會した。先生先は「お前は受験生の鈴木ではないか」と訊ね「一寸來い」と言つて先生の室へ連れて行かれた。その時の試験問題の第何問かにイオンに關するものが出て居た。それで先生が私に「君は何處で又どう

してあのイオン説を修得したか。まだイオン説といふものは我國には行はれて居らぬ。然るに君は要領よく解答を爲して居るので其の由來を聞いたのである。」と問はれた。依つて私はオストワルドの著書により識つたことを答へた。

先生は即座に私に向いて「都合がつくならば暫く中等學校の教師を志望するを止め理科大學の専科生として入學せよ。無試験で許可する。」とかう言はれたのである。私は非常に感謝し其處を退去し「専科に入らんよりは寧ろ本科をいつそ志望せん。」と思ひ一年後に其の希望を達したのである。此が私に幸運であつたか否やは別問題であるが、運命といふものは不思議なものであると感ぜざるを得ない。而して先生に永久の感謝を捧げる處である。

私が先生を弔問した時には未だ入棺せられず生けるが如く臥して居られた。斯くの如き場合に殆んど涙の覺えない私が、先生の死顔に直面すると自然に涙の禁ずる能はざるものがあつた。

大陸會に就て

我が横濱高工は帝國第一の開港場に設立されたのであるから、工業の海外發展といふ事に就ては最も留意しなければならないと考へ、先づ第一に學校の徽章を波に高工を象つたものとした。之は懸賞募集に依つて定めたので神奈川工業の出身で當時の機械科の學生の考案になつたもので、その人の氏名を殘念乍ら忘れた。

開校以來屢々海外發展に就ても色々な具體的の行動もしたのである。その一として當時助教であつた堀江不器雄君を蘭領印度又海峽植民地等に在外研究生として駐在せしめた。

之はおそらく文部省としても最初のものであつて同時に最後のものであつたかも知れない。然し自治自覺を以て立つて居る我校であるから、海外發展に對しての學生の動向を待つより他に學校當局としては何等か具體的の行動を學生に強要するといふ事はなかつた。處が大正十四年の夏、外務省の事業として各大學々生より一名、専門學校より數名、全部で慥か十七名を支那滿洲に視察派遣するに當り、その團長として我輩が依囑された。歸國後の視察談が動機となつたのであら

うが當時の學生であつた齋藤興次、比賀樽吉等の人々が相計つて海外發展の爲設けたのが即ち大陸會である。

大陸會の設立に當つて吾輩がその案を持つて後藤新平伯を訪問して同伯から賛同を得た。よつてその會長を後藤伯に依頼したら後藤伯は「會長は是非お前がやるべきである。」と言つて受けてくれなかつた。それで吾輩は然らば會長は自分で致しますが、伯爵には會員になつてお差支がないかと尋ねた所結構であるといふので、大陸會の一番始の會員が後藤新平伯であつた。後藤伯は大陸會の發會式に我高工に來られて會の爲に大いに氣焔を擧げて光彩をそへられ、そして會の熱心な世話人であつた比賀君が學校を卒業すると、後藤伯の家に住込んで伯の鞆持ちになつたといふ様な因縁まで出來たのであつた。

その後大陸會は相當の活動をしたものである。その當時は高工と實習學校及び工業專修學校も三校一體を唱へて緊密な關係があつた爲に三校の生徒は皆大陸會々員であつた。但し會費を要せざる會員でその他市中の有志にも勧誘して大陸會々員になつて貰つて居り、學校の職員及び市内の會員からは會費を徴收して居つた。當時横濱市の著名なる政客にして守屋町といふ名まで出來てをる守屋此助氏は、大陸會といふ名稱が自分に非常に氣に入つたと言つて屢々其の會合に相當

の老人であり乍ら出席せられたものであつた。

大陸會の設立以來既に十五年を經過して居る。我々の學校が十五年前に大陸に着眼をしたといふ事は決して偶然ではない。我が帝國の大陸經營の歴史を檢討してみれば神武天皇以前の神代に遡るのであるが、其等の事は差置いて我々の注意を最も引くのは、小村侯爵の外交に直接の因縁を持つものである。

何人といへども一度滿洲及び支那を實地に視察した者は小村侯の國策に共鳴せざるを得ない。

我大陸會もその直接の示唆を受けたものは小村侯であると言はなければならない。

わが大陸會は其信條として亞細亞大陸と我帝國との間には海のある事を忘れ、帝國は亞細亞大陸の東海岸を樺太の果から臺灣澎湖島に到る迄、大陸と長い陸続きを構成してゐると考へたものである。

滿洲支那兩事變以來、我大陸會の理想が現實として現はれつゝあるといふ事は我々大陸會同人の限りなき爽快とする處である。然るにこの大陸會自體が現在に於ては、あつて無きかの如き状態にあるのは吾輩の大いに遺憾とした處で、近頃職員學生間に於て此の大陸會に活を入れて大いに振興さうといふ氣運が澎湃として起りつゝあるのをみて歡喜感激に堪へない。(一四・五)

牧野富太郎博士

本日の夕刊に植物學者の牧野富太郎博士が帝國大學四十幾年の長い間の講師を辭任したと云ふ報道が載せられてあつた。博士は七十八歳であつたと云ふ事であるから辭任せられた事は當然の事の様にも思へる。

然しその記事を見てみると多少意に満たぬ所があつて辭表を叩きつけた様子が窺はれる。吾輩を驚かすものは、老いて益々矍鑠たる事と講師の俸給が七拾圓であつたと云ふ事である。同時に又博士の今なほ健在し學究に餘念なき消息を知り、一種言ふに云はれぬ回舊の感に打たれるのである。

大正三年八月吾輩は關西に旅行して居り東京に歸る途中、洪水の爲に東海道線が不通になつた。それで名古屋から中央線を通つて歸つた。その車中で吾輩と席を同じくした人に風貌の甚た上らざる相當年配の人が居つた。網棚の上のその人の携帶品中に植物採集の胴亂があるのを見て何れその筋の人であらうと想像したのである。如何にもその質素ないでたち、又二三話をかはす

間素直な學究的な様子が窺はれるので、直接にはその人を知らないのではあるけれども、牧野富太郎博士であらうと直観したので之を聞き質すと果してその人であつた。そこで一層感興を覺えて名古屋を出て新宿驛に到着するまで、殆んど絶間なく歡談をつゞけて來たのであつた。その話の中で吾輩に最も感興を催さしめたものは、日本に於ける有用植物の分布して居る状態であつた。

時恰も歐洲戰爭が勃發してその火の手が全世界を席捲せんとしつゝある時であつた。

千駄ヶ谷の寓宅に歸ると藏前高工の手島校長より、歸宅したら早速來れと再三の催促が待つて居つたので、取るものも取り敢へず手島校長に面會に行つた。校長は歐洲戰爭の我が帝國に及ぼすべき工業上の影響について、教授間の意見を聽取して居たので吾輩にもその問題がもちかけられた。

吾輩の頭には牧野博士の話が、非常に感動を與へて居つた最中であつたから、手島校長に向つてこの際動物・植物・礦物等に關し有力な専門學者を動員して、化學工業原料調査會といふものを組織する必要を説明した。手島校長は非常に之に共鳴して、書面を以て差出せと云ふので早速之を認めて校長のもとに出した。校長は之を擁して當局に訴へたのであつた。

之が世界戰爭に於ける各種の調査會の最初のものであつて原料調査會といふ代りに化學工業調

査會として當時の農商務省の所轄として活動したのであつた。

なほ亦我校の一覽表を見ると、應用化學の學科の中に植物學が入つてゐる。恐らく全國高工應用化學科中に於ける一例外であらうと思はれる。之れまたその思ひ付きは博士の車中に於ける談話を思ひ起した事に基因するもので、之を學科に入ると同時にその講師として招聘する事に快諾を得た。所で博士は講師として約束をしたまゝで一回も學校に顔出しをしなかつた。規則面にのみ植物學の課程が記録せられるのみに止まつたのである、ある年月の間小山教授が自分の趣味から之を擔當せられて居つたのである。恐らく今日は學科目があるのみで講義されて居ないことと思ふ。

先生の長い植物學界に於ける研究と貢獻及天才的存在は獨り我が國のみならず世界的に有名である。博士の辭任を聞いて滿腔の敬意を表する次第である。

(一四・六)

財政と幣制

今回の支那事變勃發以來今年の軍事豫算は百億に垂々とし、又政府の通常豫算も四〇億に垂々

として居る。此れを七、八年前の状況に較べて見ると殆んど想像し難き變化である。濱口内閣が緊縮政策を採つて金の解禁を行はんとした際に、我が帝國の公債は確か六〇億圓位であつた。時の井上藏相は非募債主義を標榜して、この上一億の公債の増加も帝國の財政を破壊するものとして大聲叱咤したものである。

今日この戦時の豫算は殆んど公債に依つてゐる。そしてこの困難な戦時の財政を兎に角無難に切抜けて居る。當時の政治家が今日を見て如何に感ずるであらうか。

今事變勃發の直前に支那に於けるユダヤ財閥が英京ロンドンに於て會議を開き、その結果として有名なリースロースを支那に送り支那の幣制改革を行はしめた。當時リースロースは我帝國にも來たのであつたが、何等歡迎もせられなかつた。リースロース自身が支那の幣制改革は日本の支持を受けなければ圓滿に此を達成せしむる事は困難であると云つた。それにも拘らず我國の政治家は此を冷眼視して省みなかつた。此は如何なる根底があつたか、財政に縁の遠い我輩には不明であるが當時工業懇話會に聘せられて講演をした人達の批評を我輩の記憶の儘に辿つて見れば幣制改革はその目的を達する事は困難で、崩壊するのは單に時日の問題であると云ふ様な結論であつた様である。

然るにこの幣制改革と言ふものは、立派に成就した。國民政府が南京・漢口・重慶と轉々として全くの地方政權に迄落ちて行つても尙餘脈を保つて屢々針小棒大なデマ宣傳を發し得るのは此の幣制の恩澤を受けて居る事もその一つであらうと考へられる。イギリスが蔣政權援助の必要なる事も此の法幣堅持にその一つの原因があると考へられるのである。恐らくは當時の日本に於ける批評家が、幣制改革は効を奏しないと見たのは舊來の支那を見てその當時の變化した支那を即ち歐米依存は何の程度に迄浸潤してをつたかと思ふ事を、見逃した結果であらうと思はれる。

こう云ふ事柄を過ぎ去つたその跡方を回顧して見ると偉いとか賢いとか云ふ人々の智慧と云ふものが、存外淺はかなものであると云ふ事を感じざるを得ない。

昨夜一七一回工業懇話會に伊藤正徳氏は、ドイツがベルサイユ條約に依るライオンランドの非武装地帯の約束を破つて、ライオンランドに兵を進めんとする時に、ドイツの參謀本部は、このベルサイユ條約を破棄するに於てはフランスは必ず武力を以て立つ、ドイツの武力は此に應ずる事は困難であるとして反對した。それにも拘らずドイツがこの條約を破つて一兵も岨らずライオンランドを武装してドイツの今日の勢の根底を作つたのは、此れ唯ヒツトラアの「感」に依つたものであると言はれてゐる。

何處迄も理屈を押し智慧を絞り所謂萬遺漏無きを期すると云ふ事は大切な事に違ないが、又此の「感」と云ふもの殊に「國民の感」と云ふものは何う云ふものであるかと云ふ事に氣附くと云ふ事は、政治を運轉してゆく人に大切な事柄であると思はれる。

(一四・六・一五)

興 亞 計 畫

近頃大谷光瑞師は「興亞計畫」といふ書物を出版したので早速一讀した。

大谷師が夙に西本願寺の榮譽ある門跡の地位を弊履の如く捨て去り、我帝國發展の先驅となつて南洋、支那終にはトルコに迄も其の事業計畫の手を伸ばした事は人のよく知る所である。殊に支那方面に就ては四十幾年間の去來で、其の居宅を上海の郊外に持つて居られた程である。

「興亞計畫」を一讀すると如何にも師らしい支那に對する雄圖長策が羅列されて居るので、少なからず感興を吾輩に與へた。先づ大谷師は支那を統治するに於て、餘りに國土廣大にして言語、風俗の相違も大なるを以て、支那を七つの區域に分けて聯邦政府を作らうとするのである。即ち東自治邦、南自治邦、西自治邦、北自治邦、蒙疆自治邦、回疆自治邦、藏疆自治邦これである。

次に大谷師の検討した事は此の自治邦の首都である。首都の資格として第一全國の中心たるべきこと、第二氣候温和なる事、第三交通の便利なる事、第四地勢平坦にして且つ丘陵の存在する事、第五水の豊富なる事、第六土地豊饒にして農産物の多い事、第七動力を安く得る事、第八風光明媚なる事、第九海に近き事、第十人口稠密なる事。

此の十箇條の要素を列舉し、此を最高度に満たす所のものを首都とし、北京、南京、漢口、濟南、徐州、開封、上海、蘇州、蕪湖等の地を舉げこれに一々點數をつけて、其の優劣を比較研究してゐる。其結果浙江省の長興を以て最適所として指摘した。長興は杭州の東北に當る一小都市で太湖の近くに所在する。而して此の地を以て九十八點と云ふ滿點に近き點數を舉げて、推獎して居る。唯海に多少遠い點で缺點が有るが此缺點を排除する爲に港を新に建設するのである。その港の地位は杭州灣の海鹽から東の方一帯の海岸に築港して、其處から長興に大運河を作るのである。

首都を建設する經費が二億圓、築港又二億圓、大運河は一億圓で、次に太湖から揚子江を連絡する所の幾條かの運河を建設する。その經費が同じく一億圓で、合計六億圓を以て先づ新首都と其の内容を充實する運河等の建設に充つるといふ計畫である。猶其外に中支方面にては錢塘江の

水利、淮河の水利に就て委細の計畫を樹てゝゐる。運河は其の幅、水深、又揚子江からの逆流を防ぐ閘門を設ける等の事までにも論及して居る。

支那では太古の昔より水を治める事が何よりも大問題で、水を治め得る者は帝王と成り得るともいふ大事業である。洪水を防ぎ止める事に依つて、同時に又反對に支那民衆を苦しめる旱魃をもなくする水利事業で古來英邁なる帝王は何時でも土木工事に其の精力を傾け盡したものである。光瑞師の此の計畫が成就するの曉には、支那の面目が一新される事が思はれる。斯くの如き大規模の計畫を大陸に策する偉才が我國に存在することは、何とも云へぬ心強さを感じざるを得ない。而して新首都の長興を指摘したのは孫逸仙その人であつたといふ事も、本書に所録されて居る。支那にも矢張り相當の人が有つたといふべきである。

大谷師の此興亞大計畫に就ては、吾輩はさすがに偉大な計畫と敬服する外はないのであるが聯邦自治といふ政體を採るといふ、其根底に就ては吾輩は聊か疑念なき能はずである。大谷師は支那の古典、支那の歴史に最も精通した人である。此人にして聯邦自治の政體を主張するゝに於ては必ずや其根據とせらるゝ所があるに相違ない。然し本書に於ては其れが十分に指示せられてはなない。吾輩は淺學非才にして支那の歴史も古典も殆んど知らないが、しかし支那の事に關しては

大なる關心を持つて居る。

僅かなる支那に關する研究から推して平素考へて居るが其歴史及び民族性からして支那には君主體が最も適してゐる様である。滿洲事變後に滿洲は君主國として成立した。支那事變後は矢張り支那も君主國として興亞の大旗幟を宇内に掲揚すべきものと考へる。何人が君主の地位にくかは事變終結後に維新臨時政府等の要人が我帝國と篤と相談して、最も適當とする者を選ぶべきであると考へる。

支那に於ける此等要人の智謀者も五千年來の歴史と其の民族性といふものに直面して虚心坦懐眞に支那の更生を考へるならば歸着する所は君主政治に到るだらうと確信する。然らざれば國民政府は歐米依存の繼續に過ぎず、前門の虎を後門の狼に代へたるのみで、東亞の新秩序何を以て望み得んやである。此政體問題に就き光瑞師の訓を乞ひ得ざるは残念である。(一四・七)

勤 勞 奉 仕

今回の支那事變は日清、日露の役に比して戦争そのものは比較にならぬ程の大戦争である。然

るに經驗から考へて見ると、この事變の始に於ける國民全體の緊張味と云ふものは日清、日露の兩戰役に比し物足らぬ感じがせられた。所が事變が段々に進展してゆくにつけて、これは支那と戦つて居るのみでなく、實は英米を相手にして戦ひ、同時にロシアとも戦つて居るのであると云ふ認識が深まるに従つて國民の緊張も又次第に強化しつゝあることが見える様な感じがする。事變は既に滿二周年を経過したが、長びいては困ると云ふ様なグヂは見えない。物資總動員、精神總動員等政府の施設に、些かも不平を唱へる者もなく、敢然としてその達成に邁進し整然として學國一致の實をあげて居るのは、いかにも心強く感ぜられる。

我々教育の方に於てもこの態勢によく順應して昨年の諸學校に於ける勤勞奉仕よりも、今年は一層緊張してその精神を貫徹しつゝある事は、何とも申し難い快心事であると考へられる。

我校に於ては全校を擧げて今は勤勞奉仕の眞最中である。又北支に於ける勤勞奉仕の爲に二十名の多數が應募して本日出立したが、其他大陸にこの夏季心身鍛鍊に、又大陸發展の準備の爲に赴かんとする者を多數見受ける。又南洋委任統治群島へ三人の有志が出發した。

この國家最大の非常時なるものが斯う云ふ状態を齎したと云ふ事には相違ないが、斯くの如きは未だ曾て見ざる勇ましき現象である。今日の學生諸君、又教育の現職にある教師諸君に對して

我輩は美望に耐へざる次第で、實に國家奉公の最も仕甲斐のある千歳の一遇と存する。

抑も教育の第一義は自覺であり、訓練は第二義的のものであると、我輩は平素から堅く信じてゐる。今日行はれてゐる勤勞奉仕の如きは云はゞ訓練の一つである。この訓練たるや自覺より來りたるものならば、その意義實に偉大なるを考へて何とも云へぬ感激に充たされる。然し自覺のない訓練であるならば如何に勤勞奉仕が無事に修了し完成してもそれは大した價值のないものである。眞に自覺から起つた勤勞奉仕であるならば諸君は一日二日或は一週間に亘る勤勞奉仕を以て、事終れりとは考へないであらう。課せられたる勤勞奉仕以外に諸君の腦中に何物かを殘して居なければならぬ。されば今後諸君は學校に於て又寄宿舎、下宿或は故郷に於て其の勤勞奉仕を何等かの形に於て繼續し得るものと思ふ。

若しそれ等の場所に於て何等の勤勞奉仕の精神が實現しない様なことであるならば、今日の諸君の勤勞奉仕は唯命ぜられた儘の事を行つたと云ふのみであつて、猿や犬が命のまゝに藝をしたのと何等選ぶ所があるまい。炎天の下汗になつて勤勞奉仕をしつゝ諸君が國家社會に對する奉仕の貴重なる自覺を獲得すると云ふ事にその價値は存すると思ふ。此價值ある奉仕精神はやがて來るべき我大帝國の發展に一層の大光明を添へ得るものと考へる。

日英東京會談

支那事變も段々と進展して昨今は日英東京會談といふ大問題にまで到達した。この成行は事變の結末に大なる影響を及ぼす事は勿論であつて今や世界の注目を惹起して居る。事變の始め頃から吾々は支那と干戈を交へてをるのは現實ではあるけれ共、その實は英米と戦ひつゝあると觀察して居つた。然し乍ら斯くの如き事を公言する事はその當時に於ては徒らに英米を刺戟するものであつて、外交的に注意すべき事であるといふ位に遠慮又は控へ目に考慮せられるといふ様な雰圍氣であつた。處が今日に於ては全然夫れが現實となつて現はれて來て、この天津問題以來排英の空氣は全國到る處に澎湃として起つて來たので、即ち問題は行く處に到着したといふべきである。

抑々英國と支那との關係は非常に舊いものである。然し乍ら劃期的に支那と接觸をしたといふ事は阿片戰爭以來の事である。阿片戰爭は一八三九年に勃發したのであるから、今年は丁度百年に當る記念の年である。支那の禁制品である阿片を密輸入して巨額の利益を擗取して居つたのは

英國である。國民の保健上又經濟上の損失から清國の要路を大いに刺戟した爲に時の廣東總督である林則除は廣東の商店にある阿片二萬兩を沒收して廣東の海岸で之を焼き捨てた。此は當然の行爲である。

然るに英國は此を以て貿易の壓迫として抗議を申立て軍艦を派遣して清國と戦ひ、此を屈服せしめ、阿片焼却の代償として巨額の償金を拂はしめ、更に香港を奪ひ取り、尙其の他の利權を獲得した。是れ實に驚くべき罪惡である。爾來支那の弱點といふものを見出し、事毎に支那を壓迫して來た。即ち清國滅亡の端緒を開いたものである。而して終に武昌に狼火を擧げた所謂辛亥革命に依つて滅亡したのである。

支那革命の淵源を求むれば尙遡る處はあるけれども、我維新回天の事業が支那の青年を刺戟したといふ事が殆ど直接の原因と言つても可なりである。この革命を起した連中には二派あつた様に觀察される。一つは我維新回天の事業に感銘して支那民族に立脚した革命を起さうとした連中と、外國殊にアメリカの民主主義をイデオロギーとして立つた者とである。

前者は譚人鳳、宋教仁の如き輩で、後者は孫逸仙であつた。この兩者の間には相入れざる主義の相違はあつたけれども、革命遂行の経路に於て種々の障礙物が生じた爲に、無理なる妥協をして

進んだ。障碍とは諸外國の之に對する干涉である。而して孫逸仙は多く國外に在住して之を指導して居つた爲に支那の革命といへば孫逸仙が大本山の如く考へられて、革命の眞相は今日に到る迄その眞髓は充分に世間に理解されて居らない。遂に孫逸仙の部下であつた蔣介石に依つて一應支那は統一される形となるに至つた。日本も無論諸外國と共に干涉の手が伸びて居たのは明らか事、その個々の事實を探究して見れば一見失敗と見られるものもあり、又成功であると考へるものもあるが、之を一貫して觀察して見ると英國の支那に對する外交に追隨して來つたものであつて、支那固有の革命即ち我帝國に感激して立つた、その本當の革命といふものを成就せしめなかつた憾みが、多々ある事を感じるのである。

而してその革命の永い經過に於て支那本來の革命を計畫して居つた連中は屢々親日派と見られて夫等の巨頭は次々と暗殺の厄に遭ひ、或は病死し、凋落の一途を辿り、民主主義的即ち歐米流の革命派に依つて支那が統治せられ、特に英吉利の思ふ儘に支那が進展して行つたのである。終に英國の支那に於ける幣制改革の成就を以て、支那は支那の支那に非ずして英國の支那であるといふ極所に迄たち至つた。故に支那事變といふものは避くべからざるものとして生れて來たのであつて、従つて我帝國は英吉利とは支那に於て兩立の出來ない對照となつたので、夫が即ち今日

の東京會談である。百年以來の支那に於ける英國の罪惡といふものを此處に一掃し、追従外交を清算しなければ所謂東亞の新秩序といふものは確立しないといふ事は、何よりも明らかである。従つて日英東京會談は我要求の一點一劃にも讓歩する事は出來ない。この點に於て我帝國臣民は前後左右を考慮する事なく一致團結その素志を貫徹すべきである。それにしても時局を反映する學生の聲なきは如何なものにや、所謂不言實行か。

(一四・八)

三 校 一 體

支那事變の第三回目の夏休みも過ぎて第二學期が開始せられるやうになつた。この新學期に於て私がこの山の上から希望するところの一つは高工・實習・工業專修、この三校の方々がより緊密な關係を保持して、所謂總親和の精神でもつて學業に勉勵し、支那事變といふものを中心として將來わが國家に貢獻する素養の涵養に精進せんことである。

實習學校は大正十年に開校する豫定であつたのが、その當時高工が創立せられて一年生のみの在學で、校舍に餘裕があつたので、繰り上げて大正九年に高工の教室を利用して、同時に始業し

たのである。翌年實習の校舍が高工に相隣つて新築せられた。實習の創立の時にはこれは縣立でなくして高等工業附屬、即ち文部省直轄として設けられる豫想であつた。その爲に校舍も相並んで出來た次第である。豫想が裏切られ結局縣立となつたけれども元々兄弟學校である。それから二年程經て大正十一年に工業專修學校が設立せられた。これは久保田市長の時に横濱市立として出來たものでその經營は専ら高工に委嘱せられたものである。

この三校といふものは全然兄弟學校として經營せられ卒業式等も同時に行はれた。その中でも實習學校が敷地もいたつて狭いので、實習學校の生徒は高工の校庭に於て教練を始め授業時間外の遊戯運動も共同になし來つたのであつた。實習には又講堂が無いので、高工のを共同使用したのであつた。確か講堂の建築費が十萬圓を要した。實習學校はその半分の五萬圓を負擔した。然し一方は縣で、他は國のものであるから財産目錄としては講堂は高工の所有で、實習の財産としては、石炭置場と印刷所の建築を以てしたのである。ところが段々と時が經つて行くに従つて學生も殖えて行き、教師も殖えて行き、又實習の校長も高工の校長が兼任であつたものが獨立の校長になり、教師も相當に兩方から兼任であつたものが、それも段々と消滅して、卒業式も高工の講堂は使用するが、別になりして當初の關係といふものは段々に疏隔して來た様な感じがされる。

のである。

ところがこゝ兩三年來からして實習學校が運動場が無いので、現校長並びに職員生徒一同が非常な努力をして父兄より寄附金を集めて一萬圓の金を拵らへ、それに縣が六萬圓を繼ぎ足して都合七萬圓で以て運動場の地所を買収する費用にあてた。

高工も亦學校長の非常な骨折りによつて、十三萬圓といふ巨額の豫算を文部省から支出することに成功し、雙方の二十萬圓を以て學校に隣接した地所を買収する事が出來た。尙それでも不足な點があつて兩校とも如何ともすることが出來なかつた。

その事情に同情して高工の商議員である中村房次郎氏は三萬圓餘の金を投じて更に隣接する地所を買収添加してその使用を兩校に任したのである。

斯くの如くにして兩校が實に何れの學校にもその例を見ない様な廣大な運動場を、接近した場所に得られたといふことは非常な幸福である。全く兩校長の熱心なる努力に歸することで、何人も感謝措く能はざるところである。工業専修學校はこゝに無償でその恩典に浴するものであらうと思はれる。

この運動場によつて、三校が再び創立當初の所謂三校一體の形式を整へる様になつたことは、

私の最も欣快に堪へざるところである。願はくは三校の教職員も學生も、そこに何等の隔意なく兩校の校庭も運動場も、共有財産の積りでこれを使用し、又總ての行動も國家の大策である總親和の見地に於て一致せられ、此處弘陵の一角に天下に誇るべき學風の樹立、強化を祈つて止まな

い。

三校の總親和は學校教育の眞骨髄である。三校各獨善を叫んで教育何處にありやである。

(一四・九)

親英親米は國民の常識か

野毛山の伊勢大神宮様の境内に威風堂々たる銅像が脚下に横濱港を見下し、遙か太平洋の彼方を睥睨して居る。近寄つて見ると之は音に聞く大谷嘉兵衛翁の銅像である。翁は大の親米家であった。

大正の末年に日米間に移民問題が纏れて、兩國間の意志疏通を缺き、我國民の面汚しをされた。當時金子堅太郎子爵今の伯は、日米協會の會長を退き聲明書を發表して「我再び米國の地を踏まず」と憤慨したのであつた。日米親善外交の爲に半生の心血を濺いだ子爵にして猶此の如しであ

るから餘程堪へ難き屈辱を感じたのであらう。

當時私は子爵の聲明書を手にして獨り我校の講堂のみならず、到る所で米國の不遜なる態度を攻撃して居つたのである。當時大谷翁はあの大きな手で、私の肩をたゞき、又手を握つて「亞米利加の國民は決して斯くの如き『わからずや』の不遜な者ではない。之は極く少數の爲にする所ある野心家の聲である。先年自分が茶の輸出問題に就て日米間に問題が生じた時に釋明の爲に米國に行つて、審かに經驗した所である。君よ、その攻撃の態度を改めて呉れ。」と、當時遇ふ毎に此の老人から説諭と慰撫を受けたものであつた。根據も理由もない、只亞米利加は有難いよい國と思へと云ふのであつた。今でもあの銅像を見ると大きな手が思ひ出される。

此は又舞臺は違ふが、我國實業界の大御所澁澤子爵は、日米間には未來永劫戰爭と云ふが如き不祥事は起る事は無い。さう云ふ事を考へる事さへ罪惡であるかの様に公言したものである。私は子爵の此の斷言は我國民を誤る所のものであると、極度の不満を感じたのであつた。此等の人の英國に對する態度は矢張り同じ程度の親英であつたと斷言することを憚らない。

十幾年前には横濱にペルリーの記念碑を建てると云ふ聲さへもあつた事を、記憶して居る人もあらう。親英親米の由來を遡つて行けば之は先づ果てしもない事である。

殊に澁澤子爵に至つては我國民の何人もが敬服しその指導を仰いで居つたと云ふ事は事實である。かういふ人達が心からの親英親米の所謂大元締であつた爲に親米親英と云ふ事は我國民の常識と云ふものに成つてしまつたと見て差支へはないのではなからうか。

今日は世界全體として洵に恐るべき混亂状態に陥つて居る。即ち東洋に於ては所謂支那事變と云ふものが西洋に於ては歐洲大戦争がその序幕を戦ひつゝある。雙方共世界各國が入り交つて、所謂外交戰と云ふものに鎬を削つてゐる。

而して我が帝國の外交に於て、又大陸に於ける聖戰遂行に於て、特に英國が妨害になる。それ故に排英の陣線を布かなければならないと云ふ立場に至ると、國民の上層又有識者の多數は困つた事ではあるが、餘儀ない、と云ふ心境で兎に角排英の態度に向ふが、それと反對に排英の態度の必要が無いと云ふ様な形勢が現はれて來ると、あゝこれでよかつたと云ふ様に、胸を撫で下して安心する。又反面にはスターリン、ヒットラー、ムツソリーニは梟雄、奸雄で何等信用の置けないものであり、チエンバラシとかルーズベルトと云へば正々堂々たる政治家であると言ふ事が同時に常識になつてゐる。

昨今出て來る新聞雜誌の論説を見たり、海外より來る通信を十分に心して讀んで見れば私の所

説が其處に裏書きされて居ると云ふ事が、何處かで必ず發見されるであらうと思ふ。此等の常識を何處迄も傳統的に固守して、果して我が國策に沿ふものありや、否や、須く考慮すべき大なる問題の一つであると私は考へざるを得ない。

(一四・一〇)

時 事 小 言

政變が起り新内閣が新に組織せられた時、新宰相は即日閣議を開き、新政府の採るべき確固不拔の新方針を付議し、之を中外に發表し、其のまゝ總理が閣員の全部を引率し、特別列車を仕立て、伊勢の大廟に奉告し、天地神明に至誠奉公を誓つたならば如何に國民が緊張の氣分に充たされるだらうか。

大臣になると云ふことは素より大なる光榮であり又榮達である。同時に又上は至尊に對し奉り、下は國民に對し重大責任を負ふ、所謂身命を賭しての大事件である。出身地や出身學校の歡迎又は招待等は最早時代と離れつゝある。正に一身一家の利害喜憂を超越したものであるべきではなからうか。

一省の事務官等が結束して長官の處置を不當とし、總辭職の場合があつたなら躊躇なく免官する。而して其の善後處置に於て收拾し難き失態を來すが如き事があつたならば、長官自身が其の責を負ふと云ふ様に進退したならば、如何に官紀肅正と言ふものが徹底せられるであらうか。

次に政府は此の大非常時に物價騰貴を極力抑制してくれて居る。私共恩給生活者がお蔭で大戦二年有餘を経過して、巨億の財帛を消費した今日、猶日常の生活にさしたる苦勞のないことは、實にあり難き限りである。而して政府自身も又專賣局を設けて煙草や鹽の商賣をして居る。今日の様な時勢であるから、私様な人並以上の喫煙者でありながら煙草の値段は今の二倍になつても、無論困るには相違ないが決して不平は云はない。國民皆然りと思ふ。併しながら政府も、民間商人の物價値上を拘束して居る以上、專賣品の値上げに就ては深甚の考慮を要すべきではあるまいか。

然るに政府の一官吏が煙草の値上げが近い内にあることを豫想せしむる談話を公にしたり、賣惜しみの爲に煙草が賣店から消え去ると云ふ様な噂を聞くと、人を派して其實を檢査せしむる等、恰もスパイ政治を思はしむる言論を放つ。抑も此の如き官吏は即刻免職に値すべきではあるまいか。全く政治の要諦を知らぬ。又政治を害するものと思はざるを得ない。長官も其儘にして咎め

す、國民も知らぬ顔で過ごして行く、吏道の類廢實に憂ふべしである。

今は昔、政黨が盛んな世の中では、國家の利害を外に、黨利黨慾が専ら營まれ國民は其弊害に堪へなかつたことがあつた。政黨が凋落すると今度は官吏の獨善が、其れに代つて來た様に思はれる。して見ると政治と言ふものは誠にむづかしいもので、殊に此の未曾有の時局に於て然りである。如何なる事があつても我々は政府の指し示す處に従つて、國民一致此の難局を切り抜かねばならぬとの固き決心を持つものである。當局者、宜しく我々國民の意を諒として當局者自身が更に緊張邁進、我々國民を得心のゆく様に鞭撻せられんことを希望してやまぬ。(一四・一一)

開 校 記 念 祭

時局に鑑みて昨年中止した開校記念祭は時局を再検討して今年はこれを舉行することになつたと言ふことで實に慶賀に堪へない。さだめて學生諸君が再検討した一層價值のある記念祭を舉行せられることであらう。

私は記念祭に表はれる總てのものは學生諸君の平常を代表して其處に現はれ來るものと信する

ものである。論語に「其の爲す處を視、其の由る處を觀、其の安んずる處を察すれば、人いづくんぞかくさんや。」と云ふ句がある。記念祭は此の孔子の言葉の様に凡てが隠されずに顯はれ來るものであらう。

猶私をして言はしむると、此の孔子の言葉から思ひ出されて、記念祭は大なる鏡である様に考へられる。弘陵の青年が如何に國家の前途に其情熱を燃やして居るか、如何に彼等は選拔せられたる秀才なるか、如何に彼等は勤勉勞苦の青年であるか、如何に彼等は純情無邪氣な好漢であるか、凡てが明鏡に反映して金港百萬市民の囑望を集來せしめんことを希望する。

一言以て祝意を表す。

(一四・一一)

偉 人 待 望

現今教育の普及が所謂文運隆盛の世の中を作り出したといふ様に見える。今日の實業専門學校は私共が習つた四十年前の大學と較べて優るとも何等の遜色がない。そして之等の學校を輩出して行く人數は統計を調べれば直き判る事であらうが、いづれ何十倍にも達してゐる事と思はれ

る。従つて文化の進歩と云ふものは非常なものと言はなければならぬ。

併し不思議な事には拔群傑出の人間が居ない。今日世界で目覺しい仕事をしつゝある人々に、スターリン、ヒットラー、ムツソリニーと言ふ様な先づ世界三傑とも云ふべき者が居るが、これらの人は何れも學校出身者と云ひ難いのである。これは又當世に限らず過去の歴史を見ても學校といふものからは不出世の英雄豪傑が出て居ない。

かく私はお話をして、決して學校教育を疎そかにしたり、又文運隆盛を呪ふ譯でもない。何れに對しても多大の關心を持ち、私一代も學校教育に微力を盡して來たのである。それだけにこゝういふ事實を見て私共が盡して來た教育の何所かに缺點のあるといふ事に就て、私自身としても現職にある時も、退隱した今日も其の原因に關して念題を去り難く絶えず考へさせられるのである。

現代日本の要路に立つて居る人に就て見れば、殆んど學校教育を完全に受けた人々のみである。そしてこの前古未曾有の非常時期を背負つて立つてゐるのである。教育の普及の爲に日本精神といふものが大いに宣揚せられて來た。例へば何れの集會に於ても、皇居を遙拜し戰歿將士の遺靈に黙禱する等、形式的には實によく整つて一絲亂れざる状況にあると言ふことは眞に感激す

可き場面である。

併しながらこの皇道精神といふものを一身に權化せしめて偉大なる光を放ち、國民がその風を望んでこれに向つて崇敬の念を拂ひ、この傘下に集つて行かうとする様な所謂一世の人格者と云ふ者、言葉を換へて言へば、英雄といふ者が一人も見當らない。勿論要路に立たしむると事務的にはこつ／＼と仕事をやり、相當の理窟を捏ねまはす者は數限りなくある。然し首腦者として指導的精神を發揮し部下を統率し責任を重んじ名節を尊ぶ政治家らしい政治家、又日本人らしい偉人が見當らない。僭越ながら臺閣の諸公を見渡しても其感じがせられてならない。一身一家を超越し肝膽相照らし一死報國と云ふ氣力と氣魂が見えない。冷眼以て見れば全く烏合の衆であると評せられても、恐らくはこれを辯護する言葉はなからうと感ぜられる。

これは畢竟今までの學校教育の一面からの弊害であると見なさざるを得ない。かういふ弊害が積り積つて來た終極は、學問と云ふものは無用の長物であると云ふ様な行詰りを生ぜしむることがないとは誰が保證し得るか。過去の歴史はこれを證明して居る様にも考へられてならない。

學校教育考

教育審議會でお歴々の教育家が學制改革を論議して居る記事を時々新聞で拜見して居る。

實業専門學校の方面では今尙年限延長の事を考慮してをる様に見える。今の教育家の多數の人は何でも構はず、多量の智識を青少年に授けてやる事を最大の能事の如く考へてをるのではな
いかと思はれる。従つて學課を専門的に分割し、各々の専門學者を以て其の教授の任に當らしめ
總ての物を授けて、各々試験に依つて其の點數を定め學生々徒をして殆ど其の暗記暗誦に疲勞せ
しむると言ふ状態である。又他方體位向上を唱へ國策に副ふとして之を鞭達して殆ど餘裕とか餘
暇といふものをなからしめてゐる。

人間の靈智を啓發し所謂一を聞いて十を知らしめると言ふ事が智識的教育から言へばその眼目
でなければならぬ。然るに十を悉く授けなければ教育の任務が盡し得ぬ様に考へてゐるに於て
は眞に厄介至極である。人智の進歩につれ新に學理が発見され、發明が生じてくる。十の十迄學
校で之を教へねばならぬとすれば、今から又十年二十年將來に於ては更に學校教育を延長せねば

ならぬ結果に至るだらうと思ふ。

先づ此を中等學校に就て説明して見ると能く了解が出来ると思ふ。現今の教授法では總ての學課を同一の資格においてつめ込みに全力をあげ、明日は地理の試験だと言つて山、川、湖、都會の名やその高さ廣さや人口迄も夜を徹して暗記をしてゐるのを見て、如何にも青少年に對し私は氣の毒で又無益の事に歎息を發せずにはゐられない。而してそれらの總點數、總平均點を以て人間の價値を定めるといふが如きに至つては一體教育が人材を養成するのか、人材を殺すのか多大の疑問を持たざるを得ない。私は中等學校に於て今迄の様に生徒に總ての學課を教授する事には更に異議がないが、其の方法を大いに變へて見たいと思ふ。

總ての課目中、和漢文、數學、外國語の三課目に就ては嚴格に之を教授し又試験する。此の三者は人間の一生に於て基本的の智識になるものであるからである。その他の學課即ち地理、歴史、動植礦物等に就ては一切試験も採點もせず、教師は其等の時間にねんごろに其課目に就て、之を説明し且つ質問を受けつゝ座談的にその智識を與へるのである。例へば地理を教授するのには成可く適切な教材を集め東京附近であるならば東京灣、霞ヶ浦を説明し、利根川を話し其の河口には銚子の町があり、それはどんな町か、犬吠岬にはどんな燈臺があるか、横濱からこれらの所へ

行くにとるべき道順等を懇ろに且興味ある様に話し、生徒の自由質問其他につき如何にも教室の中を和かに生徒をして地理に興味を持たしめて行く。他の學課に於て又然り。かくすることにより生徒はより親しく教師の人格に訓陶せられ、其頭腦に餘裕を生じ、創意力を誘導し、一般的常識を高め、且つ智識慾を一層向上せしめ得ることゝ私は確信する。しかのみならず此精神で行けば中等教育でも高等教育でも、まだ學習年限短縮に餘裕綽々たるものがある。

實業専門學校に於ても亦同様で、例へば化學では専ら其の基本的の一般化學とか物理化學とかに力を注ぎ、酸、アルカリ、肥料、セメント、コークス、砂糖、纖維等と色々な物をいち／＼講義をして筆記させ記憶に留めて行くといふ様な事は殆どその必要を認めぬと思ふ。かゝる事をいち／＼専門の學者に依り教授せしめるといふ事になると際限なき事である。

講義をして筆記させなければ教授にならず、試験をして採點しなければ氣が済まぬと云ふ考を一掃しない間は教育の革新は困難であらう。今の教育家自身も、筆記と暗誦と點取りに學校生活を過ごした方々であれば、教育審議會の成績も平凡と無難以上は期待出來まい。併し何れの委員會にも少數意見と云ふものゝ中には屢々卓越高邁なものがある。只憾むらくは當局に之を採用するの勇氣と決斷のなきことである。

農村の工業化

先般、日本クラブに於て理化學研究所々長大河内子爵は、農村に於ける工業問題について講演せられ、農村の副業として一大生面を開拓したことについて注意を喚起せられた。

農村の子女に副業として工業を分擔せしむることについて、疑問があつたといふのはその能率如何といふ事である。農村の子女は教育程度が低いのであるから、精巧な機械工業を課するに於ては都會の熟練職工に較べて、或は問題にはならないといふ様な悲觀説もあつた。然るに子爵は斷乎として之を實施してみた。處が驚くべき事には、農村の子女は早きは十日内外、遅きも數週間にして、熟練職工に比して二倍の能率を擧げるといふ事實を發見した。

都會の熟練職工が、例へば一つのピストンリングを作るに、全部をその職工に依つて仕上げるとする。農村の子女は、一人でそのリング完成の一工程のみを仕上げ幾人もが次へ次へと他の工程を受け持ちて之を完成するのである。故に一人のものは全然同じ工程のみに従事するから仕事は全く單調であるが農村の子女は此に能く耐へるのである。之は實に我國工業經營上に於ける新

しき事實で、同時に又一大福音といはねばならぬ。此新施設を行つた新潟縣、又群馬縣に於ける一部農村に於ては、此の副業に依つて一生面が開かれ農村生活が非常に豊かになつたといふ事である。大河内子爵には農村子女の作業状態、農村家族の一家團樂の楽しき様子等を映畫に收めて我々に見せて呉れた。

私は大河内子爵がこの方面に努力せられてをるといふことは、既に幾年も前から聞知してをつたのである。同時に又此問題に關して私の疑問も持ち續けられて來たのである。此の日詳細な説明を子爵から直接承つたのは實に欣幸であつた。抑も私の從來疑問にして居る點は農村に課した副業が却つて本業になり、本業である農業が副業になる恐れなきやといふ事であつた。

子爵は此疑問に答へて指導者の宜しきを得れば、其の憂無しといふことであつた。

然し問題はさう容易に解決せられ得るとは思はれない。現に關西地方に於ては、農家の副業として行はれて居るものは、機械工業と迄はいかないが、例へば、農家の收穫をする藁及麥藁等を経て菰を編み、繩を作り、ビール、サイダーを始め、容器の包装を製作してをる。實に農家自然の副業で、而して此れは又工業の發展に伴ふ必要なものであるから、益々その様なものゝ製作が盛んになる。従つて、一村中に此の副業に従事するものが相當の戸數あるのである。

而してその中には、この様な副業が本業になつて、正業である農業が疎かになり、本末顛倒の傾向がないでもない事が、私自身實際に經驗した。其迄に行かなくとも、從來の如くは農業に丹精する者が、自然に少くなつて來る傾向は歴々として見られるのである。

農村は一國の人口繁榮の根幹をなすものである。従つて、農業を疎かにするといふ事は、國家百年の計をなす上から大いに憂ふべき現象といはねばならぬ。世界經濟史上彼の産業革命といふものが起つて、イギリスが工業の勃興と都會の繁昌とを來した爲に農村が次第に荒廢した。百數十年前に、詩人ゴールドスミスが、荒村（デズルテツドヴィレージ）といふ有名な詩を作つて此れを嘆息した。イギリスは國家の隆盛をもたらしたが他方農村の荒廢には惱み抜いてをる。三十年前私が滯英の際に、農村振興の爲に甜菜を栽培するとか、或は農村に娛樂的機關の設備を獎勵するとか、色々な方面の事が問題にされてゐるのを見たのである。今日英國の惱みといふのも其處に深い原因を持つてゐると見なければならぬ。

我が國に於ても、如何に商工業が盛になつて來ても農村を荒廢せしめたならば健全なる民族の發展を望むことは出来ない。深憂實に此處にありと私は工業方面の出身ながら平素から確信してをる。工業の隆盛と共に、農業の發展を同時に努めて、之を併行せしめなければならぬ。副業

を授けて農村生活の内容を豊富にするといふことは結構であるが、本末を顛倒するに到らしめない様、爲政者の留意は肝要な事であると思ふ。

(一五・一)

我建築科の特色

朝日新聞紙上で曠古の聖戦に忠勇無雙の英靈を記念する忠靈塔設計の懸賞を募つたが二千近くの應募者の中入選又入賞者が四十七名發表された。その中で入選一等賞を始め其他合計十二名が我が横濱高工の出身者で占めたと云ふ驚くべき記録を示した。

私は此を以て横濱高工の建築科は一番偉いものであると自慢するのでもなければ、又喜ぶのでもない。只我が高工は大なる特色を持つて居ると云ふ事に於ては、大なる誇を感じざるを得ない。此れは建築科の教職員諸君の平素の努力と見なければならぬが、特に私は中村順平先生に此の機會に於て感謝と敬意を捧げたいと思ふ。

抑々當代の文化といふものを有形的に後世に傳へる所のものは建築、土木、繪畫等ではなからうかと思ふ。萬里の長城の支那に於ける、ピラミッドのエジプトに於ける、又パルテオンのギリ

シヤに於ける、法隆寺の我が國に於ける、何れもその當代に於ける文化の燦然たる事を知らしめ、各々その後世國民をして、彼等の祖先に敬意と愛着を感じしめるものである。

「人生は短く、藝術は悠久なり。」とはゲーテの言葉である。藝術には門外漢の私も僅かながら世界に於ける名所古蹟を訪ねて、特にイタリヤに入りローマやミラン、フローレンス等に於て世界不朽の藝術家の残した作品に接する時には、このゲーテの言葉に一種の感激を覺えずには居れないのである。歐洲に於けるナポレオンを初め英雄豪傑の霸業の跡を訪ねる人は少ないが、悠久の藝術を訪ねる人は昔より今に至る迄、殊にイタリヤに訪古の杖を引く者の跡が絶えないのを以ても知るべきである。

中村先生は、藝術は悠久であると云ふ事を深く體驗し、何物かを未來永久に残したい信念に燃えて居る人であらう。従つて先生の門下に集まつて來る人々に對しては、衣食の爲に建築學を教へるといふよりも、悠久の藝術に導びかうとする信念の強い人であると思はれる。學生を用人として又一會社の社員として、其れに相應しい様な手引をするといふやうな職業主義や功利主義を超越して、悠久なる藝術の信念に自分が先頭に立つて門下と共に精進して行かうと云ふ中村先生のその至誠の顯れが、十幾年を経て今回の忠靈塔設計に表れて來たものであると感ぜられる。

私は中村先生の門下に集まつた人々は非常に幸福であると羨まざるを得ない。世の中には嬉しい事や幸福な事が様々あるが、同じ尊い目的に向つて一心同體に切磋琢磨の出来る師弟の間程幸福な嬉しいものはなからう。

中村先生が我が高工に就職をせらるゝに當つて、建築科の募集人員が四十人であると言ふ事は私から聞かされて非常に驚かれた。若し一學級定員五六人とするならば、お引受けするが四十人ではとてもお引受けをする勇氣がないと斷られた。幾度私が交渉を重ねたか忘れたが、これには實に骨が折れた。遂に十五人を減じて二十五人を募集するといふのでやつと妥協せられたのであつた。學校側としては中々の犠牲であつた。

爾來中村先生の門下を教育する風を見て、四十人では引受けが出来ないと拒絶したと云ふ事に對して、實に無理ならない事であると理解もし敬服もしたのである。しかも今回の十二人の入賞者の多數にその効果を見て、私は言ひ知れぬ満足を感じるのである。教育の威力を實際に見せてくれたのに對して無限の有難さを感じる。

仄かに聞くと本年度から我が建築科は七十人乃至七十五人の募集をすると云ふ事である。教育は人間が神の代理として勤めて居る神聖を理解せず、單純に一つの事務と心得て居る當局者に對

して、此の際私は何と申し上げてよいか只嘆息の外はない。建築學科と云へば何處の學校も同一であると見るのは事務的で又劃一的である。文政の當局が全く事務又劃一的施設の外には宏遠なる教育の活識なきことは此一事を見ても伺ひ知られるのである。

八釜しきことは抜きにして此れも時局の統制とお氣毒ながら中村先生に諦らめて貰ふより外なからう。

(一五・一・一三)

日米無條約時代

今二十六日を以て日米間は無條約の間柄となつてしまつた。

日米間に國交あつて以來幾十年になるか知らないが、如何なる場合にも我國の輿論は米國に對して始終好意的で未來永劫日米間には戦争と云ふ様な不祥事は無いと斷言した親米家さへあつた。之等の人々には如何に今回の無條約問題は考へられるであらうか。之でも米國の眞意は分らないであらうか、好い加減の處で心氣一轉してもらひたいものである。

世界大戰後米國が主唱して國際會議を開き九ヶ國條約不戰條約等を締結し、我帝國も又其の主

なる一員として之に調印した。此等は悉く我が帝國の膨脹を阻止抑壓せんとする意圖に出である事は其の後の経過を辿つても明々白々の事である。昨年九月十月頃東京に歸任したグルー米大使は日米協會の歡迎會に於て何と述べたか。即ち日本に對するアメリカの誤謬はアメリカが餘りに法理論に傾き過ぎてゐると云ふ見方である様であるが、若し法理と云ふものが條約だとか約束だとか國際法だとか云ふものであるならば、日本の見方については大いに驚かざるを得ない。如何となればアメリカの外交は法理を重點として居るからであると明言したのである。

どれ丈此の言葉が我々日本人にピンと來たか其の點は明らかではないが、其後の様子を見てみると、我々日本人には充分に其の意味が解せられて居らない様に考へられる。全く日米間の考が喰ひ違つたものである。試に彼の九ヶ國條約を見れば、第一には支那の主權獨立並に其の行政的保全を尊重する事を約して居る。第二には支那の全領土を通じて一切の國民に對する商業及工業上の機會均等主義を尊重する事を約して居る。第三には他國民に對し優越地位を獲得し或は門戸を閉鎖するが如き特殊地位の設定又は獨占權及び優先權の取極めを支那政府をしてなさしめないとして居る。條約調印諸國は勿論之を守るべき義務があることは申す迄もない事である。

所で英米は殊に米國は之等條約の主唱者でありながら、支那が此の條約に違背して我帝國の權

益を侵害する事柄には拱手傍觀するのみならず、却つて支那政府援助の手を伸ばしたのである。全く條約の破壊者である。之が段々に重つて所謂滿洲事變を起した。我帝國としては全くの正當防禦である。然るに英米殊に米が率先して自らは聯盟國でなきに關せず極力聯盟を援けて日本は條約を蹂躪する不埒者である。不戰條約を無視する侵略者である。と云ふ様な惡名の燒判を押し、聯盟各國をして之に同意せしめた。其汚名は帝國としては今猶雪いでは居ない。聯盟脫退を以て僅に之に酬いたに過ぎない。

今度の支那事變と云ふものは之又滿洲事變の延長に過ぎない。再び又滿洲事變と同じく日本は侵略者である、條約の蹂躪者であるとして、世界各國に其の惡名を承認せしむる事にこれ努めて居る。グルー大使の言ふ法理は米國外交の重點であると云ふ事は此等の經緯を考へるとよく了解せられるのである。九ヶ國條約不戰條約の條文等を見れば、アメリカが特に日本を攻撃する所の理由はよく備はつてゐると見る事は出来る。お互に此の條約を尊重するならば之等の條約は東洋平和を維持するに足ると考へられる。

然るに此の條約の裏に隠れて日本の既得の權益迄も支那を懲憑して蹂躪せしむるに至らしめた。其の結果が今日の狀態を來たしたのであるから、條約蹂躪の責は我が帝國に非ずして、正に

米國にありとしなければならぬ。此の點に於て、我國民に充分の認識が缺けて居る様に思はれる。何故に我が帝國外交は、東洋平和の攪亂者は彼等の云ふ如く我帝國に非ずして彼等自身であると逆襲しないのであらうか。

昨年夏にヨーロッパの諸國の間に風雲急にして支那事變に最も關心を持つて居つたイギリスが著しく不利の境遇に置かれんとするや、蔽から棒にアメリカが日本に對する通商條約破棄の通告があつた。支那に新なる中央政權が樹立せられんとすれば其の間際になつて新政權の裏切者が香港で策動し、東京灣頭で淺間丸事件が勃發して來た。

何處迄も日本を包圍して支那事變を長びかせ我が帝國を抑壓せんとするのである。通商條約破棄の通告に接して居つた我が前内閣に於ては野村大將の如きアメリカと親善の間柄にある方が外相になつたから、此の問題も好轉するであらうと云ふ様な情實的な事が屢々新聞記事として現はれるのを見る。實に不甲斐の無い見識と云はなければならぬ。昨今は事變を通じての最重要時局に到達して居ると私は直觀する。どういふ故障が起つて來るか豫測し難い。日清戰爭の終末に遼東還附の恨事のあつた事を、我々國民は今の時局に於て寸時も忘れてはならない。

條約の章句を表看板として其章句に違反した不屈者であると四方に豪語し片務的のものではな

く相互的のものであるべき條約を破壊した元兇的行爲を棚に上げ、其行爲より派生した事件を以て條約の蹂躪者又侵略者なりとし、我は法理を以て外交の重點とすると、威張る其假面を剝ぐにあらずんば我外交の更新望み難しである。霞關の諸公以て如何となす。

(一五・二)

紀元二千六百年を表彰する唯一の記念事業

事變當初より異常なる戦果を挙げ來つた我帝國は茲に端なくも神武天皇肇國二千六百年に際會した。申す迄もなく百年に一度ある年で何時もならば此の二千六百年を國民舉つて慶賀し、夫々此の年に於て、市町村、又夫々の團體に於て、世紀の記念事業を行つて全國祝賀に浸さるべきである。

今事變下に於て我々は何を以て此の年を記念するか。新聞のニュースを觀て見ると各種の建設物とか、或ひは植林であるとか、その他種々な福利事業を計畫して居るものがある。此等のものは、どれもそれ自身として不可なるものはない。けれども此の二千六百年といふ特殊の年を記念するとして結構と思ふものは、此等の中の一つとして見出されない。此の年に最も相應しい我帝

國の未來永劫に傳ふべき最高の記念事業と云ふものは、此の年を以て重慶政府を叩き潰して、支那事變の終結を告げしむると云ふより他にないと思ふ。

何れの記念事業にも皆、金と努力と精神とを要するもので、之等のもの總て悉く私の云ふ記念事業に投すべきである。他の何一つの記念事業を残すには及ばぬ。唯々此の戦争終結と重慶政府撲滅と云ふことが、何物にも代へられぬ記念事業であると云ふ事を牢记すべきである。

我々は 陛下の赤子である。陛下の赤子は何物をも超越して純粹無垢の忠義心で終始しなければならぬ。

社會のあらゆる階級を通じて、これ等の邪念に超越して純粹無垢の忠義に活動し得るものは青年層である。後世の歴史に未來永劫輝く所の此の一大記念塔を建設するに於て、現代青年學徒がこれに一大寄與する事なくして、何を以て後世の青年に見ゆる事が出来るや。

人、口を開けば維新回天の事業は年少氣鋭の青年の手によつて成つたと指摘して居る。之を唱へつゝある處の、又、之に共鳴する處の現代青年の内に維新の志士の片鱗を見る事が出来ないといふ事は、實に奇怪千萬と私は絶叫せざるを得ない。

然らば現代の青年は如何なる方法を以てこの記念事業に參與し得るや。かう問はれるならば其

の方法は幾らでも存在して居ると思ふ。國家には正規の防禦軍が組織されて居るのであるから何
も義勇軍を募つて大陸の一線に驅逐する必要はない。併し乍ら、銃後の第一線には驅逐すべき前
線は幾らでもある。

今、支那と日本は四つに組んで支那がタジクで土俵を割らうとして居る。外國、殊にアメリ
カは日本の後から足を捉へ、頸を抱へて引戻さんとして居る。支那の後からは大きな手を以て押
し抱へて、「もう少しの辛棒だ、もう少しの辛棒だ。今に日本の精力は盡きる。その合圖をしてや
るから一氣に突き戻して最後の勝利を占めろ。」と激勵しつゝある。即ち經濟的に日本の銃後を起
つ事の出来ない様に打撃を與へようとして居る。

國內に於ては昨年の秋以來日常生活等の色々の品目に於て、國民の苦痛を感じるものを段々に
生ずる様になつて來て居る。之が殊にアメリカに誇大されて、其の弱所を衝かうとする傾向は特
に著しきを感じられる。吾々の物資は國民の生活を脅かす程度には不足しては居ない。無論之だ
けの戦争をすれば多少の不自由を感じると云ふ事は無論の事である。吾々の敵國を見れば、其の
慘狀は恐らくは目も當てられぬであらう。吾々はこれだけの不足に不平を訴ふるが如き自信力の
無い國民ではない。又、事實買溜賣惜しみ等、國民精神の置き處の悪い爲に惡結果を齎らして居

るのが多大である事は常識を以て判断し得る處である。

此の如き精神の置き處の悪い状態を矯正せんが爲に、國民精神總動員と云ふものが出来て居るのである。然るに、この一大運動が今はおいとけほりの状態にあると云ふ事は何たる醜態であるか。

私は皇道精神何處に有りやと問はんと欲する。純忠無垢の吾青年層は此の際大いに皇道精神を發揮し、私利私慾に目が眩み國家の一大事を等閑に附して居る状態に向つて、一大鐵鎚を加へて此の銑後經濟の愛國的態度に一致協力をさす運動に奮起するのを望んで止まない。

而して、其の目標とする處は此の記念すべき皇紀二千六百年に於て重慶政府撲滅支那事變終結と云ふ一大記念事業、最高記念事業に突進せん事であるべきと思ふ。

(昭和十年二月十三日、依願免官翌十四日告別講演をなしたるより滿五年の記念日)

現代教育の精神的貧乏

昨今の重大時局に直面して一方學校方面をながめて見ると、殆んど今の青年學生は時局と没交

涉の状態に在る様に考へられるのが遺憾千萬である。若し時局と關係のあるものを飢ね出して見れば、青年學生の勤勞奉仕と言ふ位の事に過ぎない。

土を掘つたり運んだり、木を切つたり、炭焼きをしたりする、青年學生の勤勞奉仕を、私は決して悪いとは思はない。私自身としては居常山腹に住まつて、時々樹木を切り倒し、或は畑を耕し、自然といふものに親しんで居る。或時には土に親しまなかつたら眞實の意味に於ての皇道精神といふものを體得し得ないとさへ、考へさせられるものがある。

然しながら、天下の青年が學校に向つて集つて來るのは、土を掘る爲に集つて來るのであらうか。炭焼きをせんが爲に集つて來るのであらうか、と言ふ一つの疑問を提げて此等有爲の青年の心理を解剖して見れば、恐らくはさうで無からうと思へる。

無論神聖なる勤勞奉仕に依つて何物かは得られるであらうが、彼等は夫れよりも尙一層大なる精神的糧食を獲得せんが爲の慾望が在ると信ずる。

この非常時に於て擡頭したる勤勞奉仕と云ふものと併行して、彼等の精神的修養にどれだけの強化を我が教育界は與へたか、また與へつゝあるかと言ふ事に就て、私は多大の疑を持つものである。率直に私をして言はしむれば、併行しなければならぬ精神的方面を閑却して勤勞奉仕と

いふものを強制しつゝあるのではないかと思はれるのである。

若しさうであるとするならば有爲の青年の中には精神的の修養には辿るべきの道を失ひ、導かれるに目標なく、恰も迷羊の如く打棄られつゝあるのでは無きやと考へられる。かう云ふ現狀に於て、若し潜行せる悪思想が彼等の間に魔の手を延ばすと言ふ様な事があつたならば、精神的に飢えたる彼等は、或は善惡の鑑別なく、飢えたる者の食を擇ばざるが如く、知らず知らず思想惡化の道を辿らしめる様な恐れ無きやと云ふ事に對しては、我が教育界にその責に任ずるものゝ、深く思を致さねばならない所でないかと考へられるのである。

今日の状態を續けて行く上に於ては、例へ惡思想に感染すると云ふ様な事が無いにしても、將來に於ける思想の墮落、薄弱といふ事を増すと云ふ事は必然の事であつて、實に寒心に耐へない事と思ふ。

文政の要路に在る人、この點に關して如何に考へつゝあるか、私の切に聽かんと欲する所であり、又御注意申上げたい所である。

文臣不愛錢、武臣不惜命

或る人岳飛に問ふ、「天下何れの時が大平なる」と。飛答へて曰く、「文臣錢を愛せず、武臣死を惜まざれば、即ち天下平ならん」と。

何れの世にも錢を愛する徒輩には、贈賄又は收賄と云ふ悪い習慣が付きものである。併し其れが極端になつて收賄、贈賄の疑獄が連發し、要路の大官に至る迄、それに關聯する様になつては、所謂天下の機構が亂れたもので、岳飛の所謂天下平なるあたはざる所である。又武士にして、卑怯未練の行爲あり、命を惜しむと云ふ様な事に於ても同様である。岳飛は實に名言を吐いてゐるが、岳飛の國である支那に於ては、上下數千年 文臣愛錢 武臣惜命 連續の歴史である。その天下泰平ならざる、決して故なき事ではない。その點に於ては我國の歴史は、かなり大きな相異を持つてゐる事を誇りとしなければならぬ。

昔の名將言行録と云ふものを繕といてみても、實に颯爽たる我國武士の面目が、躍如として現れ、後世我々子孫を鑑照してゐるかの様な感がある。明治維新の文官武將に就て考へても、實に

その奥ゆかしさが感ぜられてならない。明治の中頃に於ては政府の一要人が、僅か一個の金時計を受取つた爲に、國內を騒した事件さへもあつた。

然るに段々と世は移りゆき、商工業が異常な發達を遂げるに當つては、政府の要路者、政黨の領袖等々、贈收賄事件に關して頻々と起つた疑獄には國民の鑿鑿措くあたはざるものがあつた。何か一つ大きな政府事業とか、又民間の事業とかが、起り來るとその利權の影には、殆んどきまつた様に、暗影の之に伴ふものあるを思はしむるに至つた。

事變以來、斯くの如き暗影が、殆ど拭ひ去られたかの如く、其の消息を聞かないのは、實に慶賀すべき事であると、言はなければならぬ。但し之は單に表面に現はれないだけであると云ふならば、一層由々しき事と言はなければならぬが、私としては、斯く信じたくはないのである。所が此處に一つの違つた場面が、我が實業界に起り來つたと云ふ事は、見逃す事の出来ない事實である。それは退職した軍人で實業會社に入社して、顧問又は囑託となつた者の非常に多い事である。之は會社の方から云へば、その會社が軍需品關係のもので、軍部と特殊の連絡を取る上で、退職軍人を入社せしむるのが非常に便利であると云ふ事に基くものと思はれる。軍人にしてその在職中、自分は軍人としては不適當である、實業界に雄飛するにしかずと考へて、敢然としてそ

の職を授げうち、實業界に走ると云ふ様なのは、之は自己を見出した、賞讃すべき行爲と考へなければならぬ。

退職軍人にして出色の技能を有せず、單に他人の勧誘や、又自ら求めて實業界に身を投ずる者に至つては、武臣命を惜しむと云ふよりも、武臣錢を愛すと迄酷評して宜しきや否や疑問であるけれども、私の目から見れば、好ましからぬ社會相と、考へなければならぬのである。下級の軍人ならば、いさ知らず、相當の地位迄、昇進した武人は、細々ながらも、退職の後、恩給に依食する事は出来るであらうと思ふ。

相當の地位に昇つた武人が、都會なり、田園生活なり、退いて晴耕雨讀、武人の終始一貫の志と云ふものを修養し、いざ鎌倉と云ふ日待つてゐると云ふ事が、如何に我々の世道人心に、好影響を興へるものであるかと云ふ事は、考へる迄もない事である。いづれの實業會社にも軍人出入の頻繁なる昨今を見て、今後此の世相が如何に我が國家社會に影響するものであるかと云ふ事をつら／＼考へて轉、寒心に堪へない所である。要するに、私の咎めるのは無理であらう。社會の機構が、段々と變化したのである。官吏が獨善であると云はれると、官吏獨善である勿れと、首相までが、ぺこ／＼する。資本家横暴と批難されると、資本家が縮み上がる。教育家が、無氣

力であると云はれると、教育家は忽ち叩頭する。

此では、吏道も、實業道も、教育道も、振ふ餘地がない。各自の操持が貧弱な爲である。畢竟社會道德の根源が改らない限り、天下平なる能はずである。

(一五・三・六)

校庭の樹木

陽春四月の季節になると我が校庭の土手に沿ふて櫻が爛漫と咲き亂れる。私はその季節になると早朝食事前に櫻の見物に出て行く、澄み渡つた大空にまだ太陽が昇らず家並に戸が堅く閉され、道行く人も稀にいと静かな朝の櫻花は何とも云はれぬ清淨と高潔さとがある。

何處の名所の櫻よりもわが校門の櫻ほど私を引きつけるものはない。盛りが過ぎて散り初めると何となく名残りが惜まれて淋しい氣がする。この櫻樹は學校創立の大正九年の秋に學校附近の若宮八幡の境内にあつたものを移し植えたのである。當時は全くの幼木で運搬から植込みまで一切合切一本八十錢の取引で數は卅三本であつた。其後幾本か枯れたので今は三十本足らずになつてゐる事と思ふ。歲月匆忙早くも二十年たつた今日幹は既に喬木となり、春は萬孕の花を曇り雲

か霞かと疑はれ、夏が來ると鬱蒼たる綠蔭はあたりに萬斛の涼風を漂はし弘明寺附近の一名所になつた。

學校の敷地は鎌倉時代には入海であつたといふ事はその當時の記録から明かである。また創立の敷地買収の時には深田であつた。それを北側の小山を切崩し其の土で幾尺か埋め立てたのである。それ故に校庭は二三尺も堀り下げると地下水に達するのである。地下水の近い濕地では樹木の生育には悪いので、多少園藝趣味のある私は可成悲觀した。それ故に櫻を植えた土手に沿ふて深い溝を掘つて排水を工夫し、又冬になると相當の寒肥を施してその成育に努めた。それこれと多少でも丹誠をしたせいか、校庭の櫻花に對して愛着の念禁じ能はざるものがある。

同時にまたこの櫻樹の成育して行く有様は學校自體の進歩發展に道連れとなりつゝある様な氣もせられて、老いて行く自分の身も忘れて津々たる興趣を櫻樹に對して抱かざるを得ない。

學校の庭樹としては櫻の外に、公孫樹と樺が植はつてゐる。其當時は門を入ると正面に講堂があつた。此は正面道路で此道路の中段より左右に分れて、各一筋の道がついてゐた、その三筋の道路の並木として私は樺の苗木を植えることを命じて置いた。所がかゝりの主任大山春翠君が正面の街路樹として公孫樹を植えた。これには私も多少意外で幾分の不平でもあつた。

何様學校は濕地即ち地下水が近いためそれに對して植える樹木は選定しなければならぬ。所で水の中に根を突込んで兎に角繁榮し得るのは樺と公孫樹である事は、私は植物學者ではないが實際上知つてゐた。その事は大山君に知らしてはゐた處で、大山君は東京帝國大學正門から入つた街路樹は曾て濱尾總長が植えた公孫樹であつて、如何にも亭々として天を摩すその雄大なる風致に感心してゐたものと見えて、それで獨斷で濱尾總長を氣取つて肝腎な正面道路に植えたものである。同時に左右の側道には樺を植えて私の面目を立てゝ呉れた。私の樺を選んだ所以は横濱の近郊から武藏野一帶の田舎の邸には必ず樺が植はつてゐる。それは一つは防風樹として邸宅を保護すると同時に貴重なる用材を得んが爲で即ち資源培養である。春翠是か煙洲非か兎に角雙方共に独自の主張を以て希望を達したのであつた。所でこれらの苗木が二三年たつてあの大地震により大部分は焼かれて、今は残つてゐるのは五六本に過ぎないが樺は特に大きくなつて、當時特に貧弱に見えた樹容も、今日は堂々たるものにならんとしてゐる。見るからに嬉しい氣がする。

又學校の残り三方の境界には靜岡から幾斗もの茶の實を取りよせて播種したものである。これも震災に會つて踏みじられて僅かしか残らなかつた。それでも多少残つた茶樹から春が來ると製茶をして二宮尊徳宗の時の岡田文部大臣に贈つた事などもあつた。荒れ果てゝゐたこの境界

に、この頃立派な木柵をめぐらし學校の美觀を整へた事は眞に結構なことである。たゞ私の趣味から言へば木柵は少し高すぎる様な氣分がするのである。

なほ今のバラック講堂の前にアカシヤの木が相當の數ある。これは或る夏大陸會の會員が支那滿洲旅行をした時に、アカシヤの繁茂の狀を見て同行の飯塚品山君が特に私に要求して旅行記念の形であそこに植えたのである。私自身一昨年五月下旬數日間北京に滞在して、朝早く北京の外國租界を中心としてアカシヤ並木の街道を散歩して、その花と香に何とも云へぬ好い氣持ちがしたので、去年の秋大陸會記念の校庭にあつた三本のアカシヤを私の庭内に貰ひ受けた。北京情緒の思出としたのである。

(一五・四・二四)

大 戰 感 有 り

日露戰爭に於て乃木將軍は久しきにわたつて旅順の包圍攻撃を行つた。そしてその麾下に於いて二人の愛兒を失つた。

旅順陥落に引續き奉天の會戰に参加して、赫々たる武勳を擧げて凱旋した。而して將軍は其の

凱旋の氣持を七言絶句に表した。

王師百萬征驕虜

野戰攻城屍作山

愧我何顏看父老

凱歌今日幾人還

今日に至る迄、否末代までも我々國民は乃木將軍に於いて、輝かしき我武士道を想見するのである。

今日のヨーロッパ戦争に於いてフランダーズ平野に於ける英佛白三國の聯合國に對し獨軍が一氣呵成に電撃の離れ業をうつた。聯合軍は總崩れになり、莫大な損害を以て敗北し、ベルギー軍は降り、佛軍は自國內に引き上げ、英軍は命からがら海峡を越えて英本土に逃げ還つた。

英國の總大將ゴート將軍は新聞の報道を以てしても、僅に身を以て逃がれたと言つても差支無い程の惨めさであつた。其れにも拘らず、さも凱旋將軍の如くに英本土に歸り皇帝に拜調して勳章を授けられた。尙又ロンドンに歸る汽車中で再び大陸に渡つて獨軍と相見る時には必らず勝利は我が方にあると豪語して居る。

敗軍の將は再び大陸に行くと言ふ。全軍を支離滅裂にし猶幾多の部隊を敵の殲滅に任せてベルギー領内に残し置きながら、以上の行動は吾々には、全く不可解の事柄である。此をわが乃木將軍の場合に比し、東西軍人の心持と言ふもの、即ち日本人と西洋人との間に大なる心理上の相違のあると言ふ事は確實である。

尙又ベルギー皇帝は刀折れ矢盡きて此上の戦争繼續は徒に人命の犠牲を大きくするに過ぎないと、ドイツの軍門に降つた。ベルギー國土に於ける戦争が不利の状況に陥るやベルギー内閣は疾にパリに逃げ込んだがレオポール皇帝は踏み止まつて軍隊の指揮に當つて居つた。其の降伏がパリに知れるや、逃亡内閣は皇帝の處置を不當とし、平和克復の曉には皇帝は再びベルギーに君臨する權利は無い様に非難を浴びせて居る。種々の状況已むなしとしても、皇帝を置いて内閣が外國に逃亡すると言ふが如きは、君主國としての立場から如何なものであらうか。況んや皇帝を非難するに於ておやである。此處に又我帝國と其の立場に於て、天地もただならざる相違のある事を認めるのである。

今日の歐洲通信を見るとイタリが獨乙側に立つて參戦をしたと云ふ。いよいよ歐洲の戦争と云ふものは有史以來の大激戦となつた事が想像される。

イタリアとソ聯は、かねて意志の疎通を缺いて居た爲、各々其の大使を自國に召喚して居つた。昨日に至つて、伊ソ兩國は大使をそれ／＼歸任せしむる事になつた。即ち疎隔して居つた意志が圓滿に疎通したものと見える。

それと同時にイタリアが英佛に對して宣戰布告をする様になつた。聯合國としてはイタリアの此の行動を、火事泥的に見るかも知れないが、イタリアとしては用意周到又隱忍自重よく其の機をとらへたと云はなければならぬ。

今日の歐洲戰爭は獨伊とも非常に早くから今日ある事を、豫想して準備をして居つたと見るべきである。殊に獨乙は世界戰爭の惨めな敗北に鑑み、臥薪嘗膽國民擧つて、造次顛沛にも所謂會稽の恥を雪がんと、深く肝に銘じて居つた事が思ひやられる。

英佛は此に反して、第一次世界大戰で永年の競争者として敵視して居つた獨乙を徹底的に打ちのめしたので、これで暫くは枕を高くする事が出来ると勝つて兜の緒をしめず油斷して居つた事が今日の禍根となつたものと見なければならぬ。

油斷大敵とは、この歐洲戰爭の狀況に於て適切に見られる所で我々帝國臣民は他山の石として大いに考慮すべき事である。

(一五年六月一日イタリア參戰の日)

優越感

私が獨英に留學してゐたのはもはや三十年程も前の事である。獨逸に於ける二ケ年は専らハンノーバの都に居つて下宿を七ヶ所變へた。別に飽いた爲ではないが家庭の様子が知りたいたので轉轉として移り歩いた。ロンドンに行つては滞在も短かゝつた爲でもあるが、一ヶ所に滞在してゐた。其處は日本最負の家庭で、數人の日本の留學生が絶えず居た所である。日本の紳士として大いに我々に敬意を拂つて、女主人が夕飯の時には着換へをして食卓についたものであつた。

私は西洋諸國の人情風俗といふものを觀察するのを以て、在外中の一つの大きな興味としてゐたのであるから、ロンドン滞在中僅か一ヶ所であつたけれども詳細に、この老婦人の行爲に絶えず注意を拂つた。さうして私の結論は次のやうなものであつた。この老婦人は如何にも我々日本人に對して懇切であり、又充分な敬意を表してゐた様に見えるが、愈々の場合になるといふと、「日本人は一段下等な國民である。我々英國人は日本人とは異つた優秀な國民である」といふ優越感と矜持を持つてゐた。此は其處に三四ヶ月ゐた間に私の充分に體驗した所である。

前に述べた如く、獨逸の都會に於て七ヶ所の下宿に轉々としたのであるが、その一ヶ所は英國婦人の處であつた。此處で他の六ヶ所の獨逸人家庭と異なつた感じを既にうけてゐた私には、ロンドンで全く自分の觀察の正當であるといふ事が裏書された感じがした。英國人は個人として相接して見ると、實に見上げた性格をもつてゐる事を深く印象せしむる。その公德を重んずる點に於て、その圓滿なる常識の發達して居る點に於て、人をして自ら敬意を表せしむるに充分である。この點に於て英國人を敬慕の餘りロンドン滞在中の同胞の中には我々自身を一段と卑下して得意になつて居つた人さへあつた。

然し肝心なせつばの所に行くと、何時の間にか我々は一段下等な人間に取扱はれてゐるのである。一代の英傑ビスマルクが「英國人は個人々々に於ては實に立派な紳士である。然し紳士の集團である英國々民としては紳士道に遠ざかる事甚しい。」といふ感想をしてゐる。大小の違ひこそあれ、英傑ビスマルクも私と同じやうな場面に出會つたものと考へ苦笑せざるを得ない。

確かに英國人は「世界に於て最も優越なる國民は我々英國人である。」といふ優越感に飽和してゐるものと考へざるを得ない。今やこの自稱優越國家は一大危機に頻してゐる。この英國民の危機に頻して狂氣の如く之を救はんと焦つてゐるのが、北米合衆國である。米國々民は何でも世界

一をもつて自負してゐる。事實又世界一に位する幾多のものを持つてゐる。この幾多の世界一のものを持つてゐる米國と世界一優秀の民族を自負してゐる英國とが、相擁して今日の世界廻轉期に立たんとしてゐる。

彼等が自負してゐる事は、果して幸福又賢明なるものでありや。我々日本人としては何でも世界一になり度いといふ理想を持ち、而して其信念の許に不斷の努力を捧げたい。理想といふものは未だ達せられない先の事である。我々は世界一の民族であるといふ優越感に満足するよりも、優越民族になる理想の下に勇往邁進したい。何でも世界一のものを作爲したいと云ふ理想をもつて進み度いのである。

之を小範圍に考へて見れば、我が横濱高工は日本一の完備した偉い高工であると考へ度くはない。現實には満足出来ない、日本一の高工になり度いと云ふ理想のもとに我々は努力奮勵し度いのである。言葉を換へて言へば、油斷は大敵で、満足は墮落である。殷鑒遠からず其實例は眼前に展開しつゝある。

忠君に精進せよ

封建の昔に於ては、皇室に對する忠、又諸大名に對する忠と云ふものはいづれも特殊の階級によつてのみ實行されるべきもので、即ち公卿や武士の階級に屬して居るものに限られて居つた。所謂百姓町人が忠を盡したくとも、盡すべき手段が無かつたのである。

然しながら、忠と云ふものが、大和民族の嘆美し、禮讚する最高の目標であつた事は疑ひの餘地がない。故に我國史上に表はれて來る和氣清麻呂であるとか、楠、菊池の一族、或は赤穂義士の如き、いづれも國民の禮讚の源泉であつて、千載のもと世道人心を維持し來つた所のものである。

維新以來忠君は 天皇に奉すべきであつて、全く一元に歸した。即ち一君萬民にして、所謂陪臣と云ふものがなくなつたわけである。同時に又忠君を勵むべき階級は、四民平等となつたと同時に、階級的の專賣ではなく、帝國臣民は優劣なく、忠君に精進することが出来る境遇に置かれたのである。

昔に於ては、君の馬前に戦ひ、君の馬前に死すと云ふことは忠の最も大なる現れであつた。今日に於ては忠君は、一層擴大されたものと考へられる。天皇は統治の大權を掌握せられて、國民を統治し給ふのである。畏れ多くも 天皇統治の御事業に御加勢申し上げる事は取りも直さず、忠君の行爲と考へねばならぬのである。

これに反して、天皇統治の御事業に妨害を加へるとか或は御事業を毀損するが如きは不忠の行爲と云はねばならぬのである。例へば我々技術家が、小にしては機械の或部分を發明し、或は改良し、民衆の福利に貢獻し、引いて我國の工業を繁榮に導くが如き、技術上の成功は、取りも直さず忠君である。之に反して、粗製濫造を以て品質を落し、引いて貿易上の阻害をなすが如きは正しく不忠の行爲と斷ぜねばならぬと考へる。

由來我國は萬國に比類のない有難き國體を享有して居る。而して、又最も秀いでたる忠君の國民であると自覺して居るのである。

然し何處の國民をもつてしても、それ相應に忠君を盡しつゝある事が見られるのである。君主國にあらざる國に於ては、それに代るべき祖國愛を持つて居る。

かく見る事に於ては今日支那に於ける抗日戦にも、スペインの内亂にも、歐洲戦にも、祖國愛

の發露と云ふものは至る所に見られる。

ただここに一言したき事は、世界無比の國體と忠君を誇る我帝國は古今未曾有の現下の時局に際し、以上述べた忠君の意義に於て果して平素の矜持に恥づる所なきやと云ふことである。大陸に出征して、聖戰既に三年我幾百萬の將士が、嚴寒酷暑とその他の苦痛を耐へ忍び、身命を忘れて戦ひつつあるその忠君愛國の行爲は、正しく我國體の精華である。

顧みて、銃後の我々は之と對照して、果して恥づる所なきや否や。忠君は機會均等である。銃後の我々は果して、大陸の將士に恥ぢざる意氣を以て相呼應して精進しつゝありや。試みに今日の日常生活について、薪炭、米、砂糖の問題を始として、マツチ綿布類その他總ゆる日常品について、並にその供給消費の有様は面を掩つて、恥づべき不忠の行爲を實行しつゝあるやうに考へられるのである。

今日我々は、何事かにつけて、集合すれば、宮城の遙拜、默禱を以て終始する。實に帝國臣民としての良風である。然し日常の行爲を見れば、我政府の訓令する所の物價物資の政策に於て全然統治に背いた行爲をなしつゝあるに對照すれば、以上の良風も一片の形式にすぎぬと思はれても、何處に辯護の餘地ありやと云はざるを得ないのである。

滅私奉公と云ふことは時代のスローガンとして大聲叱呼しつゝあるが、國家統制の裏に蠢動しつゝある個人主義と自由經濟を見れば何處に滅死奉公の存するや時局は益々進展するにつけ、東亞に於ける状態は、所謂千載一遇の好機が彷彿として又澎湃として我々に迫りつゝある。同時に舉國一致、一糸亂れざる國民の物精兩面の統一を緊要とする状態を呼びつゝある。

天皇統治のもとにあり、畏れ多くも 天皇統治の御事業には寸分たりとも御加勢を申し上げ、寸毫たりとも不忠の行爲をしてはならぬと云ふ一般國民の覺醒はこの際最も緊要と考へるのである。世の教育家よ忠君に徹底して青年子弟を指導せよ。

(一五・七・一〇)

道德政治と法治政治

凡そ一つの國家を統治するに、徳を以て治める道德政治をとるか、又は法を以て治める法治政治をとるか、此の二つのものは政治の目標とならなければならぬ。道德を以てする政治は、人民を悉く善良なる人として之を取扱ひ、法を以て治めるものは總ての人民は悪人であると見て居るのが建前であらう、と考へられる。總てが善人であるから、法を嚴にしなくとも、各自の善良

なる意志によつてお互に獎勵鼓舞して、國自ら治る。法を以てするには、總てが惡人であるから何人も其の惡を遂げしめない様に、法を以て之を統御するのである。我國としては、生ける神様である。天皇を元首として戴き國民は陛下の赤子である。故に道德政治が其の第一義であり、法は此の道德政治を助ける所の第二義的のものでなければならぬ。然るに維新後、政治社會等各方面に輸入した制度は、専ら法治國の外國制度であつた。道德政治が第一義であるといふ事を等閑にして來たのが、今日の時弊を作り來つたものと見なければならぬ。

此の非常時に於ける日常生活の暗黒は、全く道德政治を第一義として居る點から見れば、非常な矛盾であり、又我々國民の恥づべき事ではなければならぬ。即ち法は設けてあるけれども、法網疎にして凡てを洩らし徹底して居る所はない。道德政治は廢れて暗黒の状態を呈してゐる。双方とも、徹底して居ない事は夥しいものである。今日之を急に回復すると云ふ様な事は、或は盜人を捕へて繩をなふに類するものであるかも知れない。しかし我々國民は、此の點に眼を醒して辛抱強く、之を、下は幼稚園より上は大學に至る迄教育の總てを通じて、先づ國民の教育といふのを再建する必要があると考へるのである。

今回の政變により、颯爽として立つた近衛内閣は、文教の首腦として今迄に無い型を破つて一

直轄學校長を採用した事は、確かに刮目すべき事であり、又我々の期待も甚大である。新文相は科學振興を強調して國防國家に大貢獻を企圖して居るが如きは、何人も心強く感ずる所である。

然るに中等學校への入學考査の問題を提出して、多年言ひ古した所の事項を蒸返して、世間の話題にするが如きは其の志の奈邊にありやとにかく私としてはがっかりする。文相は宜しく、我國の政治の根本に教育のある事を認識して、道德政治の基礎を確固不拔の上に建設することを教育行政の第一義として従來の方式とお題目に墮せず勇往邁進してもらひたい。

敢て進言する所以である。

(一五・七・三〇)

ス パ イ 問 題

今日の新聞を見ると、全国各地に於てスパイの嫌疑を以て外國人が相當多數檢舉されたといふ、大々的の記載がある。まだ真相は判つて居らないが、ロイター通信の在日本の首腦者が取調中自殺したといふ事によつて、相當其の範圍も、又スパイ行爲の重大さも察せられるのである。此のスパイ行爲を意識的又無意識的に、助成した同胞も無きにしても非ずといふ事は、新聞記事によつ

て略察知される所である。而して當局としては、外國人と連絡のある經濟團體、宗教團體、思想團體、其の他のものに對して、警告を發して居るのである。

かういふ事は、既に早くから私共の想像して居つた處である。只外國に對して遠慮深い我國として、控へ目にして居つたに過ぎなかつたと思ふのである。世界の形勢が歐州戰爭の推移と共に急轉直下した結果、今回の檢舉になつたものであらうと思はれる。

日露戰爭の際に、露西亞が其の頽勢を挽回せんとして、バルチック艦隊を擧げて極東に派遣した。艦隊が北太平洋に入るに従つて、露西亞のみならず世界の注目は、此の艦隊の行動に集中したが、日本艦隊は何處に待受けて居るや、之に關して片言隻句も世界は聞く事が出来なかつた。

日本艦隊の所在は、十ヶ所以上の場所を指摘せられて色々なデマが飛んで居つたものである。遂に對島海峡で兩軍が遭戦する迄絶對の秘密が保たれたのである。これが日本國民の忠君愛國の表れとして世界の人々を感動せしめたものである。勿論、東郷艦隊が朝鮮の南海岸、馬山浦の附近に於て毎日演習をしつゝ待つて居つた事は事實である。少くとも日本人の一萬以上の人が此の事實を知つて居つた。開港地に居住して居る所の外國人及び、外國の新聞記者も少からず居つたのであるけれども、此の秘密が保たれた事に鑑み、私は今日の情報を見て感慨無量である。

由來我國民は外人に對して媚態が過ぎる。今回の物資配給にしても外人には我々よりも約三倍の砂糖をなめさして居る。當局者からして外人には甘い。此觀念から脱却しなければ如何に國民が忠君愛國であつても無意識のスパイ行爲は永久免かれまい。

(一五・七・三〇)

諸君の歸校を迎へて

二ヶ月間の夏休暇を終へ、多數の諸君が或者は滿洲支那に渡り、燒くが如き炎熱に國家奉仕の勤勞をしたり、大陸出征將士の勞を犒らふたり、或は内地に於ても同様に身心の鍛鍊をして彌増さる健康體と、洗練せられたる精神を以て歸校せられた事を慶賀致します。

私は老齡の爲と病後の故を以て、此の夏の間何處へも出ず全く家に蟄居して居つた。然しながら此の二ヶ月の中に充分の説明を加へる事は出来ないが、世間は物資の外に何物か非常に變化したものがあつた事を直覺せざるを得ない。私には何等か其處に或力が動きつゝある様な氣分がされてならない。今後更に一、二ヶ月を経過するとどう言ふ變化が又起つて來るかと言ふ事に特に關心を持つて居るのである。此が我國に大いに利益になり、又祝福すべきものであるといふ事を心

から祈らなければならぬ。

今日の非常時が過去何年間に於て諸君を鞭撻感激せしめたものも數々あつたらうと思ふ。此思ひ、彼を思へば諸君の若き血が沸かざるを得ないであらう。然し乍ら此を全國的に見渡して見ても、青年學徒の胸中に私が潜在してゐると考へて居る忠君愛國の至誠が、何處に發露して居るかと言ふ事を遺憾ながら發見するに苦しむのである。僅かに當局の教へた勤勞奉仕、其他一、二の事に外ならないのであつて青年學徒諸君が自發的に奮ひ起つて非常時に對する發奮の形跡を見る事は出來ない。

今回文部省から達せられた訓示を見ると、或は映畫見る可からず、女の給仕するカフェー、又茶屋に立入る可からずと言ふ様な事が強要されて居る。正に青年學徒にとつての大恥辱であると感ぜざるを得ない。

征戰三年人未だ歸らず。消極乍ら青年學徒の自肅自制の至らざる、かくの如きに至りしかと言ふ事は實に嘆息すべき事である。況んや百尺の竿頭一步を進めて、積極的忠君愛國の至誠の發露なきに於てをやである。

私が六ツ川夜話に於て屢々唱へたる事變に直面する青年學徒への希望は、未だ何れの所に於て

も實現されてゐる所を見ない。今日は學校内に於て、學生の本分を守つて居れと言ふ様な生やさしい時代ではないと私は堅く信じて居るのである。試みに支那に於ける抗日思想が青年間に瀰漫してゐる事や、獨逸に於ける愛國の精神が學生間に燃えてゐる、その實狀を見るならば思ひ半ばに過ぐるものがあると思はざるを得ない。

文部省に於ては校友會を解散して報國會と云ふ様なものを作れと言ふ事を聞くのであるが、我校には十數年前既に校友會の別途として報國團體である大陸會が存在してゐるのである。傳統的に今日の國策に副ひつゝあつた我校の校是を諸君が直視するならば安閑として所謂象牙の塔に籠詰せらるゝ時期ではなからうと私の期待止まざる所である。暑熱去り心身共に益々健康の季節の新學期を迎ふるに當つて、大いに諸君の活動を刮目して待つ所以である。(一五・九・一〇)

新體制に就いて

國民が待望して居つた新體制に關する近衛聲明は八月二十八日に發表された。之を讀んで見ると第一に東亞の新秩序の建設が唱導せられて居る。而して此は未曾有の大事業であるとされてゐる。

る。

東亞の新秩序の建設は今次の支那事變と離るべからざる關係を持つてゐる事は申す迄もない事である。新秩序の如何なる物であるかと言ふ事は、此處には何等明言して無いが恐らくは九ヶ國條約を始め極東殊に、支那に關する諸條約を廢棄すると言ふ様な事は、第一着の事業であつて進んでは、日滿支の經濟提携を初め其他軍事や文化に迄及ぶ所のものであらうと考へられる。而して新體制の目的とする所は國家國民の總力を最高度に發揮して、此大事業に集中し如何なる事態が発生するとも獨自の立場に於て迅速果敢、且有効適切に之に對處し得る爲に最高度國防國家の態勢を整へると云ふ點である。

高度國防國家の態勢を造り上げるといふ事には、智識階級には其の意味が明瞭であるが、大衆には或は漠然として所謂ピンと頭に來ないと言ふ點があるかも知らない。然し支那事變以來、例へばバネー號事件の始末は如何であつたか、何故に廣東攻撃が遅れたか、海軍の支那沿岸封鎖が言葉の如くに嚴重に實行出來たか、天津問題が何故にかくも長い間不徹底であつたか、又對米外交はどういふ様に推移したか、此等の事實を良く詮議して見たならば、此處に始めて政府の要路も國民大衆も如何に我々は臥薪嘗膽せねばならぬかと言ふ事が良く理解でき、何をおいても此の

高度國防國家を確立せねばならないと言ふ認識に達し得るかと思はれる。

又此の高度國防國家の建設の爲に、此處に萬民翼賛の國民組織、即ち時勢の推移新體制樹立の意義が鮮明になつて來ると思ふ。此の國民組織の目標と言ふものは、國家國民の總力を集結し一億同胞をして生きた一體として、齊しく大政翼賛の臣道を全うせしむると言ふ事になるのである。此の國民組織が完成される爲には、政府の聲明に於いては、國民運動が必要であるとしてゐる。而してかくの如き運動と言ふものは國民の間に自發的に醸成し來るべきものであつて、本來であるならばそれを希望するのである。然し現下の非常時であるから、其の自發的の發生を期待するには餘りに待遠しい。其れ故に政府自身が此の運動を計畫して又指導するのである。かくの如くする事は、國民の自發的發揮を妨げる恐れがあるが餘儀ない事であるとしてゐる。

かくの如き政府の期待と言ふものは、此を吾々の學校に就いて考へて見ると吾校是に一派相通じてゐると言ふ事を感じざるを得ないのである。その具體的事實は吾々一同の良く知つてゐる處で此處に此を叙述する必要を見ないのである。

私は此の新體制聲明を再三、再四熟讀したが實に其の文章と言ひ其の意義と言ひ近代の大文字であると考へる。事實我國策の不徹底、思想の混亂總てが此の新體制の國民組織の確立に依つて

清算せられ、一路邁進東亞新秩序の大事業の達成に始終せん事を希望して止まない。

諸君としては吾校の校是が創立以來既に此の新體制の軌道に乗つてゐたと言ふ事を體得するならば、一層の靈感を得て大政翼賛の臣道を全うするものと私は十分の期待を持つものである。

(一五・九・二七)

噫、渡邊勝三郎氏

宮中顧問官、渡邊勝三郎氏は病氣にて去る二十四日逝去せられ、本日青山齋場にて其の告別式が舉行された。

渡邊顧問官は會て横濱市長であつて同時に我校の商議員として多大の盡力に預つた。然も其は大正十二年の關東大震災に際してゞあつて、當時の横濱市長の勞苦と言ふものは筆舌に絶するものであつたらうと思ふ。我々の學校も復興迄の間、名古屋に移轉せよとの文部省の命令を受けて厄介千萬の時であつた。九月二十五日の私の日記を繙いて見ると次の様な文句がある。

『午後市役所に行き市長渡邊勝三郎氏に面會し高工復興に就き文部省の意向を開陳す。市長、曰く「若し本省が強硬に移轉を命令せば如何にするや」と、余、曰く「辭職あるのみ」と。市長、

曰く「然らば市會に提案して移轉反對を議決し本省に陳情せん」と。夕方市役所を去る。中秋の名月皎々として焦土の市を照す。徒歩にて歸る。」と、かくして我校は渡邊顧問官とは忘れ難き因縁を持つてをるのであつたが、不幸にして今此の人を失つた。

往事を追懷して此處に謹んで哀悼の意を表す。

(一五・九・二七)

日獨伊三國條約

去る九月中旬の六ツ川夜話に於て、私は諸君の歸校を歓迎すると同時に、此一二ヶ月の夏休中に我國の事態が大變化をした。更に今後一二ヶ月間に如何なる大變化が起つて來るかも知れぬ、と云ふ様な豫告をして置いた。

此には何等根據も理由もあるのではない。慌ただし此の非常時局に有名無名の政客策士が狂奔して居る態を見て居る私の様な閑人の黙想に直覺されたものであつた。

所が其より一ヶ月もたゞず僅か二週間にして突然九月二十七日の晩にラヂオ放送により三國條約成立のニュースを聞いて大いに歡喜した。そして又意外なる方面に於ける大變化を見て、一種

の満足を感じた。それは行詰つた陰鬱な氣分を全然一掃するには到らぬとしても、少くとも其れを大いに緩和し、國民をして其の向ふべき道を明らかに指示したことは確實である。

これまで我帝國は支那事變といふ所謂前古未曾有の大事件を取扱ひつゝ、一方英米の大なる壓迫を蒙りながら、其處に英米依存の清算を能くする事が出来なかつた。殊に米國に對しては蹴られたり踏まれたり殴られたりしても、猶米國の袖にすがりついて離れなかつたといふ様な不快な感じまでして居つたのである。他方獨伊とは、昨年先方から差し出した手を握りかけて此を躊躇し、以來つかず離れずで今日まで及んで來た。世界の強國混雜の間に立つて、國際的の日本の立場は甚だ以て曖昧なものであつた。

これが國民をして絶えず五里霧中の不安状態に置いたものである。然るにこの三國條約により敵味方が判然と區別され好むと好まざるとに關せず、此條約の進む所に我々は勇往邁進せねばならぬ運命に置かれたのである。

此の條約の締盟國は何れも聲明を發して、此が世界の平和を確立するものであるとしてゐる。その故は此條約の締結によつて、歐洲戰爭に米國の參戰する可能性を減滅せしめたものとしたのである。併しながら果して其の宣言の如く、米國參戰の可能性を緩和せしむるものであるか、頗

る疑問である。

由來英國人は傲慢にして且つ根強い國民性を有してゐる事は世界の人の熟知する所である。如何に歐洲戦争に於て打撃を蒙つても佛國人の如く容易に降服はしまいと思ふ。行く所まで行く即ち壇ノ浦までも行くだらうと思はれる。

此を擁護してゐる米國が如何に其國民が維多の民族の集合と雖も、何處までも本家の英國を助け、英本國は假令獨逸の上陸作戦によつて失はれても、その屬領を統卒し英米合邦の民主國を立て、行かうといふ計畫を持つて居るかの様である。この様な事から考へると或はこの三國條約はむしろ米國の參戰を可能ならしめるものがないとも限らない。

參戰とは歐洲戦争への參加、日米戦争の勃發を謂ふものである。それ故に三國條約は我々は喜ぶと共に、我國民に一層重大な責任が加はつて來たと見なければならぬ。矢は弦を放なれた。もとへ返へすことは出來ない。此條約に満足を感じるものも危険を感じるものも、又不滿を感じるものも、危険を感じるものも今はたゞ一心同體となつて、條約の示す方向に邁進し且つ此が活用を期する外何物もない。

再び新體制に就いて

今日東京の或俱樂部で新體制の大立物である有馬頼寧伯の新體制に關する講話を聞いた。

伯は新體制に於ける經濟や教育等は如何に取扱ふか、急激な變化は色々なる困難を伴ふ恐れがある。今具體的に如何にすべきかと云ふことは説明することは出来ない。將來、色々な事に關して諸君の御意見を承りたいといふ様な事から、所謂近衛聲明の一部を朗讀せられ、その箇所箇所に就て註釋を加へた。

私には別に何ら之と云ふ新しい物を聽き出すことは出来なかつた。謂はば、新體制に關する概念的の事とその經過に關する事柄に過ぎなかつたのである。然しながら、新體制を生み出した首腦者の一人から、直接に之を聞く事を得たといふことは概念であらうと何であらうと、私をして新體制をつかむに誠に良き機會であつたことを喜ぶ次第である。

私は此の春の頃、皇紀二千六百年の記念事業は我々國民が舉國一致、事變を本年中に片付けると云ふ以外に何物もない。天下後世に残す唯一最大の記念事業であると述べた。

所が、新體制が討議せらるゝ様になつて以來、國民の注意は殆ど此の新體制に傾注せられ、最大關心の事變が如何、切迫した國際狀勢はどうか殆ど忘れられた如き感をなさしむるので私としては非常なる憂慮を感ぜずには居られない。

有馬伯は又明治維新の話を取り出して伯の藩士であつた眞木和泉守の勤皇の運動を擧げたり、天下の志士が幾多の辛酸を嘗めて來た事蹟を陳べて、之を今日の新體制に照し合はせた。そうであるとするれば此の新體制の完成する迄にはまだ〳〵相當の歲月を要するといふ様に受取られないこともないのである。さうして斯くの如き運動は國民特に政黨の中から既に醸成しつゝあつたのであるが、之を速に完成さす爲にはどうしても政府の力を要するとして立上つたのである。且又總てに於て急變を起すことが最も注意を要するものとした。

斯くの如き考であるならば何人も此新體制に就いて、大なる不安を感ずることがなからうと思ふ。勿論我々は既成政黨の何れにも、猶又經濟や商業の組織、教育の方面に於ても、多大の不平があつた。

新體制は其等の點を是正して行くといふ事に關しては何人も異議の無い筈である。新體制では自由民主主義を敵の如く考へて居るとか、全體主義を謳歌して居るとか云ふ様な點には一言も伯

は觸れなかつた。世間で頻りに稱へて居る左傾の色が濃厚であるといふ様な事の辯護にも一言も費されなかつた。私は此の點に於て伯の説明に満足する者である。

なぜならば新體制は皇道精神の軌道の上に立つて居ることは當然であるからである。自由主義のあるものでも又民主主義のあるものでも、既成事實の皇道精神に考へて間違の無い物ならその儘にして差支がなからう。

新體制は事變を解決し高度國防國家を目標とするのであるから、此をほつとけほりとして國內の智能を擧げて組織に没頭してはならない。左様な生優しい今日ではない。教育にしても例へば校友會を解散して、果してどれだけの事變解決に火急直接の意味有りやである。朝夕雜踏時に電車や汽車に乗る人々を見よ。新體制が實施されたなら其日から其人々は公益優先、臣道實踐と云ふ人々に生れ代るであらうか。

新體制に順應する教育の狙ひ處はその邊にあるのでなからうか。此好機會に遭遇しながら惜しいかな狙ひ處が的をはずれて居る。文部省は新體制に周章狼狽して居るのではないかとの感がせらるゝ。最も私は老骨で頭が悪いから感違ひをしたのかも知れない。(一五・一〇・二三)

西園寺公を悼む

西園寺公は私の最も好きな政治家であつた。先般九十二歳で薨去せられたといふ事は誠に悲しむべき事ではあるが、かくの如き高齡を以て逝かれたといふ事は、一面からは又お目出度いことである。西園寺公の薨去によつて明治維新を思ひ出す舞臺が消え去つた感じがする。清浦、金子兩伯が尙健在であるとは云へ兩伯共に維新後の人である。公は慶應時代に既に山陰又北陸の鎮撫使となつて幕末の戦争にも従事したのであるから、全く此の維新の大業に貢献した生き残つた最後の人であつた。

西園寺公は生れながら聡明で非常に文化的な人であつたから、倒幕の戦争から京都に歸つた早、明治二年に既に立命館を起したが、治安に妨害あるとでも見たか、京都府がこれを解散せしめた。後年西園寺公の秘書であつた中川小十郎氏が公の志を繼いで今日の立命館大學を起したのである。公は外國に行つて勉強したいといふ切なる志を抱いて居つたが、明治三年に其の希望が達せられてフランスへ行つた。十年間フランスに留つて十三年に歸朝して、翌年に明治法律學校

を設立して自ら教育に當つた。これが今日の明治大學の前身である。従つて一生同大學の名譽教授として其の名を残して居つた。如何に公が文教に關心を持つて居たか、と言ふことがうかゞはれる。公は又確か二度文部大臣になつたことがある。私が初めて教授の辭令を貰つたのは、西園寺公で、私は公の署名に大いに満足した。フランスに於ける十年間の滞在は西園寺公をしていやが上にも文化人たらしめ、又新思想の先驅者たらしめた。

殿上人とはいひながら比較的貧乏であつた公は留學中全く平民的自由生活をした爲に歸つて來た後も其の流儀で横行闊歩して、直ちに東洋自由新聞といつた様な新聞の社長になつて、文化的平民的活動を始めた。廟堂の諸侯は驚いて忠告を試みたが之に耳を傾ける公ではなかつた。遂に明治天皇に奏上して勅命を以て、公を新聞社から縁を切らしめた。

政治界に於ける公の業績に就いて私の最も敬服したのは公の出所進退である。第一次西園寺内閣は積極政策が行き詰つた爲内閣を投げ出して、他の者をして其の行きづまりを打開せしめるのが最も公明な道であるとして、閣員の未練を残して引き止めるのも聞かず、公の一存で鮮かに退却をした。第二次西園寺内閣は二ヶ師團増設問題で鮮かな政戦を爲して退却した。其の後は第三次桂内閣で西園寺公の退却に共鳴した國民は、憲政擁護の旗をあげて二ヶ月足らずで桂内閣を

打倒した。今迄の多くの首相は退却振りが宜しくなかつた。進む時には鮮かで退く時に隊伍整々として敗軍の形をとらないのが名將である。西園寺公の退却は何れの場合に於ても名將の風格を残して居つた。晩年には唯一の元老として、死に至るまで忠節を盡して些かも耄祿の風がなかつた。

この好きな老公に、私は一度も面接する機会を得なかつた事を遺憾として居る。大正七年の夏の終り頃に、私の病妻が伊香保の温泉に靜養して小さな別荘を貸りて住んでゐた。其の隣りに同じ大さの別荘があつて、其處に西園寺公が避暑せられておつた。二週間に一度位の割で私は病妻を見舞つた。西園寺公の居られる家を垣の外から眺めると、明け放つた小さな座敷に時々公は端然と座して書見にふけて居た。外に出る時には五尺四寸の長さの煤竹の杖をついて出掛けられる。其の節が九つある。二十年來私が九節ある同じ恰好の煤竹の杖をついて在職當時は學校の教練又野外演習の時には常に放さなかつたのは好きな西園寺公の眞似をしたのであつた。其の時分に宿の主人の木暮氏に一體西園寺公は何を讀んで居られるかと聞いたら、此頃も貸本屋へ行つて「鼠小僧」を貸りて來いといふ事であつたから、其れでも讀んでいらつしやるのでせうと答へた。馬鹿の智慧は後からで公に接する好機を此の時に捉へ得なかつたことを今以て遺憾として居

る。公の和漢洋に亘る讀書の該博な事は世間に知られてゐることである。其の高き門閥の家に生れ名利と權勢の外に逍遙し恬淡枯槁能く高人の風格を完ふし、然かも四代の聖天子に仕へ勳功一世を空ふし、死して國葬の光榮を負ひ眞に古今獨歩の人たるの感あらしめた。

齡とは云へこの巨人を失つた事は國家の大損害といはなければならない。

(一五・一一・一一)

日米關係に就いて

今日、日米協會の主催で帝國ホテルで大使の爲に歡送會が催され、その席上、松岡外相は一場の挨拶をされた。

「卒直に云へば日米兩國關係は現在甚だしく緊張して居る。その原因は種々あるが、根本は日本の目的、抱負に對する米國側の誤解である。日本は米國及びその他の方面で考へてゐるとは正反對に、支那に於て貪慾を滿たす爲とか、又は侵略しようとか云ふ様な帝國主義的な戰爭をやつてゐるのではない。

米國民の一部は故意にか我日本の目的を誤解し、曲解して、日本の對米敵意などを云々してゐる

る、右は全く笑止の沙汰である」と。

これに反して米國大使グルー氏の挨拶は、松岡外相と個人的に親愛なる間柄、また米國大使と日本國民との親善な間柄を述べてゐるきりで、いさゝかも日米間に於ける國際問題には觸れてゐない。

これは昨年の夏米國が日米間の通商條約を破棄すると宣言して以來双方とも同じ申し分を繰返してゐる。

我國の對米外交に就ては、始終媚態的態度を續けて居ると云ふ非難がある。野村大使を送るに就ても、米國に親善關係を個人的に持つ者に對して、特に注意を加へてやつと口説いて野村大將を任命した事にもその一端がうかがはれる。兩國がお互に對蹠的の不動の方針をとつてゐる以上、何人がその任に當らうとも容易に親善の効果をあげることは困難なことであらうと思はれる。従つて大使の赴任は誠に御苦勞千萬であるとお察し申すより他はない。

米國は事變に關してはことごとくに我國に對して非友誼的な態度を取つてゐる。

事變が我國に有利に轉換しようとする度毎に、露骨なる援蔣行爲をしてゐる。南京の新政府を承認する條約の成立したその日に、一億弗の借款を公表した事は、數多き援蔣行爲の内でも狂氣

じみた感を我々に與へるものである。我方としては如何なる手段を講じても、日米親善と云ふ方
向には最早寸毫も考慮すべき餘地は無い。

唯重慶政府を徹底的に潰滅せしめるより他には何等の手段も方法も残されてはゐない。記念す
べき紀元二千六百年もあと僅か十日にして過去に歸し、新に二千六百一年と云ふ世紀の初年を迎
へんとしてゐる。

私は此の二千六百年の初頭に於て、二千六百年として天下後世に遺すべき最大記念事業は事變
を完結するより外に何物もない、と絶叫したのである。不幸にして事變はまた來るべき年に持ち
越された。

松岡外相は日米の關係は現在甚しく緊張してゐると云つてゐる。日ソ、蘭印の問題又佛印なら
びに泰國に關する問題も極めて重大なる關係にある。

國民は昨今の状態から見ると、殆ど非常時局に直面して居る事を忘れて居るかの如き感じがす
る。新體制即ち非常時局を乗切る爲の體制を作る事に、専心してゐると云ふ事は諒とせられる。
しかし陳腐ではあるが鹿を追ふもの山を見すと云ふ古き諺を考へてもらひたい。

大角大將の思出

明治四十一年の九月から私は文部省の留學生として獨逸のハンノヴァー市に滞在した。初めは唯一の日本人であつたが、其年の冬、陸軍大尉の大竹澤治さんがやつて来て二人になつた。

淋しい異國の空であり、特に長い陰氣な冬の夜は一層の寂莫を感じしめた。しかし一步街道に出ると全くの別天地で、長い間の平和は歐洲の都市を全く歡樂の境と化してゐた。二人ぼつちの我等は兄弟の様に親しみ、しばし町の不夜城を巡り歩いた。大角さんがハンノヴァーに來られたのが、翌四十二年の五月十六日であつた。當時伯林に大使館附武官として、海軍少將伊藤乙次郎氏が駐在して居つた。兼てからの知り合ひであつた爲、同少將から近日大角と云ふ海軍少佐が貴地へ行くから、宿所其他萬端よろしく頼むとの便りがあつた。

そこで私が知人であつた陸軍の津野一輔氏の居つた一家庭と懇意であつた爲、そこを大角さんの宿所として迎へた。これでハンノヴァーに於ける日本人は三人となり、翌四十三年の秋私が佛國パリに向つて出立するまで、約一年半に近い間親しく賑かに外國生活を續けた。其間大竹さん

には奇抜な逸事が相當あるが、大角さんには記憶に残る此れぞと言ふ様なものがない。

大角さんが到着してまだ間もない或日、大竹さんと二人で、市中に出て或商店で買物をした。所が其商店の主人が大角さんに向つて、あなたはマリニーへお出でになつて居ますかと聞いた。新米の大角さんはあなたは海軍ですかと聞かれたと想像して、得意になつて「然り」と答へた。兩人は其話を私に聞かしたから、私はそれはけしからぬ話であると、ハンノヴァアの先輩として私はマリニーの説明をした。マリニーとは當地の有名な寄席で其お得意は印度や亞弗利加の土人や黒ん坊の足踊りや綱渡りなどをする演劇場である。間違ひもなく、君達はその邊から來た旅稼ぎものと見られたのであらうと言つた。

未來の男爵海軍大將の大角さんが一方ならず憤慨せられたことは、無理のない事であらう。

風俗習慣の異なる處から又言語の不自由から、初めて外國へ行つたものは、色々な失策や、不作法を演ずることは、有り勝ちの事である。大竹さんは可なり數々のそれを演じた。大角さんは當初から、全く獨逸の風俗習慣に能く慣れて、少しの危な氣もなかつた。大角さんの到着の次の日に、その宿所を訪れたが、家庭の主婦は口を極めて大角さんの紳士的態度を賞讃して居つた。

一年有半の親しき交遊は私に大角さんは武人であると言ふよりも、寧ろ外交官肌の人であると

言ふ様な感を與へた。周圍の獨逸人にも同様であつたらうと考へる。

常識の圓滿な非常に頭腦の良い人で隣りに獨逸語に堪能になられた。

我々の學校が教練を實施した時には大角さんが海軍大臣で、津野さんが陸軍次官であつた。昔の緣故で雙方から色々教を蒙つたことは、私として實に力強い支柱であつた。津野さんは其後間もなく逝去された。大竹さんは將來の陸軍を背負ふ俊髦として、囑望せられつゝ少將軍務局長として十數年前になくなられた。

去る八日の夕方銀座で、辻賣夕刊の大角大將遭難の記事を讀んで、全く絶望であると落膽した。一昨年の初春の頃夕方から夜の十時過ぎまで飲み且つ話したが、親しき交遊の最後であつた。私に残る大角さんの有形の記念物は、私の邸内に奉祀する東郷神社の社頭に掲げた「東郷神社海軍大將男爵大角岑生謹書」の一篇額あるのみである。それにしても大角さんの東郷神社參拜の約を果し得ざりし事は、残念至極である。

太平洋には暗雲低迷して今にも疾風、雨を呼んで、怒濤の捲き起らんとする、もの凄き荒れ模様である。國民は我海軍を絶対に信賴して居る。我海軍には海軍傳統の精神がある。説明しなくとも、國民は能く承知して居る。東郷元帥は此精神の表徴として、神様となつて奉祀せられて居

る。私は大角さんから東郷元帥の事は幾度となく聞かされた。大角さんは東郷元帥に彷彿たるものがあつた。少くとも我海軍精神の傳統を承ける重鎮であつた。太平洋空前の大危機に直面して此重鎮を急に失つたことは如何にも痛恨事である。

大角大將の急逝に遇ひ、大竹將軍と二人の酒、私の葉巻、三十餘年前の若き時の獨逸在留の事を回顧して限りなき感慨に打たれるのである。

(一六・二・一四)

賀陽宮殿下の御台臨

去る十七日賀陽宮少將殿下には、親しく我高工に御台臨遊ばされ、學事を御視察に成つた。

殿下には昨年十二月に第一旅團長の御資格を以て、我校の教練を御査閲遊ばされたのである。

兩度の御台臨は我校にとつて無上の光榮である。特に去る十七日の御台臨は、殿下の御發意であつた事は、誠に恐懼措く能はざる所で、學校側としては一段の光榮と同時に大なる責任を感じる次第である。

殿下は特に各科の實驗室に御注意遊ばされ、學生の實驗、作業を一々細かに御覽に相成り、指

導教官からの御説明を御熱心に御傾聴下さると同時に、親しく學生に向つても直接に御質問遊ばされた事は、誠に有難き極みであつた。

抑々一國の強大といふものはその精神力と物資力との綜合であらねばならない。物資力は加工の力に俟ち、加工は工業の力に依るものである。然らば所謂高度國防國家なるものは、高度の工業國家と併立すべきものである。

四十年來の私の見聞を辿つてみれば、今日我國の工業はその規模の大なる事に於て、又その技術の進歩に於て、これを前代に較べて實に隔世の思を抱かしむるものがある。然し乍らこれを獨英米に比較してみれば、ある種の工業を除いて、尙大なる遜色のあるといふことは、残念ながら認識しなければならぬ。如何にしてこれを獨英米の標準にまで引き上げるか、こゝに我々工業技術家の大なる努力と覺悟を要する。のみならず、我國の有する特異性は、進んで獨英米の工業を凌駕し得る可能性も、充分に考へ得る餘地が存在して居るのであるから、そこに一段と我々に勇氣と希望を與へるものがある。

然し現状では尙心細き感がせられるのは如何にも残念至極である。試に今次歐洲戰爭に於ける獨逸の電撃戦を見て、如何に我々工業家は感ずるであらうか。

眼を歐洲まで轉ずるに及ばず、我々自身が戦つたノモンハン戦争の實狀を見て如何に感ずるか、畢竟するに、我軍需工業の未だ完璧に到つて居らないといふことを、つくづく感ぜしめるものがある。

私は軍部の著名な將軍連中の著書を、多くとはいはないが多少讀んだ。又この方面には平素注意をして居る。將軍連中の最も力を注いで祖述して居る所は、専ら精神的方面である。即ち皇道精神なり、武士道なり、大和魂である。一言の異議を挿む餘地はない、痛く私は敬服して居る。

即ち肉弾三勇士の如き勇猛無比の兵士の現はれて來る事は誠に無理がない。今次の戦争に於ては未だ隠れて居る事であるが、ノモンハンに於ては無数の肉弾勇士があつたといふ事は事實である。同時に又この上もない惡戰苦闘であつた事も事實である。

これら有名なる將軍連中の著書に「今日の戦争は高度の工業と離るべからざる密接の關係を有するものである。それ故に我々軍部は肉弾勇士と共に優秀なる拔群の工業技術家の輩出と相俟たねばならぬ。」と云ふ事を同時に祖述して貰ひたかつた。工業技術の奨励に關する言説は私は寡聞にして未だ何處にも見當らないのは残念至極である。又從來軍部に於ては、技術家に對して、これを待遇する事の厚くなかつたといふ事も事實であつて、有爲なる青年技術家は軍部に馳せ赴く

事を潔しとしなかつた。

今次歐洲戰亂及び支那事變に於て私は軍部が、この點に於て大いに認識を新たにした事であらうと思ふ。又是非認識して貰はなければならぬ。

殿下は金枝玉葉の御身にして軍籍に列せられ、親しく寒暑飢渴を兵士と分け給ふ事は、我々感激に堪へざる所である。その上に特に御心を工業技術に致され、我々高工の技術教育を御視察下された思召しには、深き御考慮のあることと恐察し奉るのである。この深き御思慮に我々は感奮努力、その責任を完うせん事を誓ひ奉る次第である。

(一六・二・二六)

責 任 感

日清戰役ももう五十年近くの昔の夢となつた。當時野戰衛生長官で、今尙九十幾歳の長壽を保ち、嬰鑠として生存せらるゝ石黒男爵は、戦地に出張して安東縣に入られた。時恰も第一軍の司令部は、安東縣に置かれて、山縣有朋公が司令長官であつた。石黒長官は直ちに司令部を訪問して、山縣司令長官に面會した。

貧弱な支那家屋が司令部に當てられ、山縣司令長官は其一室に、病氣の爲に横臥せられて居た。見ると、病司令長官は、一兵卒と少しも變らぬ半ばすり切れた毛布をまとふて、横臥せられてゐた。石黒長官は非常に氣の毒に感ぜられて、自分の携帶せし毛布と交換せられた。其すり切れたほろ毛布は、其後石黒男爵より記念として贈られ今猶山縣家に保存せられてゐるとの事である。處で公の病氣が、政府の要路に傳はり、又畏れ多くも 明治天皇様の聖聞に達し、いたく宸襟を御惱ましになつたとの事であつた。

山縣公は軍司令官として出征せられるに當つては、大なる責任と決心を以て、征戰勝たずんば、生きて還らずとの、堅き覺悟を持つて居られたから、何人が公に對して、戰地を引き揚げよと如何に勧誘しても、應ずる筈がなかつた。

そこで 明治天皇様は侍從武官と軍醫、他に内藏頭であつて後に關係となつた白根專一氏の三人を、山縣公召還の爲、戰地へ御派遣になつた。同時に公に對して次の如き勅語を賜はつた。

朕卿ヲ見ザル久シ今復卿ガ病ニカ、ルヲ聞キ軫念ニ堪ヘズ朕ハ更ニ敵軍全般ノ狀況ヲ

親シク卿ヨリ聽カント欲ス卿宜シク過カニ歸朝シテ之ヲ奏セヨ

山縣公は只病氣であるから、歸朝して養生せよ、とのみでは如何にも可愛想であると、そこで速

かに歸朝して敵軍全般の狀況を奏上せよとて、御用を仰せ付けられたものと恐察し奉るのである。實に天地極りなき大慈悲の顯はれである。

山縣公が此の優渥なる勅命に接して、感激極つたことは申すまでもない。今日に於ても、我々は此の勅語を拜して、何とも云はれぬ感激に打たれる。我國體の精華が、眼の前に表はれてくる。我々は我帝國臣民たることに、限りなき幸福を感じる。君臣水魚の忝なき恩命に、大君の爲に萬死を辭せぬ覺悟が湧き起る。公は十二月八日滿洲の寒い最中に、安東縣の司令部を後に出發するに當り

馬 革 裹 屍 元 所 期

出 師 未 半 豈 容 歸

如 何 天 子 召 還 急

臨 別 陳 頭 淚 滿 衣

の一詩を残して、擔架に病體を載せ、横濱丸の船室に移され、其月の十六日に宇品に歸着した。

私は先般徳富蘇峰先生を熱海に訪ね、清快樓上先生と相對して時局談に花を咲かせた。談偶々山縣公の以上の事蹟に及び、公の責任感、今日の所謂職域奉公の信念に深く感銘した。

其際先生は私の爲に以上の含雪公の詩を揮毫することを約せられたので、私はその出来るのを待つて居る。

(一六・三・一一)

日ソ中立條約

事變に於ける我國內政問題については、我々一般は決して満足しては居ない。然し乍ら外交に關しては我々國民が、大いに意を強うするに足る何物かゞ盛り上りつゝある感がされる。

その第一は昨年の九月に於ける三國同盟の締結である。此の同盟の成立した時には、一部の人々の間には不満を感じ、不安を抱き、又疑問としてゐたものであつた。本年に入つて泰佛印關係に我外交が乘出して見事に解決した。これらの事件も手傳つて三國同盟に對して國民の一致團結が、一層強化された様に感ぜられた。數日前、突然發表せられた日ソ中立條約は内閣がうつた外交第三番目の妙手である。今度は國民全體を満足せしめてゐる事であらうと思ふ。

滿ソ國境に日ソが對峙してゐるのは滿洲事變以來のことであつた。而してしばしば其の間に不隠且つ危険なる事件が勃發してゐる。最近に於けるものは吾々に猶耳新しい張鼓峰事件、ノモン

ハン事件である。これが爲に我兵備は滿洲に對し他方に支那事變を控へながら大なる犠牲を拂ひつゝあつた。世界狀勢は最近に大變化を來し、我國が南洋方面に向つて大手腕を振ふべく、千載一遇の機會が到來したのである。

即ち東亞共榮圈が更に大東亞共榮圈と情勢がふくれ出して來たが、いさゝか長鞭馬腹に及び難い憾みがあつた。當局に於ても夙に日ソ關係について深く考慮する所のものであつたものと見え、建川大使がソ聯に使用するに當り、北守南進に就き其意見の一部を洩らしてゐた。爲に建川大使の着任後何らかの協定が直ちに表はれるかの様に一部の人より期待されて居た。協定は豫期に反して顯はれなかつた。のみならず多大の疑惑さへ介在する様になつたが交渉は兎に角續いてゐたものと見える。協定の成立は雙方ともこれを希望する理由がある。しかしながら、お互ひ最も有利に解決をせんが爲に其の結論に達しなかつたものと見える。

松岡外相は無論此等の事を深く胸中に秘めて、歐洲訪問に出かけた事は事實に相違ない。歸路モスコウに立寄つて、ソ聯政府を訪問するや外國の使臣と直接面會した事のないスターリン自身が我外相と會見した事はソ聯にとつても一つの異例であつたらうが、世界の視線を引いた。之が即ち萬事を解決した鍵であつたらうと思ふ。何故にソ聯をして突如長い懸案をかくも瞬間に氏が

解決に導かされたかと言ふに、おそらくはバルカンに於けるドイツの疾風迅雷的大成功が原因して居るものと考へられるのである。外相の外遊は實に天の時を得たものであつたと考へる。

この條約の成立は我國の南進政策に對して自由手腕を振ふ事の出來る一大機會を與へたものである。此條約が成立したからと云つて、滿ソ國境に虎視耽々として相對峙してゐる兵備を引上げて此を南方に使用する事が出來るか否かと云ふ事は吾輩の伺ひ知る所では無い。しかしながら此條約を利用して、南方に躍進を計畫し得る幾多の方法が存在する事は明白なことである。此際我國は鮮かな南進策の手を打つ必要がある。芳澤大使などはくすくすに速かに引き上ぐるべきである。我國土と國民に必要な總てのものは北方よりも南方にある。此の點から從來とても南進國策を唱ふる人士が少なからずあつた。我國民は長い間隱忍自重して今日を待つたのである。

有爲なる青年諸君よ。大なる眼を開いて南方を凝視せよ。我校の校是の一つは開校當初既に南洋にあつたと云ふ事は、校の歴史を検討すれば諸君の眼前に直に表はれてくるであらう。此の機會に於て私は松岡外相並びに外務當局の諸公に、心からの敬意と感謝を示すものである。

馬と戦争

馬といふものは古來から戦場の華であつた。従つて馬の事に就いては勇しい記録が昔から數限りなく残つてゐる。

支那は建國以來、東夷西戎北狄南蠻と云つて、異民族と絶えざる葛藤の中に始終して來た。その中で最も苦痛に感じたのは北に居る異民族で即ち北狄である。萬里の長城は秦の始皇が初めて作つたものではない、既に春秋戰國時代から所々に築かれて居つたので、始皇は東の方山海關から西の方安西に至る迄つなぎ合せて、且つ修理してこれを完成したものである。

北狄の得意とする所は馬の使役である。彼等の騎兵が一度び長城を越えて押し來るときは漢民族の國家は崩壊したものであつた。其例は遼、金、元、清といふ異民族である。蜿蜒たる萬里の長城は支那の文野を南北に區劃する分水嶺である。北方の住民は遊牧の生活をなし、何れも馬を御する術に長じて居る。殊に蒙古人に至つては隣の部落迄行くのを一鞭と稱し距離の稱號にしてゐる。鞍上人なく鞍下馬なしと云ふ言葉は蒙古人の乘馬を形容したものである。

蒙古の中央アジアを征服したとき象を用ひてゐた事はマルコポーロの旅行記に記載してある。これは敵に大なる脅威を與へたとしてゐる。今日のドイツの巨大なる戦車の様なものであつたと考へられる。

日本に於ても同様で、戰場に於ける馬が偉大なる功績を残してゐる。山内一豊が一名馬を得て土佐の一國を贏ち得た事は人のよく知つてゐる所である。

日露戦争に於いても我騎兵隊、ロシアのコサツク騎兵など戰場に於いては大なる役目を果してゐる。乃木大將が金州城外の斜陽に馬を立てた事は、今も颯爽たる將軍の感慨とその面影を我々に思ひ起させる。然るに此所二三十年間に戦術といふものは全然一變した。一昨年以來歐洲大陸で戦はれてゐる戦争は北ノルウエーから南ギリシヤに至る迄平野もあれば山岳地帯もある。しかし騎兵の活動したことの報道はない。その最も活躍してゐたものは戦車の電撃隊である。歩兵が隊伍を整へて、てく／＼進軍した様子もない。歩兵も皆トラツクやオートバイや自轉車で活動したらしい。全く馬といふものは戰場から消え失せた感がする。

ドイツのヒットラーが政權をとつて以來、非常なる勢をもつて、國內に廣い道路を建設しつゝあつた事を耳にして居つた。これはまさしく鐵道の外に機械化部隊を國內の何れの方向に向つて

も四通八達、最短時間の間に、緩急に應じて大軍を動かし得る所謂高度國防國家建設の重點であつた事だらうと考へられる。今日全くその赫々たる功績を表はしたものと見なければならぬ。

この頃ある新聞で陸軍の將校連中の裝甲部隊に就いての座談會の記事を見た。その中に馬も尙戰爭に必要である、忽にする事の出來ない、馬術獎勵の文句があつたのを見た様に思はれる。もし軍部がさういふ考を持つてゐるならば、私としては戰爭に於いては門外漢であるが、我國の國防完成に於いて、いさゝか心細き感じがされる。

騎兵は最早過去のものであらう。しかし馬術は體育として、又趣味として、又尙武の氣を養ふ事に於いて、珍重されねばならない、獎勵せられねばならない。弓道と同列になる運命を持つて居る、随つて馬術も馬道と云ふ名稱になる日があるかも知れない。高度國防國家の建設を目ざすならば何等考慮する所なく機械化部隊に突進すべきであらうと思ふ。殊に自然科學の應用を天職と考へ職域奉公と心得る我々學徒に於いて然りである。

此所に我朝野が其認識に達し得るならば國策として全國何所へでも機械化部隊を輸送し得る大なる道路網の建設に着手すべきである。此は又同時に平和産業に貢獻すべきことは勿論である。

我々教育方面としては全國の學校の報國團に自轉車、自動車、オートバイの如き班を設けて、大

いに士氣を鼓舞す可きである。或は今日ギヤソリンの不自由を考慮する如きは、優柔不斷の消極的態度である。以て天下國家を論ずるに足らざる群少である。

所謂新體制が唱道されて以來既に一年になん／＼として居る。高度國防國家を目指して成程これなりと國民をして首肯せしめる具體的實行が何處にあるや。何一つも私には見えない。徒らに高度國防國家と云ふ御題目を唱へてゐるのに過ぎない。

校友會を潰して報國團としたのも畢竟高度國防國家を建設するの準備と見られるが、全國何所の學校に果して高度國防國家の建設にこれなりと首肯せしむる実績があるか。

弘陵の健兒よ、勇敢に戦へ。而して天下の難關を何れの青年よりも先んじて突破せよ。

(一六・五・四)

風雲兒松岡洋右

滿洲事變以來我國は絶えず非常時に直面して來た。國民は崎嶇荆棘の路を歩み續けて居る。こうした時代には、多數國民の中から、傑出した人物が起つて、國家が意識して居る方向に引張つ

て行つてくれそうに思ふ。誰かが大旗をかゝげて國民を其旗下に結合してくれそうなものである。昔から時勢が人物を生むと云ふが、果して然るや否や疑なき能はずである。

刻下非常時の解決すべき最大の目標は、勿論支那事變である。當局者は支那事變は、前途遼遠であるからとて、一層の緊張と自重を要望せられるかと思ふと、他の當局者は支那事變は、今一押しであると樂觀せられる。我々國民は全く五里霧中に彷徨する。

支那事變と云ふ前古未曾有の戦時に處しつゝ、又五里霧中に彷徨しつゝ、國運は日に月に進展して居る。不思議なことであるが、此は當局者の秀越したる爲ではなく、國民の卓越して居る爲である。皇室を中心として、確固不動の體制を持して居る爲である。此の卓越した國民に望むに秀越したる當局を以てするならば、如何に我帝國が潑刺たる生氣を宇内國際場裡に發揚し得るや、想像するだに、肉躍り血湧くの感あるのである。

畢竟するに、斯くの如き状態は我國民教育のもたらした結果ならんと、私は嘆息せざるを得ないのである。數日前文部大臣は、東京に於ける或模範的國民學校を、視察せられた。そして其記事が、視察場面の寫眞と共に新聞紙上に掲載された。それは國語の授業で、ガア／＼と云ふ家鴨の鳴き聲と、ヨタ／＼と尻を振つて家鴨の歩む文句を、兒童に一樣に口と手を當てゝその鳴き聲

を眞似させ、左手をお尻にまはして、其歩み方を眞似させて居るのであつた。私は其記事を見て長大息をした。しかし何も此國民學校の授業法を非難する意味ではない。只此と同意義の教育は國民學校以上の中等學校は無論のこと、高等教育にまで一貫して居る事に、思ひ及んで嘆息したのである。

卓越した國民の後繼者たる青少年には、將來拔群の政治家、軍人、教育家、藝術家、等々を約束する各方面の偉材があるに違ひない。併し今の様な學校教育では、其各自が持つて居る天賦の才能と、徳性を歪がめられずに、思ふ存分に發達せしめ得るであらうか。總ての青少年に對して家鴨の鳴き聲を一様に練習させ、その歩み方を眞似させて居るのである。迷惑をするのが、鳶や鷹の兒であらう。

教育の第一義は自覺である。訓練は第二義的のものでなければならぬ。國民が眞に自覺して奮起するならば、一絲亂れぬ統制は何事にも期し得られるであらう。國民に自覺を促す前に、當局者と教育家の自覺を期待する。

さて此の沈滞した陰鬱なる雰圍氣中に、突然一大光明を放つて國民を覺醒せしめた人傑は、外相松岡洋右氏である。特に日比谷であげた火を吐く萬丈の氣焰はそれであつた。由來松岡洋右氏

は情熱の人である。しかし我國四圍の環境は彼の情熱に壓迫を加へて居つた。然るに彼の外遊により獨・伊・ソの三大指導者に接して、如何に彼等が其國民を指導しつゝあるかの實際を體驗して、彼の情熱を最高度に熾烈し、歸來壓迫の桎梏を脱破して、萬丈の氣焰となり、五里霧中の我國民に少くとも其進路を指示した。

彼は慥かに當代唯一の風雲兒である。彼の先輩であり又師であつた明治大正の風雲兒後藤新平伯も、地下で喜んで居るであらう。弘陵の青年健兒よ、學校をして深山大澤たらしめよ。風雲を叱咤する龍蛇は深山大澤より生ずるものと知れ。

(一六・五・一三)

漢人と異民族

支那三千年の歴史は、其の隣接する異民族の爲に不斷の壓迫を蒙り、絶えざる鬭争を繰返して來た。其の間屢々異民族の爲に征服せられて居る。即ち宋、明は元及び清の爲に滅ぼされたのである。然しながら漢民族は國ほろんでも、ユダヤ民族の様に四散して流民とはならなかつた。ここに不思議な民族的威力を持つてゐることを示して居る。

漢民族を苦しめた異民族の多くは、北方のものである。この北方から来る壓迫に對して漢民族は、萬里の長城を築いてこれを防いだ。萬里の長城は、春秋戰國時代から既に存在して居た。しかし今日の様なものではなく、必要に應じてはなれなく、建設せられたものであつた。秦の始皇帝が始めて支那を統一した時分に東の方、山海關から起つて西、甘肅の安西に到る迄之を連続して完成したのである。支那の學者は萬里の長城の建設を以て、暴君の事業となして異口同音に秦の始皇帝を筆誅して居る。しかし今日から我々が考へて見ればこれは大なる國防計畫である。如何にも英邁なる大君主の雄大なる計畫と見て差支へがなからう。

此の雄大なる長城を以てしても、支那は長城以北に住んで居る異民族の侵略を防禦する事は出来なかつた。一度北方異民族の騎兵が、長城の一角を馬蹄に蹂躪するに於ては其の國家を支へる事は出来なかつた。

其の著しい最初のものには金であつた。金が北宋と多年北支の野で争つたのであるが、遂に其の首都、今の河南の開封が金軍の奪ふ所となつて、北宋が終をつげた。其の時分に金が如何にして此の北支を統治したかと云ふと、宋の宰相であつた張邦昌を立て、皇帝となして國號を大楚國としたのである。無論此の張邦昌は、北宋に在つて所謂親金派の頭目で始終和平論を唱へて居つた

ものである。

由來敵國に對して和平を唱へる者或は現状維持者には英傑が居ないのである。張も其類で皇帝になつて一層の無氣力を現し、大楚國は直ちに潰滅し、北支が又亂れた。金が再び之を平定して、其處に大齋國を立て劉豫を以て皇帝とした。劉豫も又北宋の大官で、親金派であつたことは無論のことである。金は武力に於ては漢民族に比べて卓越して居つた。然しながら文化の程度に於ては比較にはならなかつた。武力を以て漢民族を征服した金は一切の領土慾を持たないといふ事を聲明して大いに恩威を賣つた。即ち二度とも漢人を立て、所謂傀儡政府を作つた。

劉豫の在位八年間の治績を見ると、漢民族は金に對して恩惠を蒙つたといふ感激の形跡といふものは認められない。のみならず逆に金を利用して、屢々南宋に對して討伐軍を起さしめ劉豫自身の勢力を扶殖する事に務め、此が爲に金の財政を破壊し且兵力を消磨せしめてゐる。

これらが原因で金は減びてしまつた。金の後に來たのは元である。元は蒙古族で、彼等民族は馬を御する事は巧みで、且狩獵を生業として居つた。元は此の優秀なる騎馬を以て金を滅し、又南宋をも滅ぼした。到る處掠奪をほしまゝにして、恰も狩獵の興味を以て戦争をした。其の掠奪物を本國に持歸る爲に、戦争をしつゝ國力を發展させた。

然しながら元の世祖即ち忽必烈が南宋を滅ぼして支那全土を併呑した後は、うつて變つた態度をとつて、無辜の民は一人も殺さないといふ、所謂王者の態度を以て漢民族に對した。又漢民族統治の法策に於ても、黃帝無爲の政治に其の重點を置き、儒教の教義の普及に力を盡し、孔子の直系孔洙を求めて厚く優遇するの途を講じた。傀儡政權を以て支那を治めた金の卑怯なる態度を捨て、蒙古民族の責任を以て之に臨み、漢人は僅かに補佐役とするに過ぎなかつた。

支那が漢人の手に落ち、清朝が樹立せらるゝや、滿人は、金と元との前轍に鑑み漢人を治めるのに、清漢同等の立場に於て之を統御した。漢人の傳統的慣習を尊重し、些かも此を改易するの努力をしなかつた。唯、辨髮、易服令を發し、之を極端に勵行した一事のみである。漢民族は鞏固にこの風俗を改める強制命令に抵抗して、「我が首は斷つべし、我が髮は斷つべからず。」と悲憤慷慨死についた者すらあつた位である、この辨髮易服令の犠牲となつたものは六七十萬の多きに達すると云はれて居る。しかし此の一事は全く滿人が漢民族を征服する所謂改易の基礎を作つたもので、清朝三百年の統治を全うしたるものであつた。

異民族が漢民族を統治した事蹟を細かに研究すると今日の我々に教へる所のものは偉大である事を覺える。

ブレーション・トラスト

所謂えらい人の周囲には多くの場合にとりまきと云ふものが居る。それが色々な献策をしたり、樞機に參與すると、其とりまき連中をブレーショントラストと云ふ、しやれた名で呼ぶのである。

如何に多能な人でも、自分一人で大をなすことが出来ない、即ちブレーショントラストのある所以である。

東日の記者北野慧氏はこの頃「人間西園寺公」と云ふ書を著はした。北野氏は記者として西園寺公を受持ち、十數年間公の動靜を凝視した世にも珍しき存在である。

該著中に坐漁莊訪問客名簿なる一章がある。所謂西園寺詣での客人の訪問の時日と面會時間まで記入せられて居る。昭和四年から昨十五年公の薨去に至るまでに涉り、延人數は約千七百人に及んで居る。其内二十人近くの人々は、著者に依つて特別に記載せられて居る。公は稀に見る聰明な人で、其高邁なる識見と比類なき矜恃を以て、當代の第一人者であつた。西園寺公詣での幾多の名士が、公のブレーショントラストであつたか否やは、私には疑問として、限りなき感興を湧き

越さしむるものがある。

家康には南光坊天海と云ふ豪傑僧や、藤原惺窩、林道春と云ふ一代の碩學名儒が側に居つた。

これが三百年に近い徳川幕府を開き得た要素であつたであらう。天海にしても惺窩又道春にしても自己名利の爲に、家康にその道を講じたとは思へない。治國平天下の爲に虚心坦懷その誠を致したものであらう。

北條時宗には僧の祖元が付いて居た。年少氣鋭の時宗は祖元の禪機に觸れた。元寇の國難に身を以て當つた時宗の氣魂は、生死を超越したものであつた。

畏れ多くも古今の至聖 明治天皇の御側には元田永孚の侍せられたる事は、何人も能く熟知する處である。獨り我國のみならず、支那に於ても又然りである。然るに近來の狀態を見ると、權勢家の許に集るブレイトラストは、各其智能を傾けて獻策し、一旦其人をして志を得しむるに於ては、何等か權勢の割前にありつかんとする慾望家である。實業家に於ける、又資本家に於ける、ブレイントラスト皆然らざるはなしである。

彼等はお互に利用せんとしつゝある、彼等は利を以て集つて居る、誠を以てするのではない。それ故彼等のトラストは永續することは六ヶ敷く、忽ちにして悲慘なる末路、寂莫たる終焉を見

ることは常である。

徒らに資望のみを有し、定見と操守と勇斷を欠くものゝ周圍に集まるブレイントラストは、雑多な群少であることは想像に難くない。特に危険至極である。

さりとて私はブレイントラストを徒らに誹謗するのではない。鵝鳴狗盜の類も排斥するのでない。苟くも天下國家に志あるものは、一世の師表を求めて、之れに師事する衿懷を持たねばならない。徒らに名利の客を集めて目前の利害にのみ齷齪してはならない。

假令我々平凡人でも、平素眞に師事すべき人を得るか、さなくば千古の書を読み古人を友となす餘裕を勝ち得るならば、人生の至樂と思はれる。

(一六・六・一三)

菊池寛氏の提案に答ふ

全國から議員が東京に集合して五日間に互つて論議された大政翼賛會の中央協力會議は今日を以て終了した。

新聞紙上を最も賑したのは、菊池寛氏が提出した中等學校入學志望者を抽籤に依つて選擇しよ

うと言ふ問題であつた。高度國防國家を建設する目標を以て、此の時局に立案せられたものとしては、眞にのどかな感がせられ全く非常時局を忘れしめた。

さりとて私は此の問題を無用視するのではない。

抑々此の問題の由來は非常に古い。確な記憶は無いが二十年來絶えず教育界に於て論議されてゐるのである。然も今日に至るも、尙結論が得られない。それが今更協力會議に持出されても快刀亂麻を斷つ様な解決は得らるべき筈がなからう。

此の問題を徹底的に解決するのは、入學志望者に満足を與へるだけの中等學校を増設するより外はないと言ふ事は自明である。然らざる限り、又世人の考が今日の通りである以上、如何なる入學檢定法が提出され又試みられるとしても、到底満足なる方法には到達されぬであらう。

直轄専門學校に於ては、二十年近く前に、筆答試験を使用しなくとも差支無い事に決定してゐたのである。横濱高工に於ては其れ以來長い間筆答試験を課せずに入學檢定を行ひ來つた。現に縣立商工實習學校の如きは、眞正銘の中等學校であり乍ら、開校以來今に筆答試験を採用せずして、入學檢定を行ひ來つたのである。

或學校が多數の志願者から競争の結果、最優秀の入學者を選択せねばならぬとして努力する事

は果して適當な考へ方であらうか。此の事自體が既に新體制が自由主義を排斥してゐる方針と、全く矛盾してゐると考へなければならぬ。此處に私は多分の内省すべき重點が無いのではなからうかと思ふ。

話題を轉じて、學生々徒の處罰問題と言ふ事に就て考へてみたい。生徒の或者が許すべからざる罪惡を犯したとすると、多くの學校は之を放校或は退學に處して學校を肅清したと考へてゐるのである。

學校を追ひ出された學生々徒は、それで日本人たる事をやめて、外國人にでもなるならば兎に角、依然として日本人たる事は失はれない。かゝる學生々徒が社會に出てその害毒を流すと云ふ事を考へれば、どうしてこれを社會に追ひ放つ事が出来るであらうか。その様な生徒は家庭ともいふべき狭い學校の範圍に居る間に、徹底的の改心をなさしめねばならぬ。教育者はそれだけの誠ある親心、教育奉仕の熱と情とを持たねばならぬのでなからうか。

厳しい選擇をして自分の學校にのみ優良生を集め、他校に優良ならざる者を送つて得々として居るのであらうか。優良ならざる者を或程度の優良に迄引上げねばならぬのが、我々教育家の責任である。今の學校の經營者と言ふものは其の點に於て、全くの利己主義である。此の利己主義

を改めずんば、教育される少年子弟は利己主義ならざるを得ず従つて個人主義に傾く事であらう。

筆答入學試験は純真にして、又生氣潑刺たるべき國民學校兒童に對し、兒童生活を最も陰鬱にし又健康上許すべからざる大罪惡なりと、私は斷乎として反對するものである。止むなくんば、私は此處に抽籤と同様に、未だ曾て試みた事の無い一つの方法を提出する。其は國民學校で學んだ學課の中で、入學志望者が最も自分の得意とせる一科目を申出でしめ、それにつき筆答なり、口答なりで検定をする事である。検定者の方に於て、其の方法の繁雜な事、標準を定める事の困難に就て異議を訴へる如きは、教育者としての熱と誠と賢明を缺いてゐると思ふ。

總ての事は教育者其の人の如何に歸するのであつて、私は今の教育界を見て嗟歎する一人である。

(一六・六・二〇)

横濱帝國大學

幕府時代には我横濱市といふものは、さよやかな一漁村に過ぎなかつた。一度開港場として出

で来るや、その名は忽ち世界に知られて東京よりも名高い程になつた。従つて潑刺たる新進の氣分を持つた商人が、諸國から集つて來て忽ちにして大都會となり、横濱の基礎が確立せられた。そして當時我國の文化的施設といふものゝ多くは横濱を發祥地として興される様になつた。隨つて横濱の市民といふものは、専ら眼を海外に馳せて殆んど内を顧みるの暇がなかつた。

鐵道の交通が明治四年に、東京との間に開かれて帝都と指呼の間に近接した。金儲けに狂奔する結果、子弟の教育に對する施設といふやうなものには殆ど無頓着で、斯様なものはお隣り東京へ行けば澤山であると、所謂東京依存といふことは少くとも教育方面に於ては殆ど傳統的となつたのである。

横濱は我帝國に於ける六大都市の一つで、他の五大都市は何れも皆帝國大學を持つて居る。六大都市でない熊本、福岡、廣島、仙臺、新潟、千葉、札幌にも各帝國大學乃至單科大學を持つて居る。何一つ持たないのは我横濱市だけである。實に不均衡の甚だしきものである。今日に於ても尙我横濱市に大學のない事を怪しむものゝないのは奇怪と言つて然るべしである。私は大正十二年の大震災災のあと我横濱市に帝國大學の設置の必要を論じた事はあつたけれ共、聊かも顧みられなかつた。當時帝國大學を設置する先驅として醫學校の設立を希望したのである。近來こそ

横濱にも相當名醫が居るが、震災の當時に於ては誠に少なかつた。難病の患者が出て來るといふと、その診療の爲に東京から態々名醫を迎へるといふことは普通の事で、今に於ても尙然りである。醫者のみならず、他の方面の事柄に於ても同様であつて、例へば横濱にある種々の會合に講演者を聘するといふ場合にも講師たる名士はいつでも東京から聘せられるのであつて、横濱在住の學者又有識者は誠に少ないといふ事は之亦何人にも判つて居る事である。

文化的の色々な施設に魁けをした我横濱は次第に東京依存者となつて、さういふ方面に於ては全然落伍者となり今に猶其傾向を續けつゝあるといふことは、誠に残念至極と考へられるのである。私が震災直後に持つて居た感想は爾後二十年に近い今日と雖も同じである。

今日は多年の懸案であつた東京開港に關する難問題も解決せられ、又横濱が震災以後外債の爲に困難をして居つた問題も解決せられ一陽來春の好時節を迎へた。この邊で一つ横濱の市民も教育の施設に對して東京依存の觀念を脱却して横濱といふ誠に由緒のあるこの都市の独自の文化を建設する一大勇猛心を發揮しては如何であらうと思はれる。大學といふものは如何なる性質のものであるか、又之がその土地にどういふ影響を及ぼすかといふ事に關しては、此處にくどくしく説明する事を省略する。

横濱市の交通網の重點を地下に置くべし

極東に於ける我國の現状は、實に前古未曾有の重大非常時に際會してゐるのである。

然るに國民全體として此の重大時局を、眞に認識して居るかどうかと言ふ事に就いて、今も尙私是一片の不安を感じざるを得ない。陸海空軍の我武力的準備に就いては、全幅の信頼を捧げて居るが、銃後の國民が舉國一致を以て日常生活を實踐しつゝありや否や、疑ふべき事實が澤山存在して居るのを見る。

この際舉國一致の眞劍なる決心を促す爲には、私は我當局が國際關係の真相を今少しく直截簡明に國民の前に披瀝して、重大危機を明白にする必要を切實に感ずるものである。

同時に我帝國の地理的位置が多分に我々國民を油斷せしむるものでなからうか。我帝國のドーヴァ海峡が太平洋であり又日本海である限り、英國民の様に國防上焦眉の危険を感じないのが無理からぬ事でもあらう。

例へば我帝國の防空施設は即今如何なる程度のものであるか。我々銃後の國民にとりその最も

必要なる防空壕の如きは、政府が施設すべきものがあるならば、直ちに工事を起して之が完成に着手すべきである。民間の施設に俟つ所のあるものがあつたらば、その企畫を指示して直ちに實行に移すべきであると考へる。聞く所に依るとその計畫又企畫の如きは、既に定つてゐると言ふ事である。決つてゐるとするならば、何故に之を公表してその完成を促す事をしないのであらうか。

防空の講習會さへも開催したと云ふがその内容に至つては一般國民に知れて居ないやうである。こういう事が國民に公けにせられ、國民も又よつて以て防空の安全を期し得る設備を得るに於いては、時局の重大に處する十分の信念を得て、同時に各班の戰時状態に處する行動に、所謂一糸亂れざる統制を與へ得ることになると思はれる。

この機會に於て、私は當局に一言したき事がある。それは我横濱市の交通機關として櫻木町の省線を延長して磯子方面に達せしめることが、既定の計畫となつてゐるとの事であるが、かう云ふ計畫は此の際、早速に櫻木町なり又横濱驛から地下鐵を以てする事に變更すべきである。又市内電車の如きも成可く地下に敷設し電信線、電話線の如きも之を地下に埋める方針に改めて行つてはどうかと考へる。

たとへ今直に之を實行に移すことは出来なくても、その計畫を國防の爲に變ずると云ふ早速の

宣言によつてでも、如何に當局が國防の充實に經費を惜しまず、且國家の前途の爲に最關心事として、事件を取扱つて居るかと云ふ事を我國民に示し得るであらう。徒らに目前の利害に齟齬として、國家の發展國策の樹立に深い信念と根據の缺乏した事柄に奔命する事は、結局に於て大なる禍を將來に残すものであらうと思はれる。

(一六・八・二四)

軍教と報國隊

大正十四年の新學年から始めて學校に配屬將校が派遣されて、教練即ち軍事教育が實施されることゝなつた。大正七年に世界戦争が終つた後には、世界は全く自由主義が汎濫して英米のデモクラシーが支配した。その影響は無論我國にも波及して、甚だしきに至つては軍備縮小のみならず撤廢に逆行かんとする状態を呈した。従つて軍人の幅の利かない事は、實に甚だしいものであつた。大正十四年といへば戦後を去ることまだ六七年であつたから、陸軍と文部の合策である此の軍事教育を實行するに就いては、政府は國內の狀態に鑑み非常に遠慮がちの態度をとつた様に見えた。軍事教育と言はずして教練と名稱した事も實施の趣旨に於いて「學生、生徒の心身を鍛

鍊し、團體的觀念を涵養し、併せて國防能力を増進せしむる爲である。」としたのも、亦明かにその遠慮の態度を示した聲明ではなからうかと思はれる。即ち精神修養を第一義として、國防を第二義的のものと考へたものである。

我横濱高工に於いては、政府の訓令した趣旨の意味を、反對に解釋して居たのである。即ち學生生徒に對して國防上の觀念と訓練を與へる事を以て第一義とし修養を第二義的のものに考へた。心身の鍛鍊と規律と服従等を學生生徒に要求し、之を成就せしむる事は學校教育の目的の大きな要素である。之が學校に於いて不充分であるとして、我々は兎を脱いで軍門に教を請ふといふ筋合のものでない。しかしながら國防の一義に至つては、當時の世界狀勢を見て殊に兵器の進歩發達に鑑みて、どうしてもその智識訓練を學校の一學科として加ふべき必要を認める。教練即ち軍事教育は實に學校に對する政府の施設として、適切又緊急のものとして我々は之を歓迎すべきである。こゝういふ態度を以て臨んだのである。(本校一覽—第五年及第六年參照)

自由民主主義の世の中であつたから教練實施の當初に於ては、全國諸所の學校に於て相當の騒擾事件さへ勃興し、反對の聲も諸所に聞えたのであるが、一見放縱の様に見え又考へられる我々に於ては一糸亂れず、一小事件も醸されず當初から順調且確實なる教練の實踐を今日迄迎り來つ

たのである。教練實施後最初の野外演習が藤澤町附近で行はれた。甲府聯隊から速射砲などの兵器を貸與せられ、演習は頗る大袈裟に舉行された。撮影した其映畫は軍隊へも持ち行かれたり、又伊勢佐木町のオデロン座でも上映されたりした。

歲月は流れてそれから十五六年を経過し、時勢は一變した。あれ程迄に自由主義、民主主義を謳歌した我國は、今日に於ては全くその聲を潜めた。語弊はあるかもしれぬがフアツシヨ的ナチス的の世の中と變つて來た。英米でなければ夜も明けないと思つた我國は、國體明徴とか皇道精神とか臣道實踐とかにその目を覺ますことゝなつた。我々の學校は創立以來、忠君愛國と皇室中心主義を教育の根幹として遵奉して來た。決して空念佛的の又形式的のものではなかつた。それが爲には大陸發展の主義も掲げ、國防重點の趣旨も講じた。その他各種の施設も實行して來た。それ〴〵そこに信念と精神の必ず潜在してゐるものがあつたことを信するのである。

滿洲事變を蹶起として支那事變となり之が更に擴大して遂に世界事變ともなり空前の一大難局に我々は遭遇する様になつた。この機會に於て、今回文部省の訓令によつて全國に報國隊が施設される様になつた。この施設は正しく我が校が創立以來見透しをつけて來て居た重點で、而も大正十四年教練實施に當つて學校が聲明した趣旨と正しく合致するところのものである。かくの如き

施設は夙に教育の重責にある本省がとるべき途であるだらうと思はれる。遅れたりと雖も實施しない事に勝る事は萬々である。私はこの施設が學校と本省が全く一致して、勇往邁進この未曾有の難局に挺身努力、局面展開の一大動力とならん事を希望して止まない。

すべて何の施設に於ても其處に施設の精神といふものは儼然として存在してをらねばならない。その嚴然たる精神の大旆の下に集り、その精神を充分に把握して行かねばならない。徒に形式に墮する事の無き事を希望し一片の老婆心を呈する所以である。

(一六・九・一一)

三國同盟記念日所感

今日は丁度三國同盟締結の一週年記念に相當するので、色々な同盟に關する祝賀の催が東京に於て行はれて居る。我外相を始め獨伊大使等の祝辭があつた。之を讀んで見ると、夫々の立場で簡単な祝辭ではあるが味ふべき含蓄がある。

其の根底とする所は、戰禍を擴大しないと云ふ事と、世界に革新の新秩序を歐洲に於ても又亞細亞に於ても夫々建設しようと云ふ此の二點に存するものと見られる。同盟の狙ふこの二つの個

條は平行して圓滑に實行して行けるものであるかどうか。其處に割切れぬ矛盾が存在して居る様に思はれる。所謂外交的辭令で致方のない所である。

近衛首相が米大統領に向つて重大メツセージを發せられたのは八月二十八日であつたが、爾來丁度一ヶ月を經過してをるのである。其メツセージに對する返事が、若し到着してゐないとすれば、アメリカは怠慢極まるものと、我々は非難せざるを得ないのみか、我國の體面を汚すものと云はなければならぬ。何が故に近衛メツセージが發せられたか。又此處に到る迄の經過は如何なるものであつたかと云ふ事も、我々國民には一切知られてをらない。此の頃の新聞は、湖南に於ける長沙を目指した大攻略戰と、獨ソ戰爭のニュースと、國內體制の種々なる計畫の發表のみであつて、日米間の問題には一言半句もふれてをらないのは、殆ど不思議に感ぜられる程である。果して樂觀すべきであるか、或は危機一髪の危路に立つてをるものか、三國同盟が如何なる作用を此間になしつゝあるか、我々國民は最大の關心を持つてをる所である。

日露戰爭の時宰相は桂公で、明治時代の政治家は伊藤公であつて、此の兩公は必ずしも一心同體ではなかつた。その性格にても、その政治の行き方にも相違した點が多く相反した事もある。伊藤公は政友會を創設し、桂公は民政黨の創立者であつたと云ふ事のみを考へたゞけでも

知れるのである。然るに日露戦争が勃發し、宣戰の詔勅が渙發せられるや、公は直ちに伊勢の大廟に參詣して祈願をこめた。その參詣の途中からして、桂首相に懇切な書翰を送り軍國の事を依頼し激勵し且つ一詩を副へた、其の轉結に

虛心只願神明鑒

披瀝丹誠豈敢欺

と述べてをる。彼は大廟に於ては大禮服に威儀を正し地上に跪坐し、瞑目合掌して國難を無事に排除する様に祈つてをる。日露戦争も終末に至り講和條約が成否の岐路に立つた一夜、兩公深夜相會し、手を握つてさめくくと泣いてをつた劇的場面の事は、人に知られてをる所である。政敵であつたと見られる兩公が一度國難に當つては至誠國に報じて、そこに一片の私心の無かつたと云ふ事は、當時に於ける我が國民が、一億一心であつた事と感激させられる所である。

三國同盟締結の大立物松岡洋右外相は何故に去つたか知らないが、桂寇と共に病を輕井澤のグリーン・ホテルに靜養してをつた。一夜看護婦が目覺すと前外相は病床に跪坐して、瞑目合掌してをつたとの事である。大廟の神前に於ける伊藤公のそれと一脈相通する所があるか、私にはわからないが、今日の記念日に於て輕井澤の更け行く秋に病前外相の心は如何であつたらうか。

支那事變四ヶ年餘を通じて、其の間に横はつた幾多の難關を突破しつゝ今日迄奮闘し、國民に聊の倦怠の色なく、幾多の物資缺乏にも代用品を求め、或は消費節限を實行して、綽々として堅忍持久の體制を持續して居る。頼母しき限りである。しかし支那事變の此の重荷の上に、更に新らしき重荷が加へられんとして居るのが、息つまる昨今の狀勢でなからうか。

當局者よ、何處迄行かなければ、徹底した東亞共榮圈の確立と眞の平和が得られないかと云ふ事を知らしてもらひたい。只認識せよでは國民の認識が區々に分れる。當局者が今日よりも猶一層腹を割つて其眞相を明かにすれば、全國民が眞の一億一心の體制を見る事が出來ると信ずる。我々の敵は決して前途の困難ではない。長期の戦争に倦怠の色を示し、姑息なる平和を擱まんとするユダヤ人的卑屈心である。

(一六・九・二七)

昭和十五年九月廿七日聞三國同盟成立放送(舊作)

使近聲明救世艱

征人萬里未函還

秋風一夜電波急

三國締盟當外患

(近聲明者近衛聲明)

千載一遇の瞬間

私の様な老人は日清戦争でも日露戦争でも實地に見聞を経て來て居るものである。戦へば勝ち攻むれば必ず取つた。後から考へて見れば眞に造作のなかつた日清戦争でもその開戦前に於ては責任のある當局者は容易に決心がつかかなかつた。時の總理大臣は伊藤博文公である。

戦後は伊藤公もよく元氣の良い事を云つて居られたが初めはなか／＼左様ではなかつた。又時の海軍司令官も勝つ見込がないとしてその職迄も辭したのであつた。その最も恐れたのは支那が大國であると云ふ事と、鎮遠、定遠と云ふ日本にない主力艦があつた爲である。

日露戦争の時も同様であつた。時の總理大臣は桂太郎公で、やはり現状維持でどこ迄も戦争を避けると云ふ爲に忍耐に忍耐を重ねたものであつた。所が日清の時でも日露の時でも一つ忍耐すれば、相手方がそれに對して何等の交讓的態度を見せず、更に一段の壓迫を加へて結局は國家の存立を危険ならしむるに至つて始めて決意したものである。その間に先方が段々に準備を完成して來たものであるから、いよ／＼開戦と成つた時には不利の事が多かつた譯である。

事變以來英米は疑もなく露骨極まる敵性國家として我國に對して居つた。然るに我國としては此等の國家を、或は友邦の如く見做し頗る曖昧な態度を今日迄持續して居る。之には色々な事情が纏綿してゐる事に就て、我々國民は深く考へなければならぬ。

例へば一朝有事の時には鋼鐵材とか、或は液體燃料とかいふ様なものが絶対に必要である。所が鋼材製造の資料である屑鐵の如きものを、専らアメリカに依存して居つた。同様に液體燃料もそうであつた。

屑鐵がなくなると鋼鐵の製造は出来る。然るにその研究といふものを等閑に附して、最も容易で又最も目前の利益であるアメリカの屑鐵依存の外考慮する餘地を持たなかつた。液體燃料に於ても、南洋方面に於てその資源を獲得する機會は一再ならずあつたが、その度毎に其機會を逸して顧みず、最も容易なアメリカからの輸入に依存して安逸を貪つた。これ等は著しき例であるが獨り軍需品に限らず、他の方面に於ても同様である。

我々は外國に於ける學問の進歩や工業の發展と云ふ事に注目して、何か有利なる新發明とか特許とかが現はれて來ると、これを眞先に輸入して企業することを以て、重點と考へて居つたものである。即ち一言にしてこれを言へば技術の外國依存である。それが昭和の今日迄もまだ繼續し

て居ると云つても差支がなからう。如何なる代價を拂つても、外國の依存から離脱して國家の獨立を日常の生活、殊に國防の上から計畫するといふ誠意と熱心が、今までは缺けて來たと云ふ事は明白な事實である。これが今日に災ひして居らうと思はれる。英米依存といふ事は政治、經濟、外交、貿易其他の方面に於ても、以上と同様な事實が依存すると思ふ。依存の壓力と云ふものは可なり大なるものである。

明治、大正、昭和を通じて聰明であり胆勉であつた我國の學者及び技術家又企業家は、この長い間の英米依存の經驗からして、充分自主獨立の素質を獲得して居るものと私は考へ、この際大悟徹底すべき絶好の機會であると信ずる。英米依存精神のある限り、我國は威張つて見ても、トルコ、イランや泰國と類を異にするとは考へられない。我々は今大東亞共榮圈の大旗を押し立て、八紘一字を提唱しても、そこに何ものか割り切れないものがあるのは、傳統的英米依存精神の觸する處で實に遺憾千萬と云はなければならぬ。

この際上下一致一大勇猛心を起して、乾坤一擲日清日露の先人の跡を省みて大決心をす可く、然もこれを徹底的に推進する千載一遇の瞬間が今眼前に展開して居る。瞑目默禱神明の照鑑を待つ。

アメリカよ手を引け

内閣成立早々から既に政變の噂が傳へられた第三次近衛内閣は、十月十六日僅に三ヶ月の短命を以て忽然と倒れた。如何なる理由がかくも第三次近衛内閣をして短命ならしめたか其具體的事實は明白ではない。情報局の聲明によれば、是を以て國策に對する意見の不一致であるとして居るのである。果して然らば我々は啞然として驚かざるを得ない。

億兆一心とは我々國民は耳に胼胝の出來る程聞かされて居るのである。然るに閣僚諸公が一億一心の線に沿ふて居らなかつたのは實に憂慮に堪へない。

私の言ふ千載一遇の瞬間を第三次近衛内閣が解決をして呉れずに去られた事は誠に遺憾の次第であつた。然し今日としては既に過ぎ去つた事で徒に死兒の齡を數ふるに過ぎないのである。

その後迅速果敢に現れて來た東條内閣は世界各國に可成大きな衝動を與へたらしく、特に米國に於て然りであつた様に思はれる。是亦我々が寤寐の間に忘れる事の出來ぬ一大事である。所が其後アメリカからは、日本の外交は此の分ならば軌道を外す事は無からうとか、日米國交整調

の交渉を直に打切つて平和的解決を捨てると言ふ様な事は無からうとか、或は軍人及び官吏をして日本に對する挑戰的言論を封鎖するとか、或はウラヂオ經由の援ソ物資運輸を打切るとか、様々の對日緩和的事實が報道されて居る。斯ういふ事實から考へて見ると、アメリカが其の代償として、何物かを我當局に向つて請求しつゝある事も想像されないこともないので、實に我國にとつて危険千萬の事である。

米國が太平洋を越えて、南洋諸島に其勢力を扶殖し更に支那に渡り、あはよくばイギリス勢力範圍の後繼者を以て擬せんとする其の野心は我國にとつては生命圈の侵害である。

我帝國は其の國土の位置又其の國力よりして南に進展して行かねばならぬ運命を持つてゐる。即ち彼は東西に伸び様とし我は南北に發展しようとする。その兩方の進路は南洋に於て交叉して此處に十字架を作るのである。醫者が患者の爲に作る體溫表は順調な經過を取つてゐる場合は、脈數の曲線と體溫の曲線とは略々平行するが、脈が過大となり體溫が却て低くなる時には此の二つの線は交叉する。醫者は之を死の十字架と呼ぶ、所謂トーテックロイツである。

米國が今日執つて居る國策は我國の執つて居る國策とは正しく死の十字架を作るのであり、危険極りの無い衝突である。國土廣く物資足り然かも國の兩面に太平洋、大西の兩洋を控へて居る米

國が何を苦しんで、太平洋の果て迄伸び來つて死の十字架を作る必要があるか。アメリカよ宜く其の國策を改變中止せよ。然らずんば、我國は驀に南進して此の死の十字架を破壊すべきである。我々國民は東條内閣に、斷乎として此の死の十字架を排除せられん事を希望する。

東條首相は宰相の印綬を帯びるや否や一刻の猶豫も無く伊勢大廟の神前に、畏くも大命を奉たる報告をなしたる事は、我々國民の齊しく、其難局打破の決意の表顯として感激措く能はざ所である。若し名古屋驛頭にて首相が愛孫を抱かれた風貌の代りに、禮装の首相が大廟の神前砂の上に雙手をつかへて、天祖の靈前に至誠奉公を誓ふ英姿を、新聞紙上に拜することを得たらば、其感激は更に大なるものがあつたであらう。

東條内閣は決して短命であつてはならない。又斷じて第三次近衛内閣の延長であつてはならない。斷じて行へば鬼神も之を避くと。至囑々々。

(一六・一〇・二三)

青年よ目醒めよ

一家に大切な親父が急病にでもなると、忽ち一家が昨日と打つて變つた緊張味を生じて、醫

だ薬だと看護の限りを盡くす。容態が少しくよくなると春が来たかのように長閑な思をなし、反對に少しく悪くなると忽ち陰鬱なる空氣に鎖される。

一國家が他國と開戦した時も同様であり、その戦況の如何は直ちに國民全體の意氣を支配する。支那事變の當初に於ても然り。八月中旬の渡洋爆撃、續いての杭州灣敵前上陸、南京陥落皆その通りで國民全體に緊張の意氣滿々たるものがあつた。一年二年と段々歲月を經過した後の今日の狀態は如何。恰かも慢性病患者に對するが如き狀態に陥つた事を感じるのである。家の親父は慢性の胃病だ。死ぬ氣遣ひはない。が、病勢の一進一退は困つたものだ。而し何時かは恢復するだらうと云ふ様な感じをもつてこの事變に對してゐる様に見える。胃病患者だからとて胃散ばかりを飲ませて置けばよいと云ふわけではあるまい。必らず慢性にならしめた原因がある。其原因に對して根本的治療が必要である。今事變では英米がそれである。昨今の緊張は其根本的原因に就て手遅れながら手術の必要に迫られたからである。

爾來、我爲政者のやり方を見ると、時局に對して色々な計畫が目論まれ、各種の委員會が設置せられ、朝野の人材がそれ／＼配置せられ、其決議が法令、訓令となり、雨の如くにふり來るのである。而し是等の多くのものは聲の大なる割にその効果の顯著なものが少いのである。

徒らに動員されるのみで、官民共に眞剣に戦つてゐないといふ感じがする。畢竟慢性病患者に對する態度から來るのではなからうか。

私は何ら直接責任の衝に立つて居ないが、其門外から見ると組織や形式が總動員せられても、其實質は以前と大差ない様に見える。試に我教育界を覗いて見る。時局に即應する爲に校友會を廢して報國團、續いて報國隊といふものが作られたが、この兩者の間にどれだけの相違があるのか、又どれだけその効果が發揮されてゐるか知らない。

一體翼賛運動にしても、「國民運動なるものは國民の間から自發的に盛り上つて來るべきものである。政府自身が企畫指導することは國民の自發的總力の發揮を妨害する恐れがある。」と、當時の政府は實に賢明なる聲明をして居る。此の政府の聲明を考へて其後の教育會を見渡すと、文部省側へ對しても學校側へ對しても、門外漢の私は時節柄實に不滿に堪へない。

それもこれも皆文部省や監督官廳の命するまゝに企畫指導されて居る。何等學校側へ對して、自發的精神發揮の要求もなければ、又激勵の聲もない。徒らに兩者苟合して時局に對する形式の整調に没頭して居るかの様に見える。報國團や報國隊でお歳をめした教授連が若い學生の先頭に立ち號令を下したり、指揮をして居るのは如何にも意氣軒昂として時局色が濃厚に見えるが此が

果して教育の眞面目であらうか。特に實業専門以上の學校に於て考へさせらるゝものがある。

茲に門外漢である私の考へを露骨に且つ無遠慮に吐露さしてもらふならば、次の様なものである。抑も體力使用に關する報國的行動は若い我々青年學生自身で結束する、部長も班長も又隊長も我々がその任に當る。決して御老體を煩はすには及ばない。凡て我々の創意に、又我々の情熱から燃え上つて來る憂國の行動におまかせを願ひたい。至誠國に報するの機は即今なりと我々は信じてゐる。敬愛する我等の教授諸師には各々本來の任務がある事と信ずる。諸師は國家の至寶である。其研究の推進を以て、其學識の應用を以て、即今の時艱を救ひ、併せて將來の國運に大貢獻をして貰はなければならない。此が諸師の職域奉公の本領であらねばならない。此の本領發揮の爲には不眠不休の努力を願ひたい。此が又我々青年學生に對し師の無限の感化である。

今の教育界に何故に師弟相抱いて以上の様な情熱が湧き起らないのであらうか。時局に對する認識不足の爲か。將又教育制度の缺陷か、或は兩者の重合か。何れにしても新體制に於ける近衛聲明の重點の一部を閑却して居る事だけは事實である。企畫指導の命令のみは政府の誤謬である。命令服従の外に何一つの創意なきは教育界の無氣力である。

黒雲低迷波瀾萬疊の太平洋を睥睨すれば誤謬も是正するに及ばない、無氣力も嘆息するに暇が

あるまい、青年學生よ立て、立つて時艱克服の一役を背に負へ。

(一六・一一・一一)

日 米 交 渉

來栖大使を派遣して、ワシントンに於て日米交渉をして居る事は、獨り兩國民が緊張して居るのみならず、世界の視線を此處に集めて居ると言つて差支へがない。先頃の臨時議會に於て東郷外相の説明に依ると、日米國交整調に關する事は本年四月以來の事であつて大小の事項悉く論じ盡されて居る事であるから、來栖大使が彼地に於て折衝する事も、さまで複雑なものでなからうから、早く結末がつくであらうと言はれて居る。隨つて或一部では本月の二十日、或は二十五日が、其結末の期限であるとさへ噂されたものである、然るに、ワシントンからの情報を見ると、まだ一兩日では結末に到る様にも考へられない。外相の説明を概括してみれば、四月以來の談判であるから萬事は論議盡されて居ると我々は考へなければならぬ。

盡されて居るならば、既に野村大使が本年の二月からして任地に頑張つて居るのであるから、來栖大使を特派する必要が何處に在りや、と想像せざるを得ない。然るにも拘らず、大使を派遣

したと云ふ事は、文章を以てする代りに、いやが上にも鄭重を盡し、諾か否かを聞くの外は問題はなからうと考へられるのである。然るに大使が到着後數回に亘つて折衝を重ねて居ると云ふ事は、聊か東郷外相の議會に於ける説明と齟齬して居る處が有る様にも考へられるのである。

一昨年夏の初めであつたと思ふが天津に於ける英租界封鎖の事件が起つて、國民が非常に緊張した。英國は周章狼狽を極めて、其結果日英東京會談となつた。其時にアメリカが日米通商條約破棄を聲明して、英國援助の大鉈を振上げた。其以後、米國の援英援蔣の行爲は全く露骨になり日英東京會談も國民の不満足、又不徹底に終結して仕舞つた。

其當時歸任中であつたグルー大使は、我國に在任すること既に七、八年に及び、我外交界に信頼を博して居つた人であるから、條約破棄の聲明に對しても大使の手腕を我外交關係の者は大いに期待する處があつた様に見えた。

其九月に大使が歸任するや、日米協會が大使を帝國ホテルに招待して歡迎會を開いた其席上で大使は『日本は極東の變化した現狀を認識せよと要求せられるけれども、アメリカは法理に重點を置いて居る。九ヶ國條約不戰條約の如きは法理である。これは何處迄も放棄する事は出来ない。』と言ふ意味を強く述べたものである。此時からアメリカと日本は、其根本に於て相容れない原則

のもとに立つて居ることが明確にされて居る。即ちアメリカは日本を侵略者、條約違反者と見て居る。

日本は支那事變に臨んでこれを聖戰と確信して居る。こういった根本的の差異のあるのに拘らず、いづれの方から手を出したか知らないが、國交整調と云ふ事が兩國間に於て議せられて居る。實に不徹底極まるものである。此見地から彼は重慶政府を援助する事と、國交整調を企てる事とは恰も別問題の様にして居る。我國としては之は不可分のもので、事變を完遂すると言ふ事を第一義にして居るのである。斯かる根本的な矛盾が當初より明確にわかつて居るにも拘らず、此の問題を解決せずして巨億の富を抛ち、幾百萬と云ふ將卒を驅つて大陸に、又海に、空に、四年有半に亘つて戦つたのである。

此根本的の問題を解決して居つたならば、支那事變と云ふものも、とつくの昔に完遂したものである。思ひ切つたメスを此問題に加へなかつたので支那事變も、慢性病患者として、取扱はねばならぬ様になつた。

そして慢性病患者であるから、死ぬ氣づかひは無い。併し昨日もぶら／＼今日もぶら／＼誠にくつたものであると言ふ感を國民に與へしめる様な結果を來たした。

處が昨今に到つて、慢性病に至らしめた原因を充分に認識する様になつたかの如く思はれる。よつて之が拔本塞源的の治療法をとらんと企てた。それが爲にぶら／＼の慢性病患者が肺炎の徴候を見せる様に、突然發熱した。どうも肺炎にならなければならぬ經過がとられて來た。

總べてのものを差置き、總べてのことを盡して、此重態を切抜けようとして居るのが、現時の状態であると思はれる。即ち日米此處に正面衝突をして相争ふと云ふ事は肺炎の症狀を起したからである。若しさうなれば今迄の如く氣樂な、緩漫な態度では居られない。必ずや此危急を救はんが爲に、國民が政府當路者の激勵鞭撻を俟たずして、奮起するだらうと思はれる。各種の統制、各種の配給、消費、總べての闇の問題、此等のものは一瞬に消し飛んで、學國一致の毅然たる態度が期し得られると思はれる。

事變以來、英米の傲慢不遜の侮辱的態度は、國民の骨髓に徹して居る。必ずや我國民は其鬱積したる總力を發揮して太平洋上の妖雲を一掃し、大東亞の新秩序を確立し得ると私は信ずる。

此點に於て來栖大使が談判を不調に終らして、意氣昂然として、アメリカの地を引上げる事を、我々國民は期待して居る。

待つて居た、来る者が来た

来るものは遂に來た。去る八日の朝のニュースを聞いた時、私は何處かで既に大衝突は起つて居ると云ふ事を充分に豫感した。處が果して其の日から今日に至る四日間にして、我々の豫期したよりも更に一層大にして世界を驚殺せしむる戦果を見て、涙を流して喜んだのである。全く是は、一天萬乘の 天皇陛下の御稜威に歸するものと前線の將士も銃後の我々も、齊しく信する處で、帝國臣民の何物よりも誇とする處である。

日米の交渉は此の春以來行はれ、其の間、時には樂觀し、時には悲觀し、相當の迂餘曲折があつた。甚しきに到つては日米間に最早や戦争無しと樂觀した時期さへあつた。而して兩國に懸案となつてゐた具體的問題は、噂として多少我々に洩れて居た。例へば九箇國條約を我に強ふる事であるとか、或は大陸方面からの我將兵の撤退であるとか、三國同盟から離脱するとか云ふ様な事であつた。

開戦と同時に東條首相の聲明に依つて、此等の噂と云ふものは何れも眞實であつたと云ふ事が

判明した。併し其當時に於ては、此等の問題につき雙方の主張に夫々限度があつて、其の距離の歩み寄りに困難を感じるものであると、我々は考へたのである。例へば、撤兵にしても、全面的の撤兵ではなくて、南支であるとか、中支であるとか、英米權益の最も錯雜してゐる地域からの撤兵であるとか、又三國同盟にしても、全然離脱するのではなくて、或條件を付して三國同盟の効力を減退せしめるとか、さう云ふ點に存する様に解釋して居つた。果して然りとすれば、勿論我方よりは一步も譲れない。全く妥協の餘地のない問題である。其れ故に前回の夜話に於て、來栖大使が國交整調を不能ならしめて歸朝する事を國民全體が期待して居ると述べたのである。

況んや東條首相の聲明にある如くアメリカの主張する所は全面的の撤兵であり、三國同盟の離脱であり、南京政府の解消である所から見れば、何れの一つも日本が絶對讓歩する事の出来ない問題であつた事は明らかである。始から出来ない相談にかゝつたと見なければならぬ。即ち其處に根本的の相違があるので、アメリカ自身が手を引くより他には道が無かつたのである。手引かない以上は、私の所謂彼の政策と私の政策とは死の十字架に逢遇したもので、此の喰ふか喰はれるかの途を選んで、帝國は蹶然として立つたのである。

忝けなくも我々臣民は、宣戰の御詔勅を拜した。恐れ多くも陛下の御勇斷に萬斛の涙を揮つ

て感激し、敵國擊滅のため萬死を誓つた。又首相の帝國の立場と戰爭遂行に就ての力強い聲明に對しても我々國民は廟堂の諸公に向つて其の果斷なる決意に滿腔の謝意と敬意とを表し、海陸空軍の將士に滿腔の信賴をよせ、日夜武運の長久を默願する者である。支那事變は四年有半を経て慢性病の如くなり、來る日も、來る日も、憂鬱な天氣で何時晴れるか前途は容易に見透しがつかなかつた。此の對米英開戰によつて、始めて病患の根源にメスを加へる事が出来る事になつた。それ故に、宣戰の御詔勅を拜して我々國民は、來るものは來たと嚴肅緊張の中に、一齊に歡喜の情を色に又聲に現はしたのである。長い間の陰鬱な天氣が、一齊に晴れ上つて、雲霧四散した。今や國民は大なる希望を以て滿たされたのである。四年有半の疲勞も苦腦も全く忘れてしまつた。我々人生の行路に於て前途の希望程有難いものはない。國家に於ても亦然りである。而して此の希望は此の數日間の大戦果によつて彌やが上にも輝いて來た。

然し世界の二大強國を相手にして戦ふからには、相當の長期に亘る事を豫め覺悟しなければならぬ。我々の心身を斷じて疲勞せしめてはならない。一時的の興奮であつてはならない。堅忍持久、五年でも十年でも敵の倒れるまで、我々は其緊張を維持しなければならぬと覺悟すべきである。

香 港 陷 落

私が東大を出て始めて就職したのは仙臺の第二高等學校であつた。始めて彼の地を踏んだので物珍らしく仙臺の風物に接した。就中最も感興を引いたのは藩祖伊達政宗公の事跡であつた。

政宗公の詩

邪法迷邦唱不終

欲征蠻國未成志

圖南鵬翼何時奮

久待扶搖萬里風

が私の最も愛好する處で、友人を介して、當時の書家であつた市川萬庵先生に此詩の揮毫を乞ひ新世帯の借家の床の間に最初の軸物として掲げた。又現在の横濱高工時報の前身である鵬翼と言ふ雜誌の題名も此の詩中から採つたのである。

政宗は扶搖萬里の風を待つたが、彼には遂に其の風は吹き來らなかつた。僅に支倉常長をロー

マに遣して自ら慰めたかと思ふと、人をして悵然として其萬里の志を憐れましむるものがある。政宗の如き志を抱いて居た者は神代の昔より何時の時代にも、我國には絶えなかつたであらうと思ふ。

歐洲に行く人が其の航路を印度洋にとるならば、最初に寄港する處は上海である。初めて上海を見て誰でも英國の勢力の偉大なるに驚くであらう。

次の寄港地である英國の領土である香港に碇泊すると、其の驚は更に大なるものがある。それよりシンガポール、ペナン、コロンボと行くに従ひ東洋に於ける英國の勢力の牢として抜く事能はざるを感じしめる。

香港は千八百四十二年丁度今から百年前世界史上稀に見る殘虐暴戾の阿片戰爭の結果南京條約により支那より掠奪したものである。香港寄港の一夜デッキの上で籐椅子に身を寄せ南國の涼しい微風に吹かれながら前面の香港島を見れば、全くの不夜城である。滿城の歌唱は港内の金波を壓し、其豪華の姿は東洋無比を誇り英人の威力と支那人の無氣力を示し、孤客遊子をして杜牧の「商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花」の詩を想ひ起さしむるものがある。

如何にして英國勢力を東洋の海面から驅逐し得るか、然らずとも、我帝國の勢力が英と相伍し

て行かれるのは何時の事であらうか、と言ふ事に思ひ到ると感慨無量なるものがあつた。

私は三度香港に上陸した事があるが其の最初は明治四十一年であつた。其の時の乗船は佐渡丸といふ貨物と客船とを兼ねてゐた。船がシンガポールに着いた時マレー半島の特産物である錫を積み込んだが、事務長は日本の船に錫の様な貴重物資を積むのは今回が始めてであると言つて大に祝賀の意を表して居つた。當時如何に我海運界が幼稚なものであつたかと言ふ事が知れる。最後に香港を見た昭和元年も又同様の感がした。

それから僅か十五六年であるが、此の二十五日の晚香港陥落のニュースを耳にして、あの豪華の不夜城が終に皇軍の手に歸したのかと、往事を追想して無量の感慨に老淚滂沱たらざるを得ない。何といふ歡喜であらう。同時に英國民の心中を思ひやらざるを得なかつた彼等も感慨無量であらう。只其の方向が全く正反對であるのみである。一方皇軍はベナンを占領し、西の方印度洋を南の方マラツカ海峽を睥睨して居る。英の寶庫印度は半身不隨でシンガポールの運命又知るべきである。東の方に於てはウエーキ・グアムを占領し、四方からマニラ平原を目指して戦果を進めてゐる。フィリツピン又風前の燈である。

米は兎も角、大英帝國は今や將に土俵を削つて其の巨體を葬られんとして居る。我々一億が總

立ちとなつて此の戦果を見て居る。恐らく世界の他の國々も然りであらう。

我々は必ず勝つ事を信ずる。然し乍ら今日まで其の緒戦に於て得た戦勝に驕慢になつてはならない。一刻の油断なく今日の姿勢を微動だもせしむること無く押切らねばならぬ。

申すも畏れ多い事であるが、大正天皇様が未だ若い時代軍艦に御座乗遊ばされ、遠洲灘を御渡航になられた事があつた。恰も月明に會し其の御感慨を次の御製によつてお表はしになられた。

夜駕艤艫過遠洲

滿天明月思悠悠

何時能遂平生志

一躍雄飛五大洲

實に雄々しき御製で今日の時勢を畏れ多くも御達觀になつて居られた。大正天皇様が晩年御健康勝れさせ給はず、萬歳を全うし給はなかつた事は誠に残念な事である。御長命であらせられて、今日の戦果を御覽下されたならば、如何に御満足であらうと私は此の御製を拜して感激の涙に満つるのである。

眞珠灣の「討入り」

十二月八日の大東亞戰爭開戦當日、大本營海軍部より「本八日未明ハワイ方面の米國艦隊並に航空兵力に對し決死的大空襲を敢行せり」と發表せられた。僅か數語の發表であるが決死的大空襲と云ふこの六字によつて、詳細は分らずとも必然大戦果ならんと期せずして全國民は肉躍り血湧く感激の大増塙と化した。而してハワイ襲撃は一般國民の常識を超越した大飛躍であつた。恐らくは此の眞珠灣軍港の大爆撃は、帝國特有のもので世界の何れの國も眞似の出來ない作戦であり、わが國民的矜持を劃期的たらしめた。

私はこの大空襲に参加した將士の事を冥想すると、限りなき感慨が涙と共に腦底を去來し、彼の元祿の昔吉良邸に討入つた赤穂の四十七士や、落花粉々雪粉々の櫻田門外に井伊掃部頭の首を上げた水戸浪士を考へずには居られない。かう云ふ事蹟が世界の何れの國の歴史にありや、私は寡聞にして知らない、必ずや日本獨特のものであると考へるのである。

暗殺と云ふ事は、倫理學者や、教育者の眼から見れば、大罪惡と斷ぜられるであらう。理窟か

ら云へば容赦せらるべき廉はなからうと思はれる。随つて法律は當然その行爲を罪を以て處分するのである。其れにも關せずかの四十七士の場合に於ても又櫻田門外の場合でも、その當時に於て加害者に對する批判は區々まちまちであつた。殊に四十七士の場合には偶然にも佐藤直方、荻生徂徠、大宰春臺、淺見綱齋、伊藤東涯、室鳩巢等徳川時代の錚々たる學者が揃つて居つて、各々贊否の意見を闘はして居る。一方當時に於ける大衆の考と云ふものは、理屈拔きに四十七士に對し、又水戸の浪士に對して同情的であつた。

歴史は最後に斷案を下して、彼等を義士として、又志士として賞讃し、時代を經るに隨つてその擧が益々光彩を添へるに到つた。その一人一人が持つて居たであらうと思はれる缺點までも拭ひ盡され、徹頭徹尾超人的の域に達し、世道人心を千載の許に維持する龜鑑とまでなつた。

昔は詩聖シェークスピアがアントニオをしてシーザーを弔はしめ「人間が爲した罪惡は死と共に甦り、施した美德は骨と共に葬られる」と言つたが、果して眞實か、少くとも我國の場合に於ては全然その反對である。徳川時代にその例を求めずとも我々の時代に於て五・一五事件と二・二六事件がある。私は五・一五事件の時は壇上に起つて「私をして裁判長たらしめたなら辭表を懷にして、彼等に無罪を宣告し直ちに裁判官の職を擲つて世間から隱遁する、同時に被告をして

自決に誘導せしむるであらう」と述べた。二・二六事件の時には「遭難の大官連の遺骸がお氣の毒にも菰に覆はれて路傍に放置せられて未だ葬つてゐない」と書いた事を記憶してゐる。社會はまだ判決を下して居らない。判決は潜在して居る、其處に何等か時代の變化が想起せられるのである。これから後の歴史家が如何なる歴史的判決を下すものであるか待つより外はない。

倫理學者や、教育家の判斷のみでは、そこに何物か割切れない所のもの存在する事は免れない様に思へる。四十七士や、櫻田門外の變の當時と同じ様に、此等の事件の場合に於てもいろいろ辯論が發表されてゐる。併し表面に立つて之を批議してゐる所のは、専ら倫理的根據からきて居たやうに記憶してゐる。爾來數年を経つてゐるけれど未だ之に對して眞に大衆を満足せしめ、心服せしめる所の判決は、世の中には出て居ない様な感じがされる。

私には今回の大戦の初めに於ける殊に眞珠灣に對する決死的の襲撃と云ふものは襲撃と云ふよりは寧ろ義士の討入り、浪士の討込みと云ふ事を思ひ起さしめる。大和魂の仕業である。我大和民族でなければ出来ない攻撃であつたらうと考へる。之は我國の民族の尊い傳統であると考へざるを得ないのである。倫理學者が如何に判斷しようと、教育者が如何に考へようと、時代が如何に變化しようと、我大和民族には、遂に滅びざる命脈である。

百八十度の回轉

大東亞戰爭が勃發するや忽にして全世界を驚倒せしめた大戦果が擧げられた。爾來三ヶ月にも足りないが、香港、マニラ、新嘉坡等の要所が次から次へと陥落し、戦線は東西南北廣袤幾千キロに達し、四方の戦線より勝報踵を接して、日として來らぬことがない。制空制海の權が既に獲得せられ、米英の勢力が遠く洋を越えて彼岸に驅逐せられたかの感がある。

今年の今頃は丁度我芳澤謙吉氏が特派大使として南洋に派遣せられ、蘭印當局と通商協定の交渉最中であつた。恰も同時に内地では帝國議會が開會中で大東亞共榮圈と云ふ言葉が飛び出した。其當時までの東亞共榮圈と云ふ國民の視野が段々と躍進して、元氣よく大東亞と進展したものであつた。

蘭印も此大東亞と云ふ傘下に包容されたものと感づいた蘭印當局は、けしからぬ不届千萬の日本の態度であるど、滿面朱を注ぎつゝ芳澤大使に喰つてかゝつた。此が爲に三週間も會談が中止せられ、ひどく大使を手古すらしたものであつた。結局英米の虎の皮を着た弱小な蘭印の爲、殘

念ながら撃退せられた。

其れから僅か一々年を経過した今年一月の帝國議會は如何なる光景を呈したか。東條首相は議會の壇上から世界の隅々まで響き渡る雄渾無雙の聲明をした。フィリッピンよ、ビルマよ、印度よ、汝等が欲するならば獨立せよ、帝國は喜んで汝等を助けん。濠洲よ英國の羈絆を脱し大東亞共榮圈の傘下に来れ、干載一遇の此好機を逸してはならないと。

内閣の制度あつて以來總理大臣の椅子に坐つた人は約三十人ある。併し誰れが威風堂々と世界に向つて帝國の所信を忌憚なく聲明したか。此れを僅か一々年前の狀態に比較すれば全く隔世の思ひがする。舊臘八日の宣戰の御詔勅と其日の大戦果は正に我帝國をして百年一世紀の飛躍を遂げしめた感がある。

帝國の舞臺は一大回轉をした。舞臺は最早東亞でもなければ、又大東亞でもない。全世界を舞臺として立つた。正しく百八十度の回轉である。役者は全く入れ代つた。東條首相は此世界的の新舞臺に新裝を凝らして颯爽として躍り出でた感がある。我青年層は否應なしに此新舞臺に引き上げられた。満場總立ちで我々は歡聲を擧げ、拍手を送つて居るのが現狀である。我青年よ此稀代の名優東條と、一舉手一投足も能く呼吸合致絶世の名劇を幕になし得るや否耶。

東條首相の東洋被壓迫國に對する聲明は恰も彼等に革命を宣したかの感がある。革命の第一義は破壊でなければならぬ、徹底的の破壊である。幾世紀に亘る英米の施設と、其根柢に浸潤する思想とを完膚なきまでに、又抜本的に破壊しなければならぬ。修正は許されない、況んや妥協おやである。修正や妥協は必ず禍を後日に残すことを牢記すべきである。

破壊は青年獨特の任務で老大の能くする處でない。人或は言はん破壊は何人にも出来る事である、建設は至難の事に屬す、徒らに破壊を叫ぶは實に無責任極まるものであると。老大の言ふ所は何れの世でも同じくり返へしごとである。破壊は勇氣を要する、其勇氣は青年でなければ持ち合せがない、全く貴重なものである。建設は破壊に伴つて來る事は古今の歴史が示して居る。